

おお また ざわ
大 又 沢 II 遺 跡

—東北電力宮古ヘリポート移設工事関係発掘調査報告書—

2003.3

岩手県宮古市教育委員会

大又沢Ⅱ遺跡

—東北電力宮古へりポート移設工事関係発掘調査報告書—

2003.3

岩手県宮古市教育委員会



18图 1



18图 2



19图 4



19图 6



1. 10号土坑出土土器及び出土状況



2. 3号竖穴状遺構炉跡出土状況



3. 中坩火山灰堆積状況 (第6图No.5)

序

岩手県宮古市は本州最東端の市で、東は太平洋に面し北上山地から閉伊川が市の中央を流れ、広大な山々に囲まれた自然豊かなまちです。古くから発見された遺跡は今日では460余ヶ所にのぼり、貝塚や館跡など多様な遺跡は私たちの生活の場と同居していると言っても過言ではありません。しかしながら、私たちが快適に暮らしていく上では遺跡という先人の生活跡を変えざるを得ないこともあります。それと同時に私たちには遺跡の所在を詳細に確認し記録・保存、活用する必要があり、市民へ埋蔵文化財についてより理解を深めていけるよう推進することが形あるかけがえのない財産を後世に伝えていく手段の一つであると考えています。

本書は東北電力株式会社岩手支店のヘリポート移設工事に伴う大又沢Ⅱ遺跡の発掘調査の結果を報告するものであります。市のほぼ中央部に所在する当遺跡は山間部に囲まれた緩斜面に位置しますが、近隣を含めても調査例の少ない地区で調査が行われました。今回の調査で縄文時代の長きにわたる遺構・遺物と弥生時代の遺物が出土したことは今後の研究に寄与するだけでなく、縄文時代後期前葉の資料が宮古市の歴史の空白を埋めるほど貴重であり、大いに活用されるものと考えられます。

最後に、今回の調査に御協力いただきました東北電力株式会社岩手支店はじめ関係者の方々に対し厚く感謝申し上げます。

平成15年3月

宮古市教育委員会
教育長 中屋定基

例 言

1. 本書は、宮古市千徳字大又に所在する大又沢Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、「Ⅰ 概説編」と「Ⅱ 本編」から成る。概説編では調査報告の要旨である。本編は通常の報告書の体裁をとっている。
3. この調査は、東北電力宮古ヘリポート移設工事に伴う記録保存を目的とした緊急事前調査として実施されたものである。
4. 調査主体は宮古市教育委員会であり、発掘調査を社会教育課の江口が担当し竹下が補佐した。整理作業と報告書の作成は江口が担当し、その他担当職員がこれを補佐した。
5. 調査座標は、平面直角座標第Ⅹ系に基づいた。また、レベル数値は標高値を示している。
6. 土層観察及び文中の色調表記については、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著 1990年度版）を使用した。
7. 図版中のスクリーン表示は以下のとおりである。
遺構図版 ・  石 ・  焼土
遺物図版 ・  繊維混入 ・  赤彩 ・  敲打磨石、敲打石の機能面と磨面
8. 図版中の記号、略号の表示は以下のとおりである。
豎…豎穴状遺構 D…土坑 K…攪乱 S…礫 P…土器
9. 遺物の観察表はすべて肉眼観察により作成したものである。
10. 出土遺物、発掘調査資料は宮古市教育委員会で保管している。

目次

巻頭カラー写真

序

例言

目次

I 概説編	1
II 本編	2
1 序章	2
(1) 本調査に至る経過	2
(2) 本調査の経過	2
(3) 調査体制	3
2 立地と環境	4
(1) 遺跡の位置と立地	4
(2) 周辺の遺跡	4
3 調査内容	7
(1) 調査地区	7
(2) 基本層序	7
4 検出された遺構と出土遺物	11
(1) 竪穴状遺構	11
(2) 土坑	17
(3) 倒木痕	32
(4) 遺構外出土遺物	33
5 調査のまとめ	61
(1) 遺構	61
(2) 遺物	63
(3) III群1類、2類土器について	65
(4) 総括	66
参考文献	67
報告書抄録	76

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第2図	地形分類と遺跡分布図	6
第3図	調査地区と周辺地形	7
第4図	調査範囲と地形図	8
第5図	遺構全体図	10
第6図	基本土層図	10
第7図	1号竪穴状遺構実測図	12
第8図	2号竪穴状遺構実測図	12
第9図	1・2号竪穴状遺構出土遺物	13
第10図	3号竪穴状遺構実測図	14
第11図	3号竪穴状遺構出土遺物	14
第12図	3号竪穴状遺構炉跡実測図	15
第13図	3号竪穴状遺構炉跡出土遺物	16
第14図	1～3号土坑実測図	18
第15図	8～11号土坑実測図	19
第16図	8号土坑出土石器	20
第17図	9号土坑出土遺物	21
第18図	10号土坑出土遺物(1)	22
第19図	10号土坑出土遺物(2)	23
第20図	12号土坑実測図・埋設土器	25
第21図	24号土坑実測図	25
第22図	24号土坑埋設土器	26
第23図	4～7、13～16号土坑実測図	28
第24図	17～23、25～27号土坑実測図	29
第25図	28～35号土坑実測図	30
第26図	土坑出土遺物	31
第27図	倒木痕出土遺物	32
第28図	遺構外出土遺物(1)	35
第29図	遺構外出土遺物(2)	37
第30図	遺構外出土遺物(3)	39
第31図	遺構外出土遺物(4)	41
第32図	遺構外出土遺物(5)	43
第33図	遺構外出土遺物(6)	45
第34図	遺構外出土遺物(7)	47
第35図	遺構外出土遺物(8)	48
第36図	遺構外出土遺物(9)	49
第37図	遺構外出土遺物(10)	51
第38図	遺構外出土遺物(11)	52
第39図	遺構外出土遺物(12)	53

第40図	遺構外出土遺物(13)	55
第41図	遺構外出土遺物(14)	56
第42図	遺構外出土遺物(15)	57
第43図	3号竪穴状遺構炉跡遺物分布状況	62

表 目 次

第1表	土坑計測表	27
第2表	遺構外出土土器観察表	57
第3表	遺構外出土土製品観察表	60
第4表	遺構外出土石製品、石器観察表	60

写 真 図 版

カラー写真	1. 10号土坑出土土器及び出土状況
	2. 3号竪穴状遺構炉跡出土状況
	3. 中振火山灰堆積状況
	(第6図No.5)
PL1	1. 調査区近景
	2. 調査区北東部遺物包含層出土状況
	3. 1号竪穴状遺構完掘
	4. 2号竪穴状遺構検出状況
	5. 3号竪穴状遺構完掘
PL2	1. 3号竪穴状遺構炉跡出土状況
	2. 3号竪穴状遺構炉跡完掘
	3. 1～4号土坑完掘
	4. 2号土坑完掘
	5. 8・9号土坑完掘 10号土坑出土状況
PL3	1. 8号土坑完掘
	2. 9号土坑完掘
	3. 10号土坑出土状況
	4. 10号土坑「P1」土器出土状況
	5. 10号土坑完掘
	6. 12号土坑出土状況
	7. 12号土坑土層断面
	8. 包含層内出土状況
PL4	出土遺物(1)
PL5	出土遺物(2)
PL6	出土遺物(3)
PL7	出土遺物(4)

I 概説編

はじめに

大又沢Ⅱ遺跡は西ヶ丘団地、近内地区を通る市道を林道へ向かって進み、食肉処理センターから約500m離れたところにあります。今回の発掘調査は、東北電力株式会社が田鎖地区にあったヘリポートを大又へ移設するために工事をすることから、失われる部分を事前に行うものです。遺跡は人里離れた山間部にありますが、調査によって縄文時代の生活跡や土器、石器が確認されました。当時の土地利用がどのようなものであったかこれから見ていきましょう。

調査の成果

発掘は表土を重機で除去し、その下からは調査員と作業員の人力で進めました。調査を開始してすぐに土器片が出土しました。さらに土を丁寧に削ると人々の生活を残す竪穴や建物跡（遺構）を発見しました。遺構の種類は竪穴状遺構、土坑に分かれます。

竪穴状遺構は竪穴住居跡に似た形をしながらも炉や柱穴が無い遺構のことで、便宜上の名称です。調査内で3軒確認しましたが、どれも上部が削り取られているため、残りは良くありませんでした。1号竪穴状遺構は1本の柱穴がありましたが炉は見つかりませんでした。2号竪穴状遺構は一部が残っているだけです。3号竪穴状遺構は床と炉がありましたが、壁や柱穴は見つかりませんでした。3号竪穴状遺構の炉からは100点以上の土器片が炉を覆い被さるように集中して出土しました（→Ⅱ 本編の写真図版P L 2の1）。また、炉の上からはクリと思われる木の実が炭化した状態で出土しました。

土坑は35基確認しました。性格が分からないものもありますが、特色のある土坑も見つかります。1～3号、8、9号土坑は専門的には「フラスコ状土坑」と呼ばれ、間口が円形か楕円形をして断面がフラスコ形または寸胴形をした土坑です。貯蔵用に掘ったものと考えられ、土器や木の実などの貯蔵具や貯蔵物が残っている場合もあります。1～3号土坑はほぼ等間隔で確認されました（→Ⅱ 本編の写真図版P L 2の3）。8号土坑では壁際から石鎌が出土しました。9号土坑の隣の10号土坑は大形の縄文土器片が集中して出土した興味深い土坑です（→Ⅱ 本編の写真図版P L 3の3～5）。この集中して出土した土器片は接合作業の結果、1つの土器の半分になりました（巻頭カラー写真図版の1）。土器片はまるで椀状にしていることや、自然に土器が土によって潰れているとは考えられないことから、当時の人が使えなくなった土器を破片にして置いたものと考えられます。

土坑はこの他、縄文土器が埋まった状態で見つかった土坑（12号土坑）や、焼土の上に縄文土器が横に置いてある土坑（24号土坑）がありました。12号土坑の土器は斜めに置いてあり、焼土も確認されました（→Ⅱ 本編の写真図版P L 3の6、7）。両方の土器は赤く焼けていることから、土器を置いて火を使っていた土坑と考えられます。

調査の結果

今回の調査では縄文時代の遺構が確認されました。さて、遺構の時期ですが、10号土坑で出土した大形の土器は文様の特色から縄文時代後期の土器です。3号竪穴状遺構は炉から出土した土器片の中に10号土坑の大形土器と似た土器片が出土していることから同じく縄文時代後期と考えられます。他の遺構の時期は不明ですが、縄文時代後期の遺構があると考えられます。しかし、この他に出土した遺物には縄文時代前期、中期、晩期、弥生土器があります。このため、調査内あるいは周辺には長年にわたって人々が生活していた跡があるのではないかと考えられます。

Ⅱ 本 編

1 序 章

(1) 本調査に至る経過

宮古市大又沢Ⅱ遺跡の発掘調査は、千徳字大又におけるヘリポート建設工事に伴い実施されたものである。平成11年10月、宮古市教育委員会は土地占有者かつ工事主体者である東北電力岩手支店から当時常設ヘリポートとして使用していた田鎖地区の宅地化に伴う大又への移設工事の計画を知ることとなった。建設予定地は周知の遺跡である大又沢Ⅱ遺跡（宮古市遺跡コードLG22-2226）の範囲外であったが、予定地が沢沿いの緩斜面であることと、大又沢Ⅱ遺跡と同様な立地であることから、埋蔵文化財の分布する可能性がある旨を伝えた。同年12月、教育委員会が現地踏査を実施した結果、現地は四面に開田された休耕田で遺物は採集されなかったが、隣接の畑地で縄文土器片を採集したため、試掘調査によって事前に遺構・遺物の有無の確認を要する旨を工事主体者に回答した。12年3月と4月、予定地での埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、試掘調査を実施することとなり、翌13年9月から同年10月まで、予定地に5m幅のトレンチを井の字形に設定して遺構・遺物の有無を調査した。調査の結果、予定地には縄文土器・石器の分布がみられ、縄文時代の遺構・遺物包含層の存在が確認された。

教育委員会は試掘調査の結果をもとに工事主体者と協議を重ね、予定地は埋蔵文化財包蔵地であり、永続性の強いヘリコプターの離着陸部分とそれに付帯する部分については、発掘調査が必要である旨を回答し、その他の部分のヘリポート建設工事については埋蔵文化財包蔵地の保存を配慮されたい旨を伝えるとともに、工事範囲の変更並びに盛土による掘削範囲の縮小の可能性について工事主体者と協議した。協議の結果、掘削の高さを検討することとなり、教育委員会はそれに応じた発掘調査範囲を決定し本調査を実施するに至った。

教育委員会では、試掘調査の結果に基づき、工事予定地とその周辺を含め周知の大又沢Ⅱ遺跡の範囲を拡張・更新し、平成14年1月9日付、教社第225号で文化財保護法第57条の6第1項の規定による遺跡発見の届出書を岩手県教育委員会に通知している。発見通知を受けた県教育委員会からは平成14年3月1日付、教生第8-43号で「工事着手前に発掘調査を実施する」旨の指導通知を受けている。

東北電力岩手支店では、埋蔵文化財包蔵地「大又沢Ⅱ遺跡」に係わる工事について、平成14年3月26日付、東北電岩支用第274号で文化財保護法57条の2第1項の規定による届出書を提出し、これに対して教育委員会では、遺跡発見通知と同様の旨の県教育委員会からの指導通知を交付している。

調査の実施にあたっては、平成14年4月2日付けで「埋蔵文化財に関する協定書」を宮古市と東北電力岩手支店との間で取り交わし、調査委託、調査費の負担、埋蔵文化財の取り扱い等の協定を結んでいる。これに基づき、両者は「埋蔵文化財調査委託契約」を締結し、宮古市の受託事業として調査の着手に至ったものである。

(2) 本調査の経過

発掘調査は、4月8日に開始された。45m×45m範囲の工事地区のうち、対象となる調査地区の面積は1,791㎡である。試掘調査で開田による切り盛りの状況が土層堆積状況により把握されたため、

表土層、開田時の盛土を重機により除去した。表土、盛土の除去の際、北西の休耕田は拳大以上の礫が厚く盛られていた。表土除去の結果、盛土は北西部を除き全体的に厚くはないが、かなり削平されていたことが分かり、特に南部では深く削られていた。表土除去後、国家座標に基づき5mごとにグリッド杭を設定し、遺構・遺物の平面図を記録した。遺構検出作業は文化層ごとの検出に努めたが、開田による遺物包含層の削平と基盤面の起伏の激しさから困難であった。結局、遺物包含層の掘り下げは文化層ごとに行なうことにし、遺構の検出は検出面での層位を記録するに止めた。

先述のように、調査区内の遺物包含層はかなり削平された状態であるため、表土除去直後の遺構確認作業で遺構を何基か確認した。試掘調査では竪穴住居跡と思われた落込み2ヶ所、土坑20基が確認されたが周辺においても同様の遺構または新しくフラスコ状土坑を確認した。しかし、残存状況は良いとはいえ、明らかに上部が削平されていた遺構があった。調査の結果、竪穴状遺構が3軒、土坑35基が確認された。因みに、試掘調査時に竪穴住居跡と思われた遺構は倒木痕あるいは竪穴状遺構であることが確認された。

また、これらの遺構の下の層からも新たに遺構を検出したことから、遺構の時間差を把握することもできた。

遺構精査終了後、1m×1mの範囲で13ヶ所に深掘りを行なう。南北に傾斜しているものの、起伏に富んだ地形のため、すぐに礫層に達するところもあれば、縄文時代前期前葉に降下した中振火山灰が厚く堆積したところもあった。深掘り地点では遺物は見られず、火山灰層の下に遺物包含層が確認されないことから、深掘り作業を中止し調査区内の地形測量、基本土層の層位関係、土層注記を行ない、7月10日、本調査は終了した。

(3) 調査体制 (平成14年度)

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査総括	伊藤賢一	宮古市教育委員会社会教育課長	
事務担当	小本 完	〃	社会教育課長補佐兼文化係長
	箱石憲市	〃	社会教育課社会教育係長
調査員	竹下将男	〃	社会教育課主任文化財調査員 (調査)
	高橋憲太郎	〃	社会教育課主任文化財調査員
	鎌田祐二	〃	社会教育課主任文化財調査員
	加納由美	〃	社会教育課文化財調査員
	安原 誠	〃	社会教育課文化財調査員
	長谷川真	〃	社会教育課文化財調査員
	阿部 豊	〃	社会教育課埋蔵文化財調査員
	江口邦泰	〃	社会教育課埋蔵文化財調査員 (調査、報告書担当)
発掘調査作業員	姉石良夫	阿部修一	在原正利 島田義道 鳥居義文 山根一郎
資料整理作業員	越田真理子	崎田妙子	

なお、発掘調査にあたり、地権者の川目靖子様から多大なるご協力を賜りましたことを記します。

2 立地と環境（第1、2図）

（1）遺跡の位置と立地

宮古市は岩手県の東端、陸中海岸のほぼ中央部に位置した人口約54,000人からなる沿岸の拠点都市の一つである。盛岡市から東へ約100kmの距離にあり、北は田老町と岩泉町、西は新里村、南は山田町と接する。総面積は339km²で、南北と東西の最長幅はともに約20kmあり、海岸は入り組んだ地形が多いためアス式海岸を形成し、市の南東は本州最東端である銚ヶ崎を先端とする重茂半島が角状に太平洋へ突き出し、宮古湾が深く入り込んでいる。

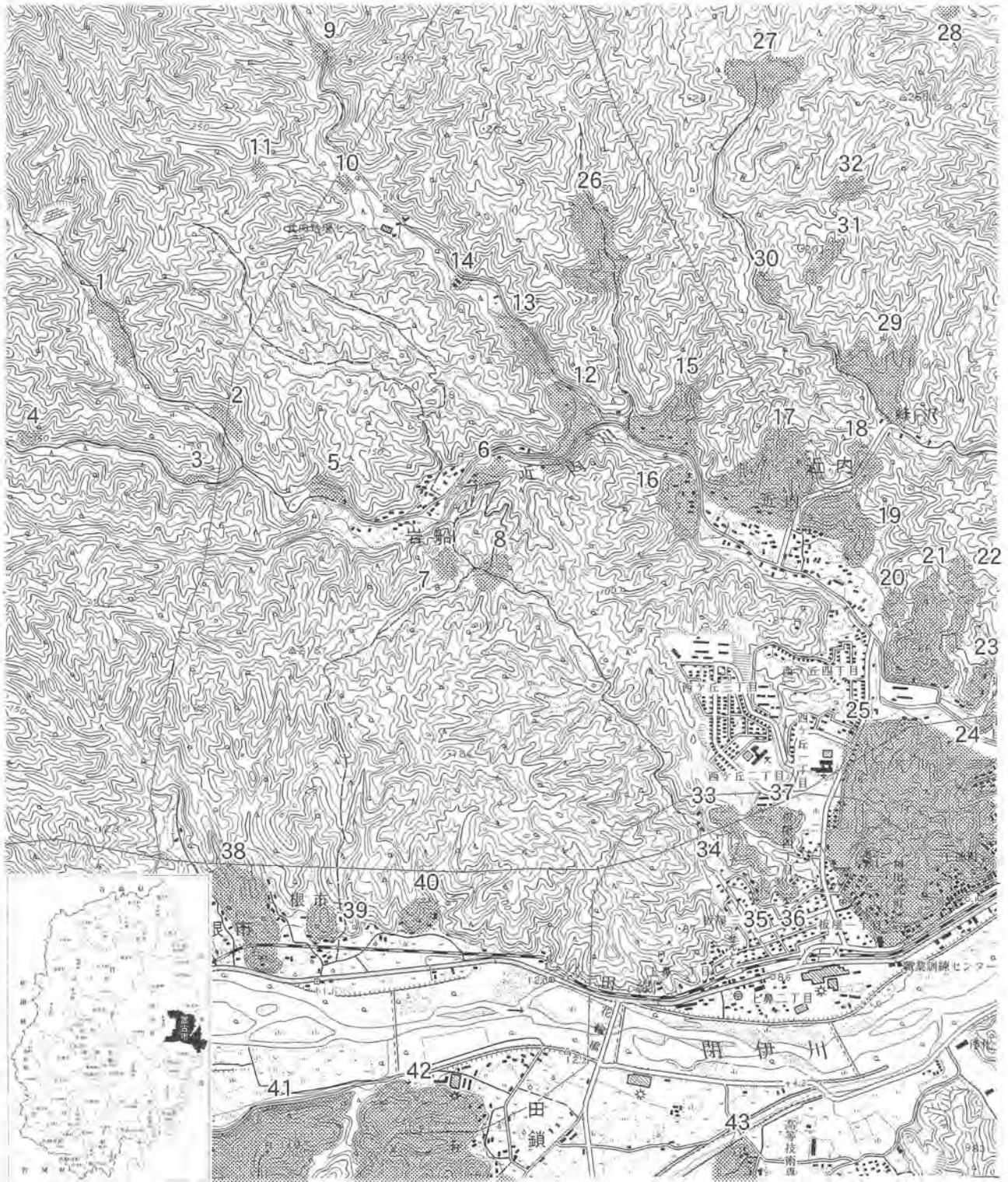
市全体の地形はおおよそ宮古湾へ流れる河川周辺の低地帯とその周辺を覆う丘陵地と山地帯からなる。最高位731mの十二神山を代表とする山地帯と起伏量100～200mからなる丘陵地が多くを占め、閉伊川、八木沢川、津軽石川流域に低地、砂礫段丘が僅かにみられる。特に、川井村から宮古湾へ流れる閉伊川は、ほぼ市の南北を分断し、その支流である山口川、近内川流域では閉伊川低地が広がっている。山地の縁辺にある丘陵地は小河川により樹枝状に開析されている。現在確認されている市内の遺跡は469ヶ所を数え、そのほとんどは低地と丘陵地に所在しているが、山地の縁辺部にも点在している。

大又沢Ⅱ遺跡はJR東日本山田線宮古駅から北西へ約6km離れたところにあり、閉伊川の支流である近内川の上流、大又沢の右岸に位置した砂礫段丘上の遺跡である。沢とは最大で約10mの高低差があり、北から南へ緩やかに下がっていく緩斜面に立地する。標高は130～140mあり、周囲は黒森山山地に囲まれている。遺跡の範囲は南北約350m、東西約200mと南北に長く広がっているが、同様な地形が続いていることから、さらに範囲が南北へ伸びる可能性もある。山間部ながらも緩斜面が広がる当遺跡周辺は現在、田畑として利用されているが、奥地にあるため古くからの土地利用の詳細は分かっていない。昭和36年に起きた「三陸フェーン大火」による火災は当遺跡とその周辺に被害をおよぼし、鎮火後の復興作業、林道の建設により原状が改変されたと考えられ、その後は開田が行われ現在に至っている。

（2）周辺の遺跡

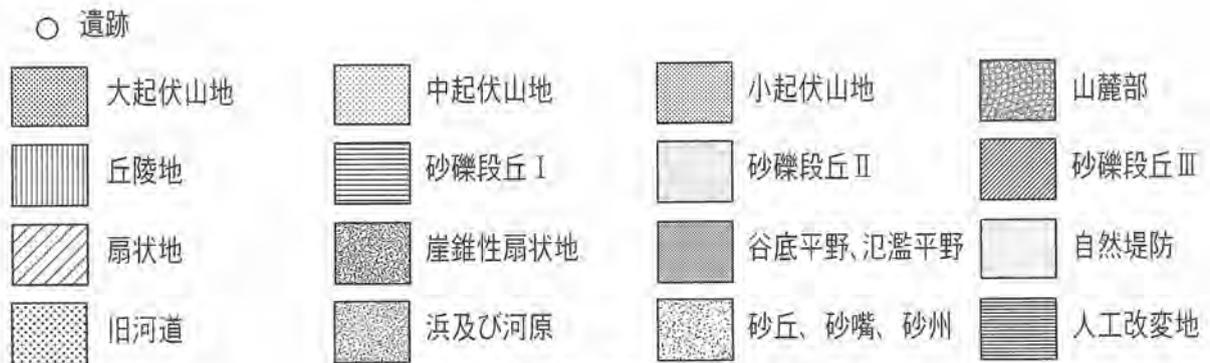
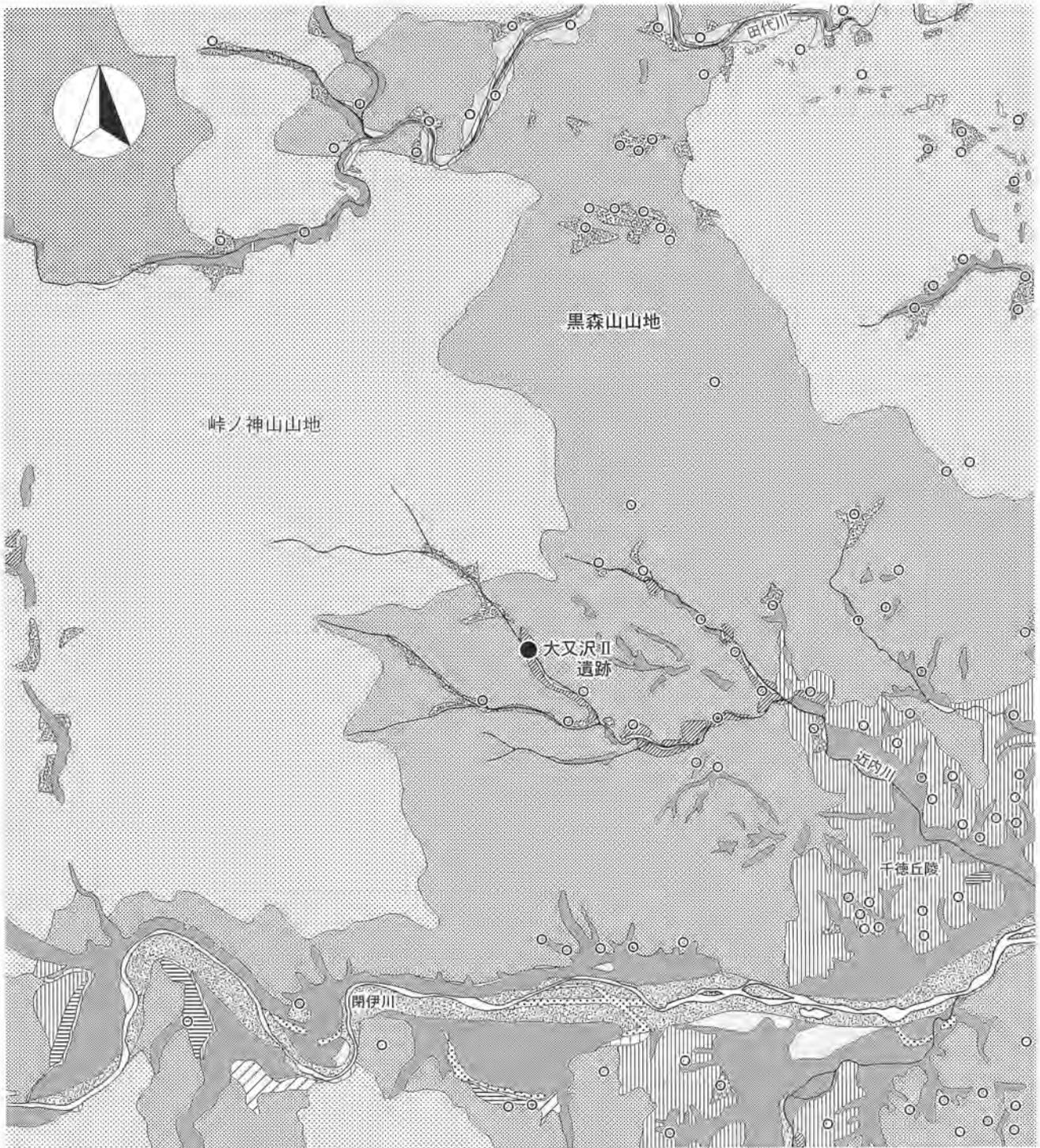
宮古市のほぼ中心に位置する大又沢Ⅱ遺跡は今回が初めての調査である。隣接遺跡でも調査例はないが、分布調査により遺物が採集されている。大又沢Ⅱ遺跡、大又沢Ⅰ遺跡では縄文土器、土師器が採集され、岩船遺跡では縄文土器の他、羽口や鉄滓といった鉄生産関連遺物が採集されている。近内川流域では緩斜面のある左岸で遺跡が密集し、中でも近内中村遺跡ではこれまでの調査により縄文時代中期から晩期の堅穴住居跡、フラスコ状土坑、堅穴の墓跡、配石が多数発掘されている他、古代の堅穴住居跡、中世の堅穴住居跡と炭窯、近世の掘立柱建物跡が発掘されている。また、標高70～80mの丘陵上に位置する近内館と近内大館はともに中世の城館遺跡で、近内館では平安時代の集落跡が発掘され、近内川と閉伊川に挟まれた千徳城遺跡群では古代の城館跡が発掘されている。これらの周辺遺跡でも縄文土器、土師器、須恵器、鉄生産関連遺物などが出土している。

近内川流域周辺では、縄文時代晩期大洞C₂式期の遮光器土偶が採集されたアサナイ沢遺跡、縄文土器や鉄生産関連遺物が採集されている蜂ヶ沢Ⅰ遺跡がある。閉伊川左岸では根市地区で遺跡が集中し、縄文土器が採集される他、中世の城館遺跡である根市館が所在する。これに面した右岸においては、蕨手刀が見つかった松山館や中世の城館遺跡である老木館、田鎖館が所在している。



- 1 大又沢Ⅱ 2 大又沢Ⅰ 3 新田沢Ⅰ 4 新田沢Ⅱ 5 岩船 6 与茂子Ⅰ 7 与茂子Ⅱ
- 8 桜木 9 ヒビチカ 10 セネガ沢Ⅰ 11 セネガ沢Ⅱ 12 柵館Ⅰ 13 柵館Ⅱ 14 柵館Ⅲ
- 15 菅ノ沢 16 横川 17 近内中村 18 近内跡場 19 近内館 20 近内白石Ⅰ 21 近内大館
- 22 近内白石Ⅱ 23 近内寺本Ⅰ 24 近内寺本Ⅱ 25 千徳城遺跡群 26 アサナイ沢 27 黒子沢
- 28 馬子舞Ⅰ 29 蜂ヶ沢Ⅰ 30 蜂ヶ沢Ⅱ 31 蜂ヶ沢Ⅲ 32 蜂ヶ沢Ⅳ 33 室井沢Ⅰ
- 34 室井沢Ⅱ 35 板屋Ⅰ 36 板屋Ⅱ 37 神田沢 38 根市館 39 板ノ沢 40 下根市
- 41 老木館 42 田鎖館 43 松山館

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:10,000)



第2図 地形分類と遺跡分布図 (1 : 50,000)

3 調査内容（第3、4図）

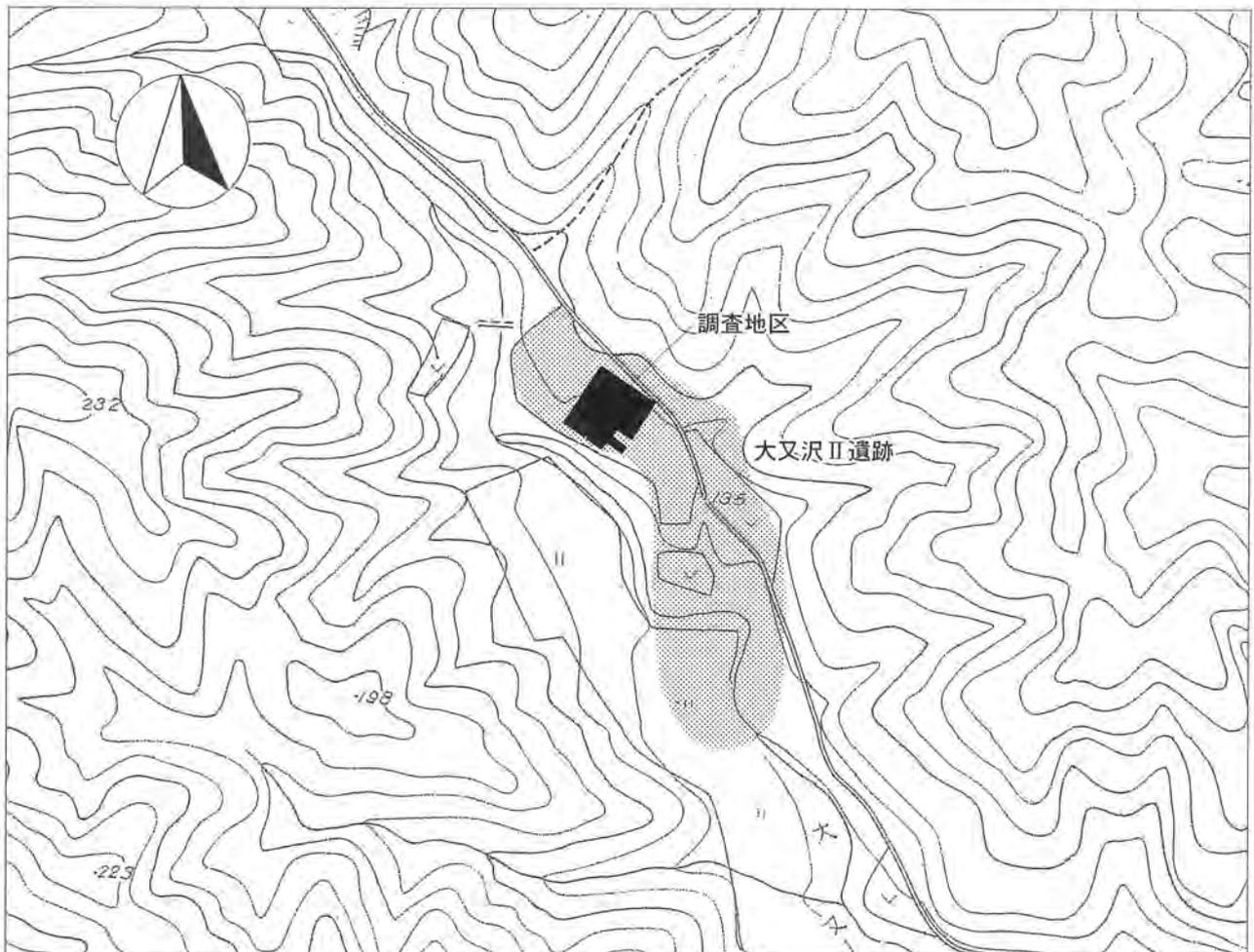
（1）調査地区

調査地区は字大又41-3、4、6に所在する。北西から南東へ流れ近内川へ続く大又沢と呼ばれる沢と岩船地区から北西へ続く林道に挟まれた緩斜面の一部で、沢と調査地区との落差は約10mあり、林道と現地との落差は2～3mある。調査前は四面からなる休耕田で、北の一面が標高141.4mと最も高く、東西の二面がほぼ同じ高さで、南の一面が最も低く標高は139.7mである。周辺は調査地区と同様の休耕田で、北は山を切り崩して造られた林道である。このため、遺構、遺物が隣接にも続いている可能性がある。

旧来の大又沢Ⅱ遺跡では縄文土器、土師器が採集されていたが、調査地区では表面採集の遺物はなかった。しかし、試掘調査で盛土を除去した結果、遺構と縄文中期～晩期の遺物包含層が確認されており、縄文時代を中心とする遺跡であることが分かった。

（2）基本層序（第5、6図）

堆積土の土層観察は遺構精査終了後、1m四方の小区画を任意に設定し断面で行なった。また、試掘調査においても土層観察を行っている。観察の結果、調査区の西～南西部では表土から30cm下で基盤層と思われる礫層に到達した。一方、東部では遺物包含層の下に縄文時代前期前葉に降下したとされる中振火山灰が堆積していた。つまり、調査区全体では、北から南へなだらかに傾斜しているものの、



第3図 調査地区と周辺地形（1：5,000）

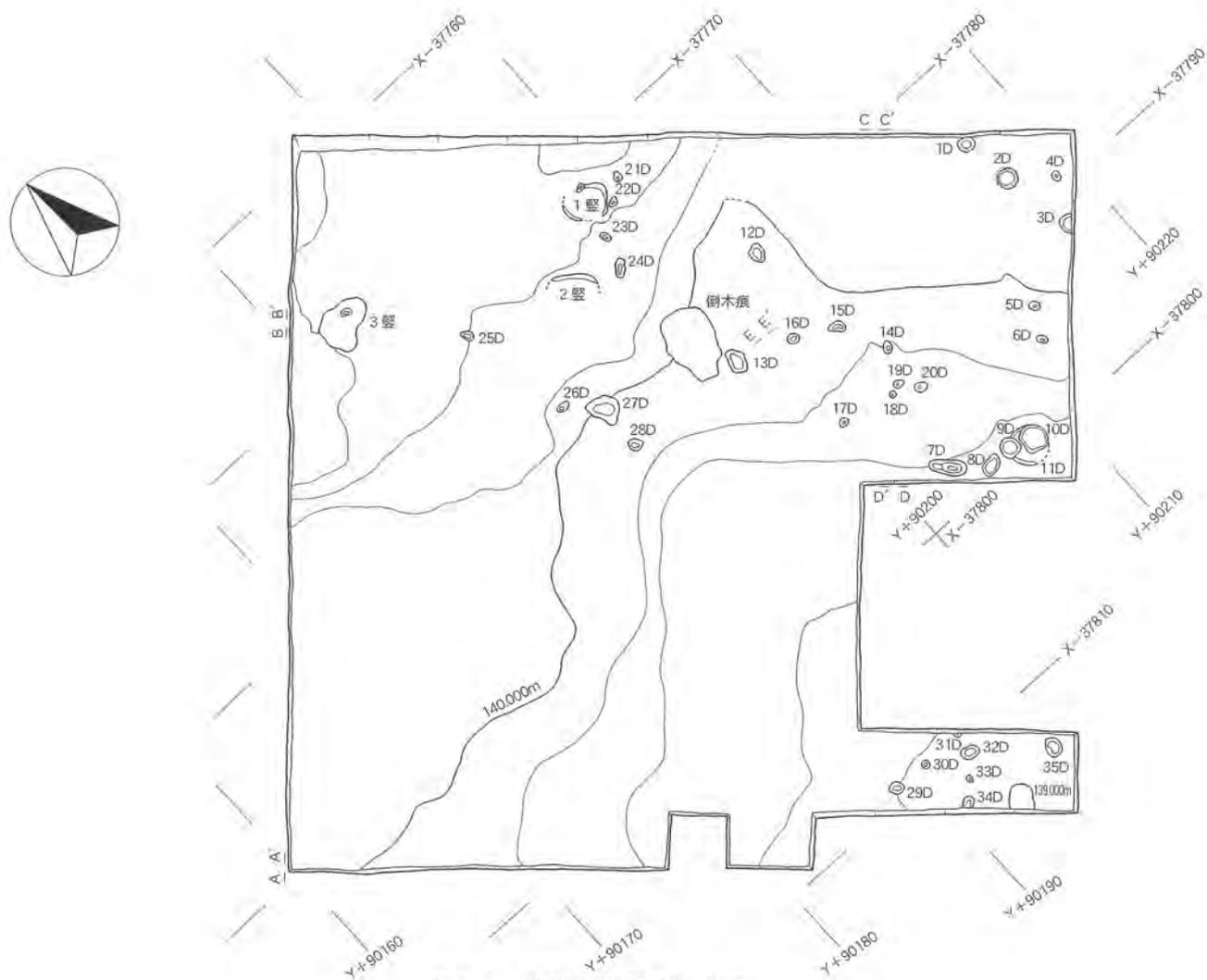


第4図 調査範囲と地形図 (1:500)

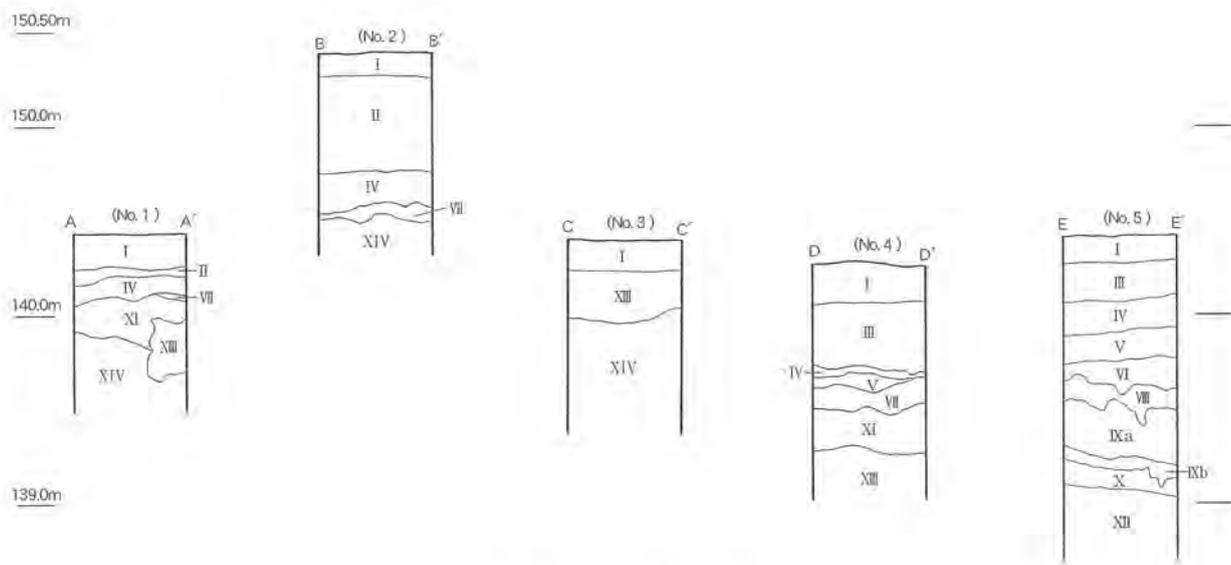
谷が入り込んでいる所があり、起伏の強い地形といえる。

以下、基本土層の内容について記述する。

- I層 黒褐色シルト質埴土(10YR 3/1)を基本土とする。水田時の耕作土と思われる。径3~5mm大の礫を多く含む。硬質で粘性はなく、ぼそぼそしている。
- II層 拳大以上の角礫からなる石積み層である。開田時の整地層と思われる。調査区の西部にみられ、南西部では5cmと薄い、北西部では40~100cmと厚い。整然と積まれている。
- III層 開田前の表土層である。花崗岩が風化してできた真砂土である。硬質でパサパサしている。
- IV層 黒褐色シルト質埴壤土(10YR 3/1)を基本土とし、褐色土粒を2%混入する。遺物包含層で、縄文土器、弥生土器、石器が出土しているが、時期にばらつきがあり、III層との関係から撹乱を受けていると考えられる。層厚は10~30cm、調査区のほぼ全面を覆うが、北東部と西部の一部は削平されている。硬質で粘性はややある。
- V層 黒褐色シルト質埴壤土(10YR 2/3)を基本土とし、褐色土粒を5%混入する。層中に中振火山灰塊を含むところがある。遺物包含層で、縄文土器と石器が出土している。やや硬質で、粘性はややあり。調査区の北半に堆積している。
- VI層 暗褐色シルト質埴壤土(10YR 4/3)を基本土と黒褐色土を10%混入する。遺物包含層である。硬質で粘性はややない。
- VII層 暗褐色シルト質埴壤土(10YR 3/3)を基本土とし、黒褐色土を5%混入する他、カーボン、火山灰塊を含む。地山層に漸移していく層である。縄文土器、石器が出土する。硬質で粘性がある。
- VIII層 褐色シルト質埴土(10YR 4/6)を基本土とする。火山灰を塊状に混入する。硬質で粘性はややない。
- IX層 中振火山灰が主体を占める層である。2層に細別できる。遺物は出土していない。調査区の中央部、谷部にのみみられる。
 - IXa層 縄文時代前期前葉に降下したとされる十和田火山灰を給源とする中振火山灰の中部にあたる層で、崎山貝塚第12次調査の第VIa層に相当する。灰黄褐色テフラ(10YR 5/2)で、層をなしているところは僅かで、塊状になり動いているところが多かった。硬質で粘性はない。
 - IXb層 黄褐色テフラ(2.5Y 8/6)で、下部の中振火山灰である。崎山貝塚第12次調査の第VIb層に相当する。硬質で粘性はややある。
- X層 黒褐色シルト質埴壤土(10YR 2/2)を基本土とする。崎山貝塚第12次調査の第VII層に相当する黒色腐埴土層と対応する。IX層の直下で確認された。硬質で粘性があり、かなり粘る。
- X I層 暗褐色シルト質埴土(10YR 3/3)を基本土とする。地山層である。やや硬質で粘性はない。
- X II層 黄褐色砂土を基本土とする。真砂土からなり調査区東端では地山層に相当する。硬質で、粘性はほとんどなくパサパサしている。
- X III層 礫層である。調査区北部の一部では表土層の次にこの層が堆積している。
- X IV層 褐色シルト質埴土(10YR 4/4)を基本土とする。角礫を含む。硬質で粘性はややある。



第5図 遺構全体図 (1:400)



第6図 基本土層図

4 検出された遺構と出土遺物

(1) 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（第7、9図）

調査区の北東部から検出された。検出面は基本土層V層中、埋土上面は基本土層IV層であった。遺構の平面形は不整楕円形で南部、北部の一部は後世の攪乱により消失している。長軸方向は北西―南東で、規模は長径が2.6m、短径が1.9m、深さは15cmと浅い。炉跡は確認できなかったが、中央やや東寄りにおいて焼土ブロックが集中していた。柱穴は北側の壁際に1個確認されている。貼床はなく、壁はきつく立ち上がっていた。

埋土は4層からなり、自然堆積である。A1層は黒褐色土で基本土層第IV層に相当するが暗褐色土粒を含み色調はやや明るい。B層は暗褐色土でカーボンが混入している。C1層は壁際の層である。褐色土で黒褐色土粒をやや多く含んでいる。ピット内の埋土は2層からなり、自然堆積である。a1層は黒褐色土で中礫火山灰粒を少量含み、カーボンが混入している。b1層は暗褐色土で、a1層と同様カーボンが混入している。

出土遺物は覆土中から土器片が出土している。第9図の1と2はA1層から出土している。1は口縁部が外に開き、頸部は強く内傾し、胴部は「く」の字に折れる器形を呈した波状口縁の深鉢形土器である。口唇部は波底部に短沈線を引いている。頸部に2本の沈線を横位に配し、胴部はLR縄文を横位に施文している。内面には1本の沈線を引いている。2は口縁部から頸部の破片で口縁部が1よりも内に直立している。頸部は刺突列を作出している。1よりも器面を丁寧に磨いている。1、2ともに縄文晩期末葉から弥生初頭の範疇に入ると思われる。3～8はB2層から出土している。3は口縁部が段を有する平口縁の深鉢形土器である。口縁部はLR縄文を横位に施文している。4～8は同一個体の胴部、底部破片である。4～7は外に開いた器形で、RL縄文を横位、縦位、斜位に施文している。8は底部破片である。B2層の遺物の時期は不明であるが、A1層から出土した1、2よりは古いものと考えられる。

帰属する時期は埋土出土の遺物では判断できず、不明である。

2号竪穴状遺構（第8、9図）

調査区の北東部、1号竪穴状遺構から西へ1.6m先で検出された。検出面は基本土層VII層である。後世の攪乱を受けており、部分的に検出された。規模は残存する長径は2.7m、短径が1mで、深さは5cmである。炉跡、柱穴等は確認されず、貼床もなく、床面は自然礫による凹凸があった。

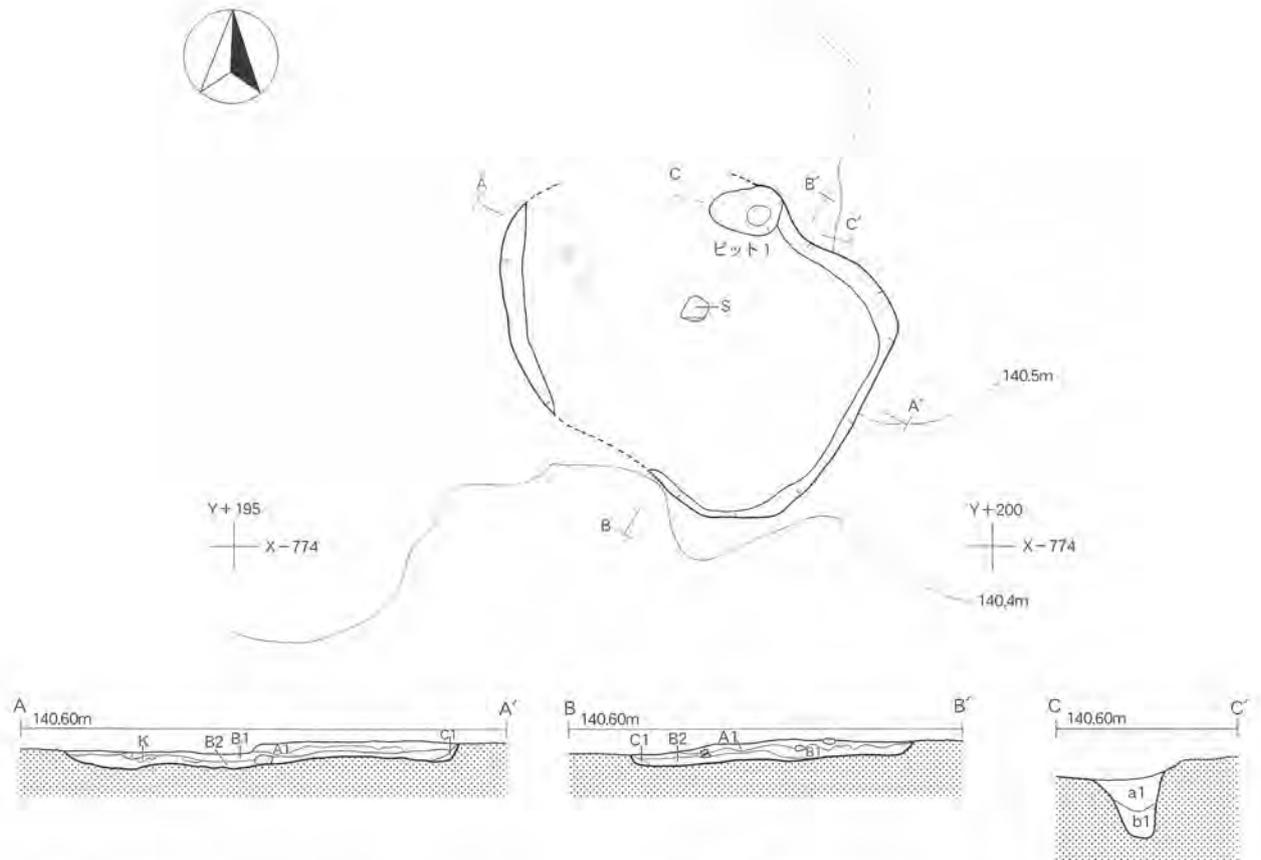
埋土は1層である。基本土層第IV層に類似しているが、暗褐色土粒を7%含んでいる。

遺物は2点出土した。第9図9は口縁部から胴部上半の破片である。口縁部に鎖状隆帯を貼付し、胴部には無節のR縄文を横位に施文した後、隆帯に沿った沈線と斜位の平行沈線を引いている。文様の特徵から後期門前式に比定される。10は胴部破片の縄文土器で、RL縄文を横位に施文している。

帰属時期は遺物が少ないため、不明である。

3号竪穴状遺構（第10～13図）

調査区の北西部で検出された。検出面は基本土層VII層で、後世の攪乱を受け、先に炉跡の上面が確認された。壁は消失し、床面の一部と炉跡のみが検出された。残存する床面の規模は長径が3.05m、短径が2.15mで、覆土は5cm残っていた。床は礫層（基本土層XIII層）上で構築しており、ほぼ平坦

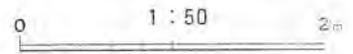


1号竪穴状遺構土層注記表

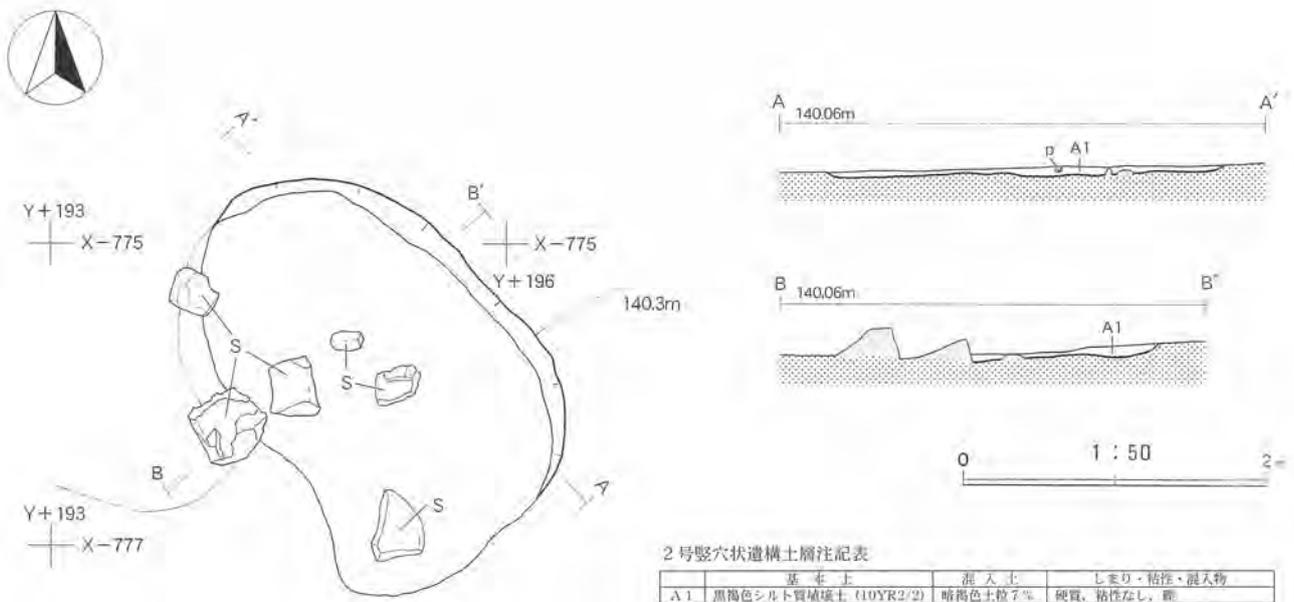
	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色シルト質埴壤土 (10YR2/3)	暗褐色土粒3%	硬質、粘性なし
B1	暗褐色シルト質埴壤土 (10YR3/3)		やや硬質、粘性ややなし、カーボン
B2	褐色シルト質埴壤土 (10YR4/6)		硬質、粘性なし、埴土塊・カーボン
C1	褐色シルト質埴壤土 (10YR4/4)	黒褐色土粒10%	硬質、粘性ややなし

1号竪穴状遺構ピット1土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	黒褐色シルト質埴壤土 (10YR2/3)	火山灰粒3%	硬質、粘性ややなし、カーボン・礫
b1	暗褐色シルト質埴壤土 (10YR3/3)		やや硬質、粘性あり、カーボン



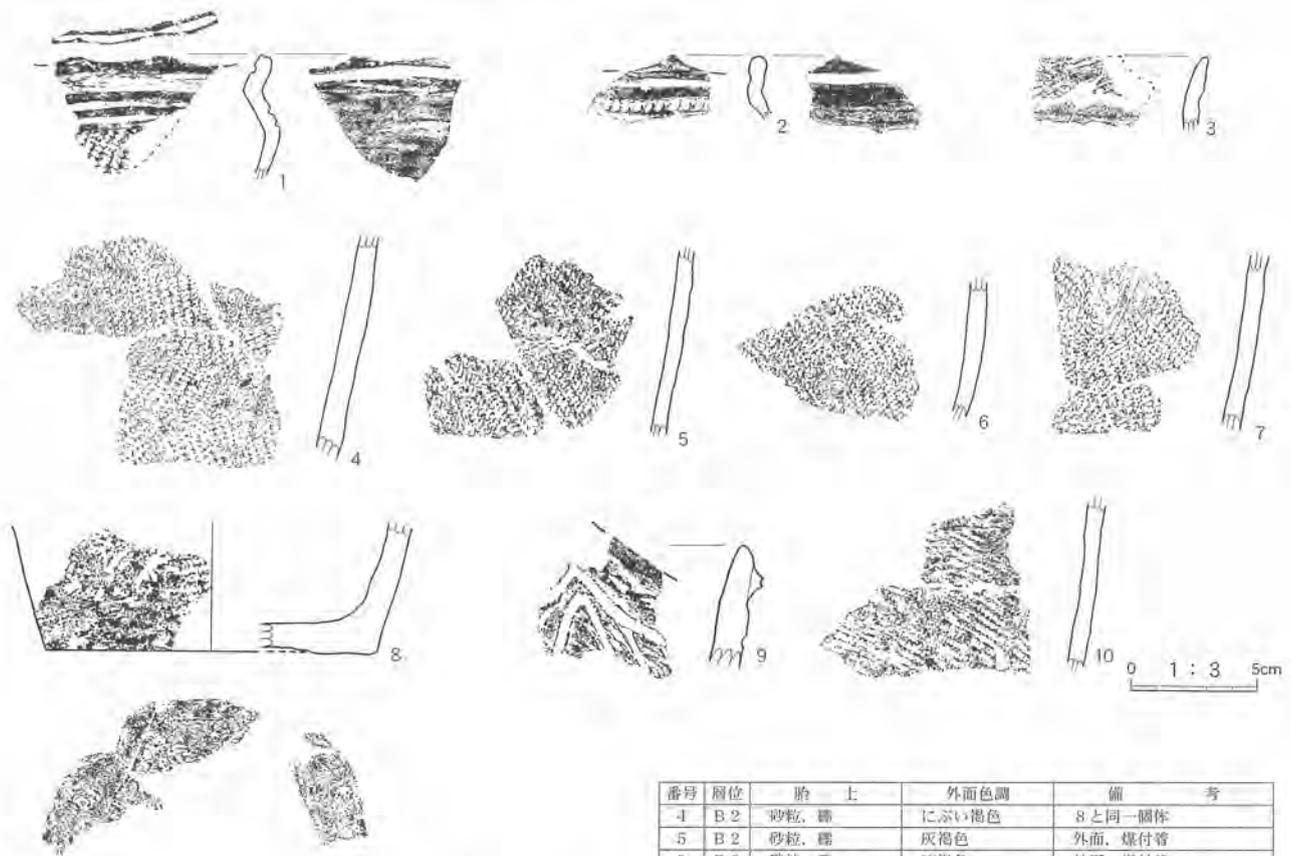
第7図 1号竪穴状遺構実測図



2号竪穴状遺構土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色シルト質埴壤土 (10YR2/2)	暗褐色土粒7%	硬質、粘性なし、礫

第8図 2号竪穴状遺構実測図



1号竪穴状遺構遺物観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考
1	A1	砂粒	淡黄色	
2	A1	砂粒	灰黄褐色	内外面、ミガキ
3	B2	砂粒	にぶい褐色	

番号	層位	胎土	外面色調	備考
4	B2	砂粒、礫	にぶい褐色	8と同一個体
5	B2	砂粒、礫	灰褐色	外面、煤付管
6	B2	砂粒、礫	暗褐色	外面、煤付管
7	B2	砂粒、礫	褐色	
8	B2	砂粒、礫	褐色	4と同一個体

2号竪穴状遺構遺物観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考
9	A1	砂粒、礫	黒褐色	
10	A1	砂粒	にぶい褐色	

第9図 1・2号竪穴状遺構出土遺物

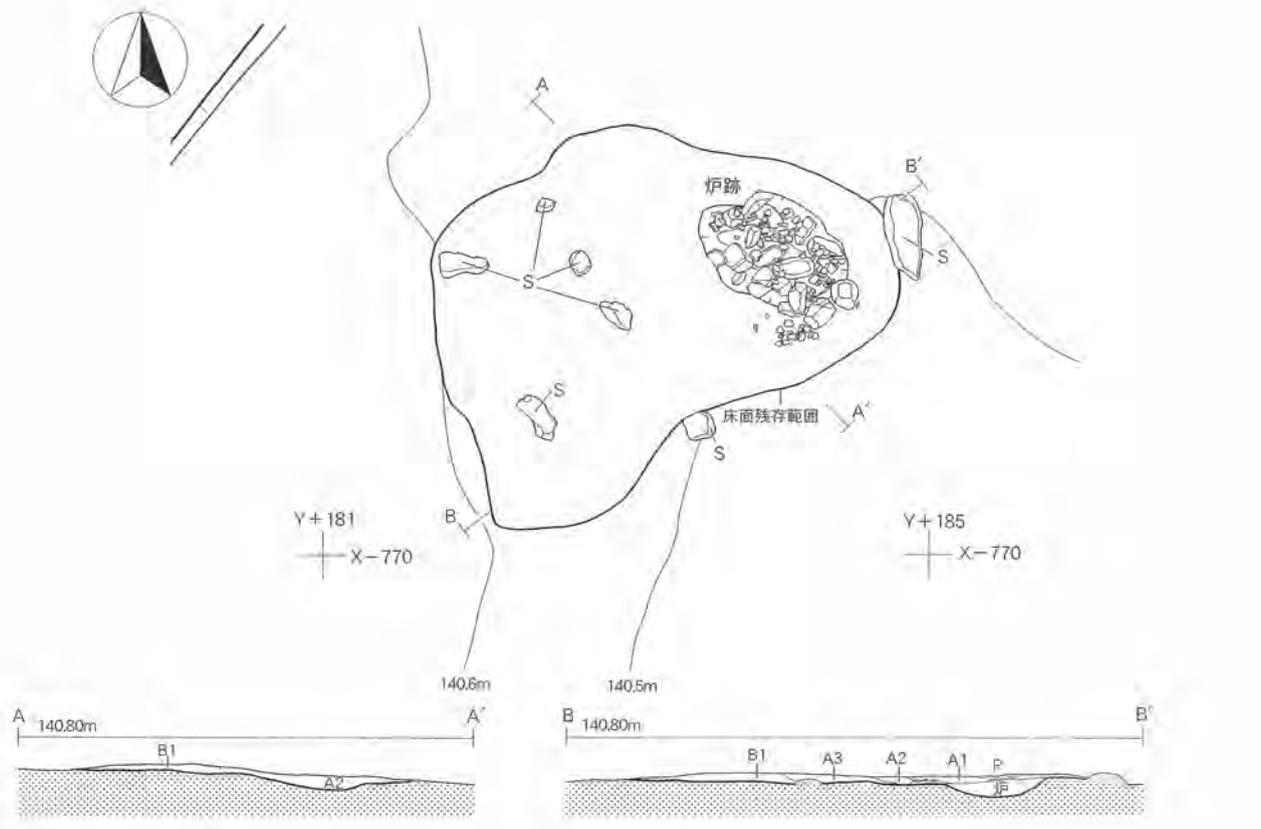
であった。柱穴は確認されていない。

埋土は4層に細別される。炉跡に近いA層とその周りのB層に大別される。A層は黒褐色土でカーボンが混入している。3層に細別され、炉に近い層ほどカーボンが多量に混入している。A1層は炉跡の上面の層で、土器片が集中していた。暗褐色土粒を少量含み、カーボン、石が風化したと思われる白色粒子が混入していた。A2層、A3層はA1層よりもカーボンの混入が少なくなる。B層は暗褐色土で、B1層はカーボンが少量混入している。

炉跡は上面において焼土塊、土器片、カーボンの集中がみられた。焼土は薄く、下からは焼土塊はみられなかった。土器片は炉跡とその周辺に密集して分布しており、炉の上部ほど土器の密度は濃かった。炭化物はクリ (*Castanea crenata*) と思われるものが数点出土した他、同定不能な炭化物が覆土内に多量に含んでいた。炉跡の規模は長径100cm、短径66cmで、深さは18cmである。石囲炉と思われる、原位置を止めている石とそうでない石がある。

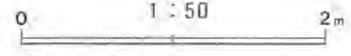
埋土は2層に細別され自然堆積である。a1層は黒褐色土で、径2mm程の焼土粒を少量混入している。a2層はa1層でみられた焼土粒は混入していなかった。

A1層と床面からは縄文土器片が出土している。第11図1は波状口縁深鉢形土器の波頂部片である。やや外に開いた器形で、波頂部下は7mm程の粘土を貼り付けている。口縁部はRL縄文を縦位に施文した後、2本の沈線を間を空けて引き帯縄文を作出している。波頂部上には径8mmの竹管状の円形刺突を施している。同じ円形刺突は波頂部直下の粘土貼付後にも3ヶ所施されているが、一番下は円形

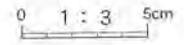
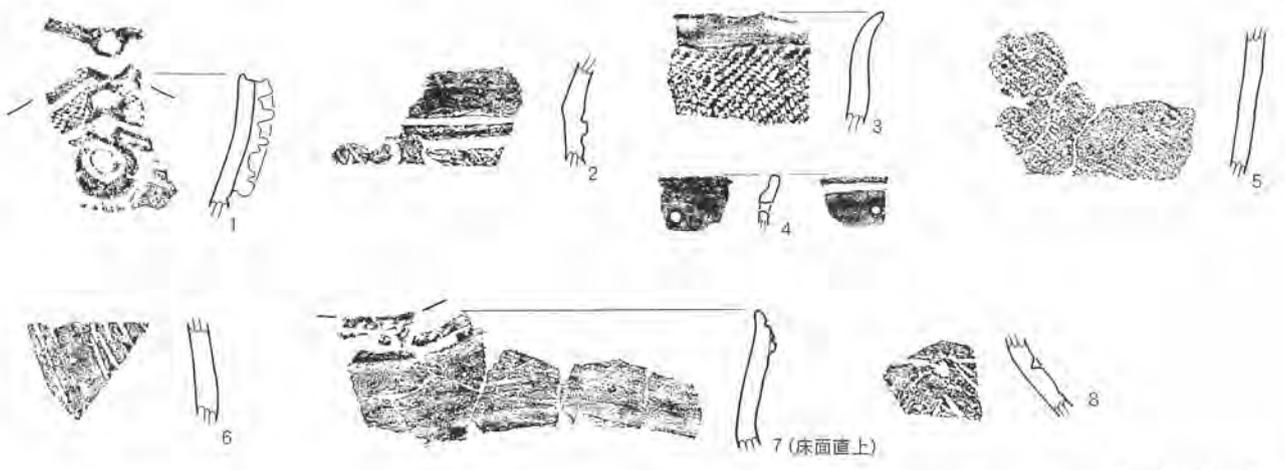


3号竖穴状遺構土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・湿入物
A 1	黒褐色砂質壤土 (10YR2/2)	暗褐色土粒3%	やや硬質、粘性ややなし、カーボン・白色粒子
A 2	黒褐色砂質壤土 (10YR2/3)		硬質、粘性なし、カーボン・白色粒子
A 3	黒褐色砂質壤土 (10YR3/2)		やや硬質、粘性ややなし、カーボン・
B 1	暗褐色砂質壤土 (10YR4/3)		やや硬質、粘性ややなし、カーボン・白色粒子



第10図 3号竖穴状遺構実測図

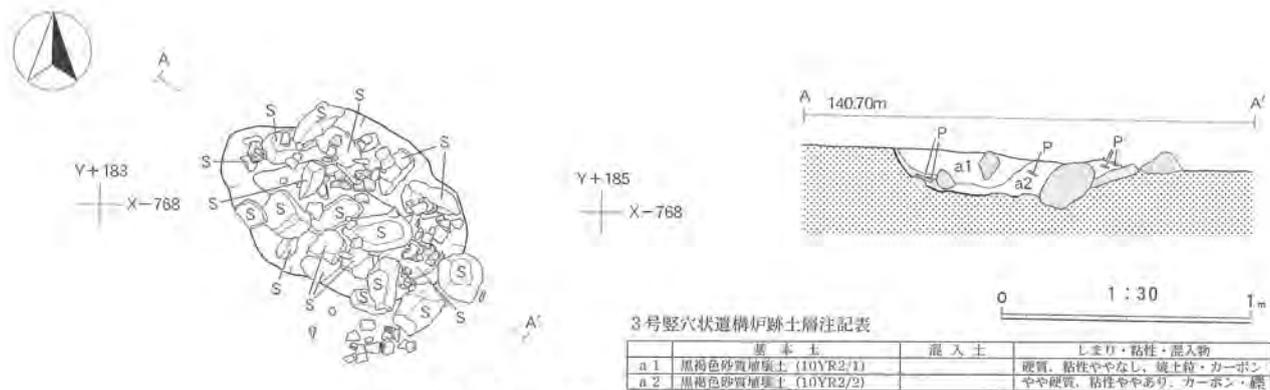


3号竖穴状遺構遺物観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考
1	A 1	砂粒、礫	にぶい褐色	
2	A 1	砂粒、礫	黒褐色	
3	A 1	砂粒	黒褐色	外面、煤付着
4	A 1	砂粒	褐色	補修孔、内外面ミガキ

番号	層位	胎土	外面色調	備考
5	A 1	砂粒、礫	にぶい黄褐色	外面、煤付着
6	A 1	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
7	B 1	砂粒、金雲母	にぶい褐色	同一個体、炉跡出土の
8	B 1	"	"	1~4と同一個体

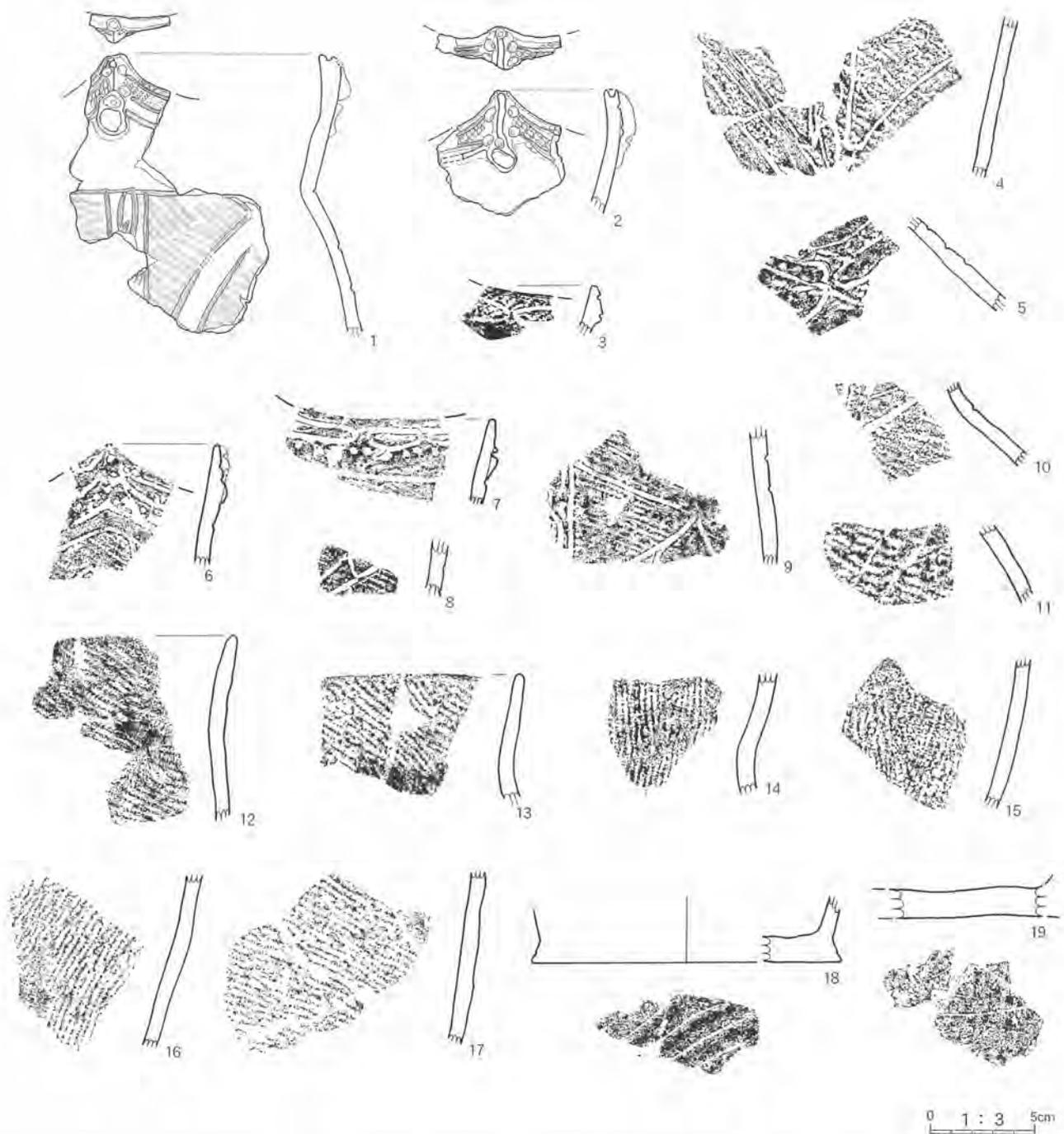
第11図 3号竖穴状遺構出土遺物



第12図 3号竪穴状遺構炉跡実測図

刺突を径1.8mmの円形刺突を施した後にも行っており、二重の円形刺突文になっている。2は胴部破片で、杵状に隆帯を貼付し脇には沈線を縁取っている。3は口縁部から胴部の一部までの破片である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は波状に調整している。文様は口縁部が無文で、胴部はLR縄文を横位に施文している。4は補修孔をもつ無文の口縁部片で、内面には横位の沈線を引いており、器面はかなり磨かれている。5はLR縄文を縦位に施文している。6は節の間隔が空いた燃糸文Rの土器片で、器形はやや内傾している。7と8は炉跡で出土した土器片に同一個体のものがある。7は口縁部から頸部にかけての波状口縁深鉢形土器である。口縁部で緩く内折し、頸部で外反した器形で、口縁部はLR縄文を横位に施文した後、楕円状に沈線を引いている。8は胴部破片で、内反している。ペン先状の刺突を施し、横位と2条の山形の沈線を引いている。

第13図1～19は炉の覆土から出土している。大きく4個体以上に分かれて出土している。1～4は同一個体で、床直遺物の第11図7、埋土遺物の8とも同一個体である。1と2は波状口縁深鉢形土器で、同様の波状口縁部片が他に3点出土していることから、5～8単位の波状口縁深鉢形土器と考えられる。断面は口縁部が外にやや開き、頸部で「く」の字に折れている。胴部は球胴形に膨らんでいる。波頂部には粘土を口縁部下まで貼り付けている。第11図1とよく似た文様構成をしているが、1と2は口縁部の刺突が小さく位置が異なり、口縁部下のボタン状の貼り付けの中には刺突を施していない。円形刺突は波頂部上に1ヶ所、口縁部のやや尖った隆帯の下を斜めから4ヶ所、隆帯と円形浮文の間に1ヶ所である。円形浮文の中は浅くくぼんでいる。頸部は無文で、胴部文様は無節のR縄文を縦位に施文した後、横位の沈線で文様帯を区分けし、2本の沈線による縦位区画とタスキ掛け状モチーフと思われる弧状の斜沈線を引いている。区画内には弧状と釣針状の短沈線を引いている。タスキ掛け状モチーフ内は縄文を磨消している。3は波底部付近の部分で、口縁部は沈線による杵状文を引いている。4は胴部破片で、1の胴部と同様にタスキ掛け状沈線文と縦位区画文からなる。5は胴部片で、RL縄文を横位に施文した後、沈線による杵状文を引いている。6～9は同一個体である。6と7は口縁部片で、器形はやや外に開いている。口縁に沿って隆線が巡り波頂部上で連結している。隆線上には竹管状の円形刺突を連続して施している。また、隆線内は沈線による杵状文を引いている。頸部は磨消縄文を施している。8はLR縄文を横位に施文した後、沈線を斜位、U字に引き、沈線間を磨消している。9は胴部上半の部位にあたり、RL縄文を横位に施文した後、沈線による縦位区画文を施し、区画内は曲線状の沈線を引いている。また、縦位の沈線からは逆「く」の字に斜沈線を引いたタスキ掛け状沈線文を施している。6、7、9は文様、胎土、色調ともに後述する10号土坑出土の第18図1と極めて類似している。10は胴部片で、LR縄文を横位に施文した後、沈線を引いている。11は胎土、色調から5と同一個体と考えられる。12～17は同一個体の粗製土器で縄文を施文している。11と12は口縁部片で、断面は口縁部がやや外に開いている。18、19は底部破片で18は胎土、色調から12～17と同一個体と考えられる。底面には木葉痕を残している。断面は底部端が外へ張り出



番号	層位	胎土	外面色調	備考
1	A 2	"	"	同一個体
2	"	"	"	
3	"	"	"	
4	a 2	"	"	11と同一個体
5	a 2	砂粒、金雲母	褐色	
6	"	砂粒、礫	橙色	同一個体
7	"	"	"	
8	"	"	"	
9	"	"	"	
10	a 2	砂粒	にぶい黄褐色	
11	a 2	砂粒、金雲母	褐色	5と同一個体

番号	層位	胎土	外面色調	備考
12	a 1	砂粒、礫	黄褐色	同一個体 底径：14.7cm 底面、木葉痕
13	"	"	"	
14	"	"	"	
15	"	"	"	
16	"	"	"	
17	"	"	"	
18	"	"	"	木葉痕
19	a 2	砂粒、礫	淡黄褐色	

第13図 3号竪穴状遺構炉跡出土遺物

いる特徴がある。18は19と異なる木葉痕を残している。

帰属時期は床面、炉跡出土の土器から縄文時代後期前葉と思われる。

(2) 土坑

調査区内で確認された土坑数は35基である。そのうち、いわゆるフラスコ状土坑と呼ばれる円形土坑が5基、屋外炉の性格のある土坑が2基検出された。以下、フラスコ状土坑の集中する1～3、8～11号土坑と屋外炉の性格がある12、13号土坑を中心に報告し、他は群ごとに説明する。

1号土坑 (第14、26図)

調査区北東端で南北方向にほぼ等間隔で確認された3基のフラスコ状土坑のなかで最北に位置するのを1号土坑とする。検出面は基本土層第Ⅷ層で、上部は後世の削平により消失している。平面形は不整円形で、断面形は逆台形、基本土層第ⅩⅢ層まで掘り下げている。規模は間口の径が90cm、深さが25.5cmである。底面の凹凸は少ない。

埋土は3層に大別され自然堆積である。A層は黒褐色土で2層に細別される。A1層はカーボンを次のA2層よりも多く混入している。A2層は火山灰粒と思われる灰白褐色土粒を微量ながら含んでいる。B1層は暗褐色土で、灰白褐色土粒をA2層よりも多く含んでいる。C1層は壁の崩落土で、黒褐色土を多く含んでいる。

遺物は土坑の最上面から出土しているため、土坑に伴う土器ではない。第26図1と2の2点は同一個体である。1は緩やかに外反した口縁部片で、口唇部には指頭圧痕による調整を施し、その下は5列の不整燃糸文を横位に施文している。2は胴部片で、同じく不整燃糸文を横位に施文している。繊維を混入しているが、焼成は良好である。縄文前期初頭の大木2式に相当するものである。

帰属時期は確実に土坑に伴う土器はなく、不明である。

2号土坑 (第14、26図)

1号土坑から南へ210cm離れた円形の土坑が2号土坑である。検出面は基本土層第Ⅷ層で、土色が異なる3つの層が同心円状に広がった状態で土坑を検出したため、上部はかなり削られていると思われる。平面形は円形で、断面形はフラスコ状を呈し、土坑の下部で中間端をもつ。規模は間口の径が114cm、深さが45cmである。基本土層第ⅩⅢ層まで掘り下げしており、底面は平坦で、礫層上を固めて床を構築している。

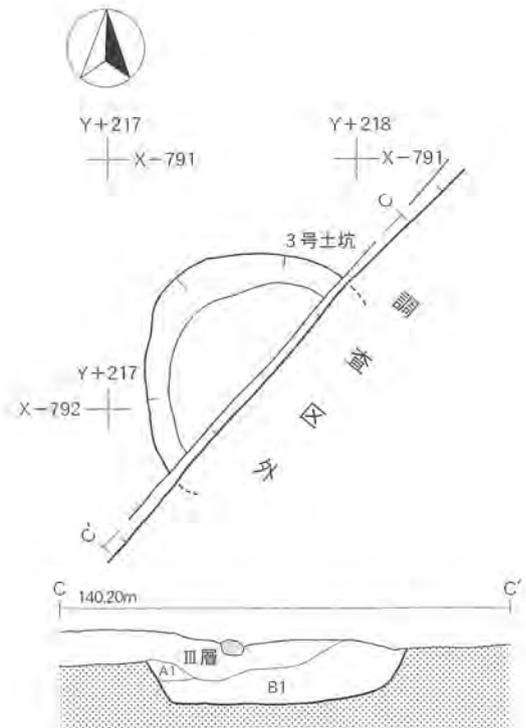
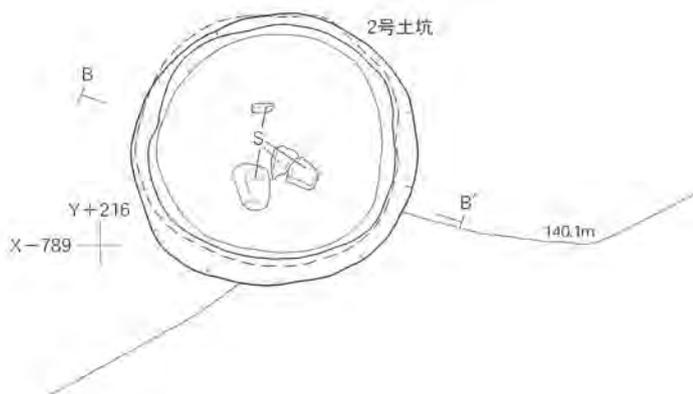
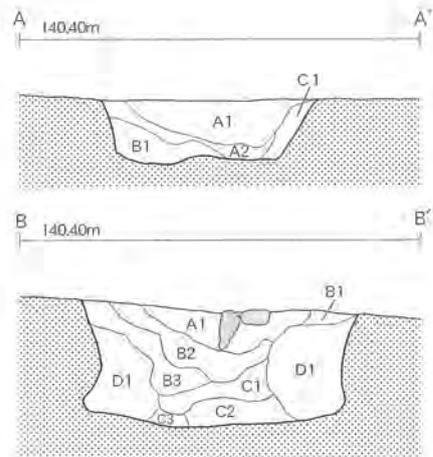
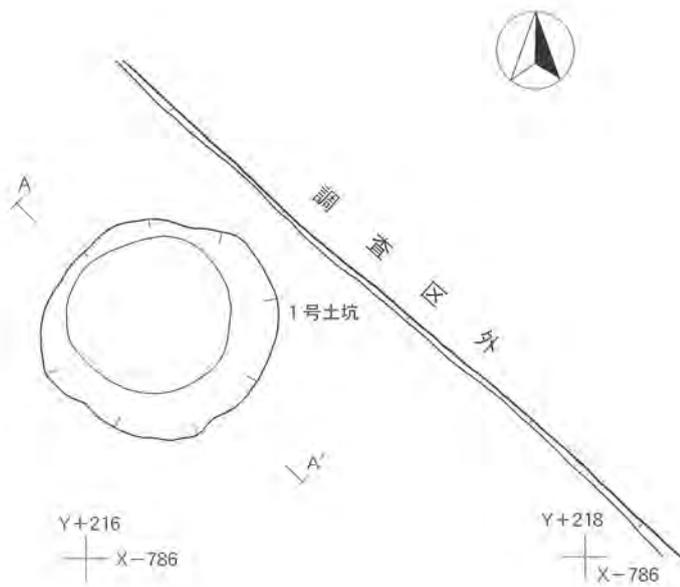
埋土は4層に大別し、8層に細別した。A1層は暗褐色土で土坑の上位中心に堆積していた層である。B層は黒褐色土である。A1層と同様に自然堆積を成す層で、3層に細別した。B1層はシルト質で粘性があった。B2層は暗褐色土粒を多く含んでいる。B3層は他の2層に比べ粘性がなくパサパサしていた。C層は暗褐色土で、3層に細別した。C1層は砂質、C2、C3層はシルト質の違いがある。D1層は壁の崩落土である。

遺物はA1層の下位から縄文土器片が1点出土した。第26図3は口縁部片で、口唇部は外削ぎ状に断面が鋭角になっている。横位の沈線を引き口縁部内に短沈線を2本引いている。時期不明である。

帰属時期は出土遺物が少なく、特定することはできない。

3号土坑 (第14図)

2号土坑から南へ320cm離れた円形の土坑が3号土坑である。検出面は基本土層第ⅩⅡ層で、盛土層を除去した後検出したため、上部は著しく削られている。調査区外へ続いているため、全容は把握できなかったが、平面形は円形と思われる。断面形は逆台形を成す。間口の推定の径は102cmで、深さは24cmである。基本土層第ⅩⅡ層中を掘り込んでおり、底面は平坦である。



1号土坑土層注記表

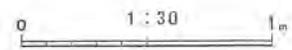
	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色シルト質埴土 (10YR2/3)		硬質、粘性ややあり、カーボン・塵
A2	黒褐色シルト質埴土 (10YR3/2)	灰色褐色土粒1%	やや硬質、粘性ややなし、カーボン
B1	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/3)	灰色褐色土粒2%	硬質、粘性ややあり、塵
C1	にぶい黄褐色シルト質埴土 (10YR4/4)	黒褐色土粒10%	硬質、粘性ややなし

2号土坑土層注記表

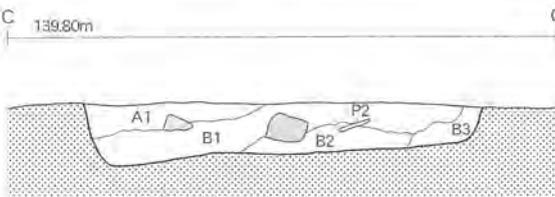
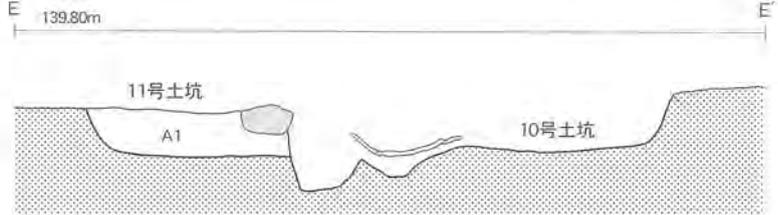
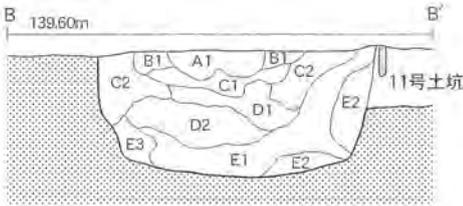
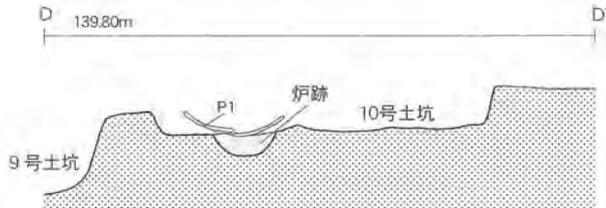
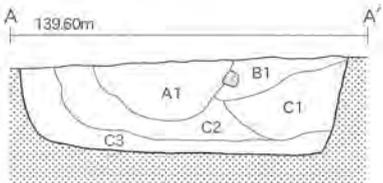
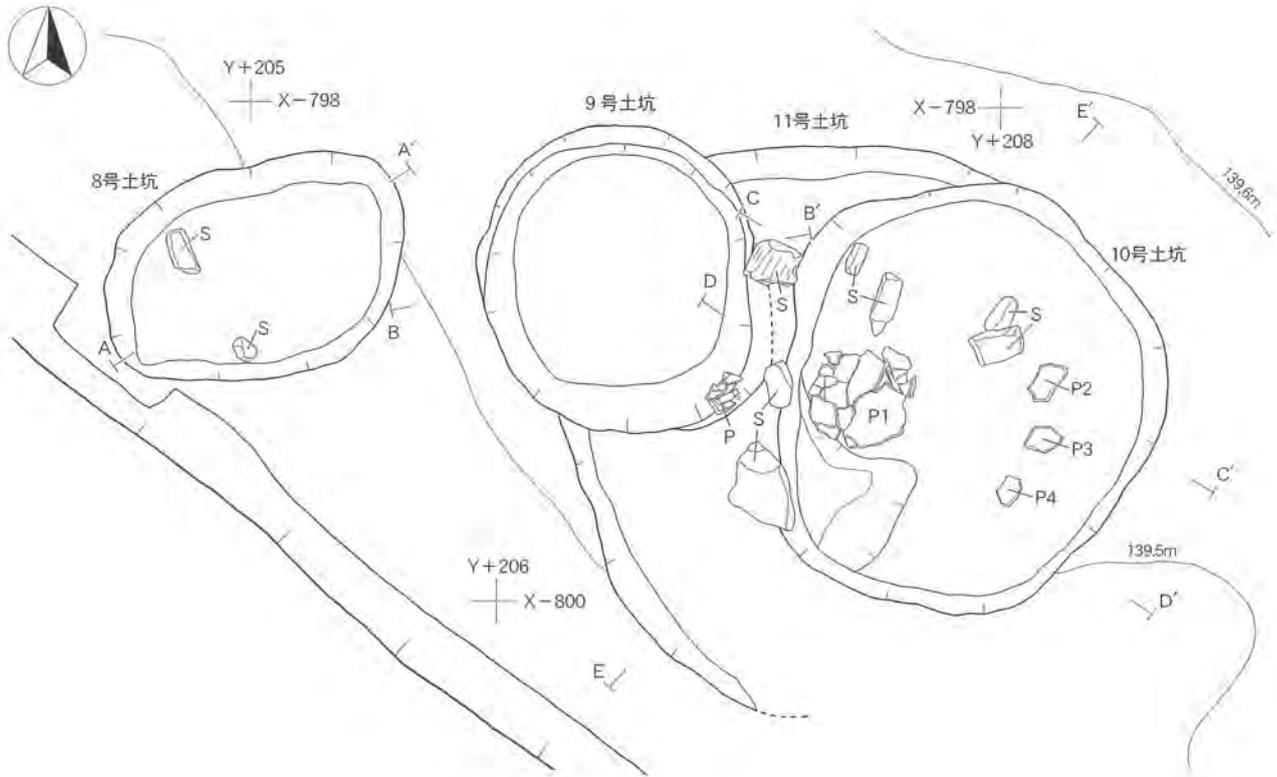
	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	暗褐色砂質埴土 (10YR3/3)		硬質、粘性ややなし、塵・色色粒子
B1	黒褐色シルト質埴土 (10YR2/2)		硬質、粘性ややあり、塵
B2	黒褐色砂質埴土 (10YR2/3)	暗褐色土粒10%	硬質、粘性ややなし、塵・色色粒子
B3	黒褐色砂質埴土 (10YR2/3)		やや硬質、粘性なし、塵
C1	暗褐色砂質埴土 (10YR3/4)		硬質、粘性ややなし、塵
C2	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/3)		やや硬質、粘性ややあり、塵
C3	暗褐色シルト質埴土 (10YR4/4)		硬質、粘性ややなし、塵
D1	にぶい黄褐色シルト質埴土 (10YR4/3)		硬質、粘性ややなし、塵

3号土坑土層注記表

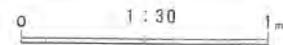
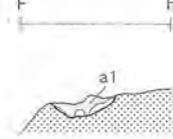
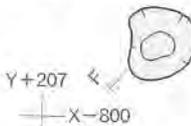
	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	暗褐色砂質埴土 (10YR3/3)		硬質、粘性ややなし、塵
B1	黒褐色砂質埴土 (10YR2/3)		硬質、粘性ややなし、カーボン・塵



第14図 1～3号土坑実測図



(P1直下炉跡)



8号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色シルト質埴土 (10YR2/2)	暗褐色土粒 3%	硬質、粘性ややあり、礫
B1	黒褐色シルト質埴土 (10YR2/3)	暗褐色土粒 10%	やや硬質、粘性ややあり、カーボン・礫
C1	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/3)	暗褐色土粒 2%	やや硬質、粘性ややなし、カーボン・礫
C2	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/3)	暗褐色土粒 7%	やや硬質、粘性ややなし、カーボン・礫
C3	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/4)	暗褐色土粒 1%	やや軟質、粘性ややあり、礫

9号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色シルト質埴土 (10YR2/2)	暗褐色土粒 1%	やや軟質、粘性ややあり、カーボン・礫
B1	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/3)		やや硬質、粘性ややあり、礫
C1	黒褐色シルト質埴土 (10YR3/2)		やや軟質、粘性ややあり、カーボン・礫
C2	黒褐色シルト質埴土 (10YR3/2)		やや軟質、粘性ややあり、礫
D1	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/3)		軟質、粘性ややあり、礫
D2	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/3)		やや硬質、粘性あり、礫
E1	黒褐色シルト質埴土 (10YR2/3)	暗褐色土粒 1%	やや硬質、粘性あり、カーボン・礫
E2	黒褐色シルト質埴土 (10YR2/2)		やや硬質、粘性ややあり、礫
E3	暗褐色シルト質埴土 (10YR3/4)		硬質、粘性ややなし、礫

10号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色砂埴土 (10YR2/3)		やや硬質、粘性あり、カーボン・礫
B1	黒褐色砂埴土 (10YR3/2)	褐色土塊 1%	やや硬質、粘性ややあり、礫
B2	黒褐色砂埴土 (10YR2/3)		硬質、粘性ややあり、礫・白色粒子
B3	暗褐色砂埴土 (10YR3/4)		硬質、粘性なし、礫

10号土坑炉跡土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	黒褐色砂埴土 (10YR4/4)		やや硬質、粘性ややなし

11号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色砂埴土 (10YR2/3)	暗褐色土粒 2%	やや軟質、粘性あり、カーボン・礫

第15図 8~11号土坑実測図

埋土は2層に大別した。A1層は暗褐色土で壁際に堆積した層である。B2層は土坑の大部分を覆う層である。黒褐色土層で砂質に富んでおり、カーボンを混入していた。

遺物は出土していないが、土坑の配列から先の1、2号土坑に関連があると考えられる。

8号土坑 (第15、16図)

調査区の東南東、2号土坑から南西へ14m離れたところにフラスコ状土坑2基(8号、9号土坑)とそれに近接した円形の土坑2基(10号、11号土坑)を検出した。この中で西側にあるフラスコ状土坑を8号土坑とする。8~11号土坑は基本土層第IV層除去後の遺構確認で纏まって検出したものである。検出面は基本土層第VII層で2号土坑と同様に覆土上面を同心円状に確認した。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、規模は間口の長径が130cm、短径が93cm、深さが39cmである。地山層である基本土層第XI層を掘り込んでいるが、底面は丁寧に土をよく固め、床を堅固に構築している。

埋土は3層に大別し、5層に細別した。自然堆積の様相を表している。A層は黒褐色土で、土坑の上位に堆積している。A1層は中心に堆積している層で、暗褐色土粒を少量含んでいる。B1層は暗褐色土粒を多量に含んでおり、カーボンが混入していた。C層は暗褐色土で土坑の下位に堆積している。C1層は壁の崩落層で、黄褐色土粒を少量含んでいる。C2層は黒褐色土粒を多く含んでおり、カーボンも混入していた。C3層は底面から壁際にかけて堆積した層でC2層に似るが、カーボンは混入せず、黄褐色土粒も含んでいない。黒褐色土粒を微量含んでいた。

遺物は微細の土器片がA1層から出土した他、B1層中にて石鏃が壁際に出土した。第16図は凸基の石鏃で、極めて薄く作られている。腹面は横から丁寧に調整し、背面は基部と先端部に細部調整を施し一次剝離面を残している。石材は黒色頁岩と思われる。

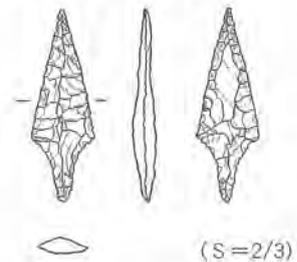
帰属する時期は遺物からでは不明である。

9号土坑 (第15、17図)

8号土坑に隣接するフラスコ状土坑を9号土坑とする。検出状況は8号土坑と同様である。10号土坑との切り合い関係はないが、11号土坑とは9号土坑が11号土坑を切っている関係にある。平面形は楕円形、断面形は不規則な逆台形を呈し、南西部以外はややオーバーハングしている。規模は長径が129cm、短径が111cm、深さが51cmである。地山層である基本土層第XI層を掘り込んでいるが、底面は8号土坑と同様丁寧に、床を堅固にしている。

埋土は5層に大別し、9層に細別した。自然堆積の様相が窺える。A1層は8号土坑のA1層に相当する層で、暗褐色土粒を微量に含みカーボンが混入していた。B1層は8号土坑のB1層に相当するが、暗褐色土でカーボンは混入していない。C層は黒褐色土で、A1、B1層の直下に堆積している。C1層にはカーボンが混入しているが、C2層は混入していない。D層は暗褐色土で、B1層とC層の周りに堆積している。E層は黒褐色土、暗褐色土で、E1層は暗褐色土塊を含み、カーボンが混入していた。E2層は崩落土と思われるが、土の色調はE1層に類似している。E1層に比べカーボンは混入せず粘性がある。E3層は暗褐色土で、崩落土と思われる。

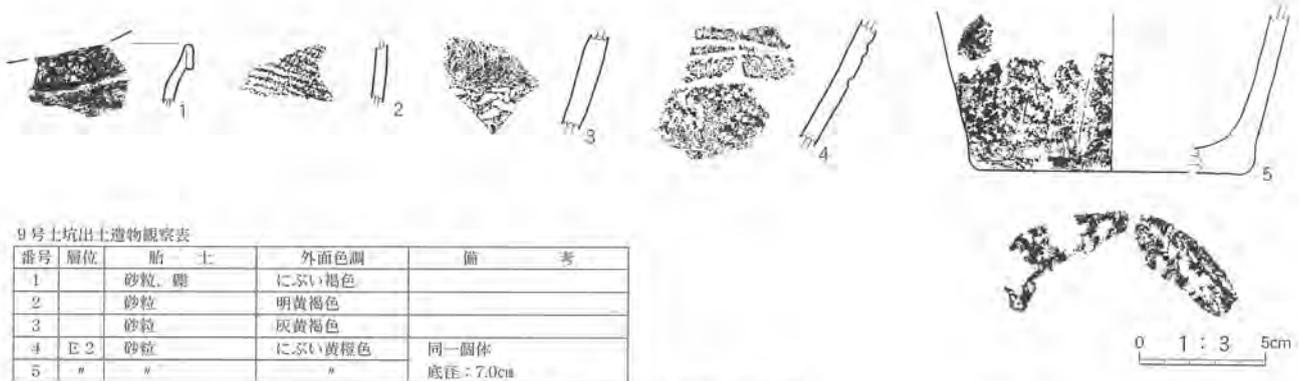
遺物はE2層から1ヶ所集中して出土した他、層位不明の土器片が出土している。第17図1~3は覆土一括の土器片である。1は波状口縁の波頂部と波底部の間の口縁部片である。口縁部は段を有し、頸部から口縁部へ外反している。口縁部にはRL縄文を横位に施文している。頸部は無文で丁寧に磨いている。2は胴部片で、RL縄文を横位に施文している。3も胴部片である。4と5は同一個体で、



8号土坑出土石器観察表

番付	層位	器種	規模 (mm)			石材
			長さ	幅	厚さ	
1	B1	石鏃	39	13	5	黒色頁岩

第16図 8号土坑出土石器



9号土坑出土遺物観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考
1		砂粒、礫	にぶい褐色	
2		砂粒	明黄褐色	
3		砂粒	灰黄褐色	
4	E 2	砂粒	にぶい黄褐色	同一個体
5	#	#	#	底径：7.0cm

第17図 9号土坑出土遺物

E 2層の上位で出土した。胴部下半から底部にかけての土器である。4は胴部下半部の破片で、RL縄文を横位に施文し、沈線を横位に引き交差している。5は底部片で、底面は不明瞭であるが網代痕が確認できる。

帰属時期は土器だけでは断定できず不明である。

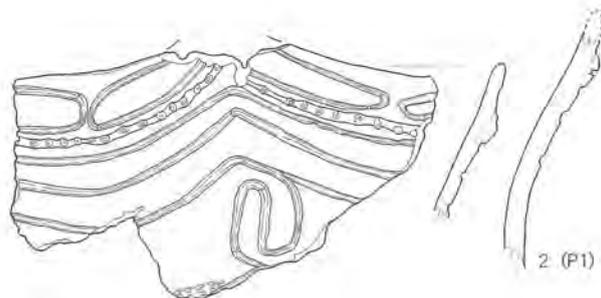
10号土坑（第15、18、19図）

9号土坑の東隣にある土坑を10号土坑とする。10号土坑は8、9号土坑のようにプランは明確ではなかったが、遺構確認時に斑状に褐色土粒、褐色土粒が混入しているところがあり、そのプランを断ち割った結果土坑と判断した。このため、プラン確認前の段階で調査時に土坑の上部を削っている可能性がある。11号土坑と重複関係にあり、10号土坑は11号土坑を掘り込んでいる。検出面は基本土層第Ⅶ層である。平面形は楕円形、断面形は逆台形で、規模は長径が171cm、短径が150cm、深さが24cmである。3号土坑同様、基本土層第ⅩⅠ層を掘り込んでいる。底面は平坦で3号土坑よりも踏み固められていた。11号土坑と重複するところの壁は固くしっかりしていた。

埋土は2層に大別し4層に細別した。A 1層は黒褐色土で、カーボンが混入していた。B層は暗褐色土でB 1層は褐色土塊を少量含んでいる。B 2層はA 1層に似ているが、カーボンは混入せず白色粒子が混入している。B 3層は壁の崩落層である。

遺物はA 1層とB 1層から出土している。特に、B 1層から土器が纏まって出土している。土坑西側で土器片「P 1」が集中して出土した。平面的には円状に整えられ、ほとんどが内面を上にして出土していた。接合作業の結果、大きく分けると2個の大破片からなり大形土器の半分になったが、接合しない破片もあった（第18図2）。大破片の位置関係は天地の方向において「天」がそれぞれ北東と南西というともに内面を上にしていながらも逆の関係にあった。このため、土圧等の自然現象で潰れたと考える他に、初めから土器を椀状に置いてあったものとも考えられる。また、これらの土器片を取り除いた後に赤みをおびた土（焼土粒）を土器片の集中範囲とほぼ一致するところで確認した。土器の外面上にも付着しており、土器を伴って炉として使用したと思われる。土坑中央やや東寄りには大きめの土器片が出土した（「P 2」～「P 4」）。その中で、「P 2」は口縁部破片、「P 3」は胴部破片で先の土器「P 1」と接合した。また、「P 4」は「P 1」～「P 3」と同一個体ではなかった。

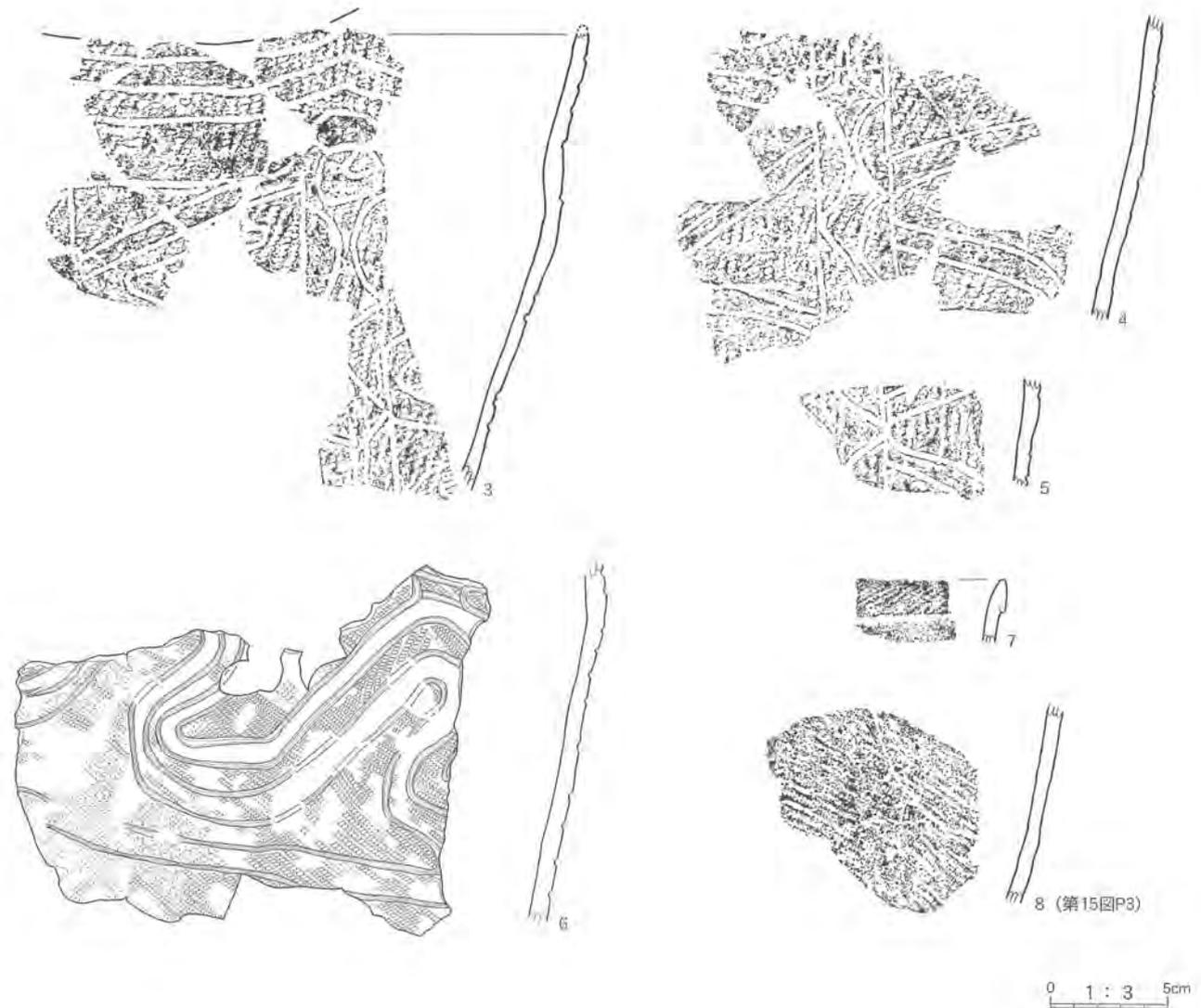
先述のように「P 1」の土器直下において焼土粒が混入している炉跡を確認した。また、不整形の落ち込みも南寄りで確認している。プランは不整円形を呈し、規模は長径が28cm、短径が25cm、深さが10cmである。焼土粒とともにカーボンも少量混入していた。炉跡の中からは口縁部片が出土しこれと「P 1」とが接合している。不整形の落ち込みは土坑の南西端を土坑底面から掘り込んでいる。最大長78cm、最大幅48cmで、深さが15cmである。底面は平坦でよく踏み固められていた。



10号土坑出土遺物観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考
1	B1	砂粒、硬	棕色	1: 黒斑 口径: 39.6cm
2	"	"	"	同一個体

第18図 10号土坑出土遺物(1)



番号	層位	胎土	外面色調	備考
3	B1	砂粒、礫	褐色	同一個体
4	"	"	"	
5	"	砂粒、礫	褐色	

番号	層位	胎土	外面色調	備考
6	B1	砂粒、礫	にぶい黄褐色	同一個体
7	"	"	"	
8	"	"	"	

第19図 10号土坑出土遺物 (2)

出土土器は主に3個体分である。第18図1は主に炉の上部で出土した土器「P1」である。7ないし8単位からなる波状口縁深鉢形土器の口縁部から胴部下半部分である。口縁部から胴部はほぼ半分残存し、胴部下半はわずかしが残っていない。断面は口縁部が直立気味に立ち上がり、頸部は緩やかに外反している。胴部は上半で最も膨らみ、底部に向かって外反しながらすぼまっている。文様帯は口縁部文様帯、頸部文様帯、胴部文様帯に分れ、胴部文様帯は胴部下半には無い。口縁部は隆帯を口縁に沿って貼り付けて文様帯を形成している。隆帯上には円形刺突を連続に施している。口唇部と隆帯の間には杵状の沈線を波状間に2個施している。頸部は3条の波状沈線文を隆帯に沿って施し、3列目の波状沈線文の頂部から1本の沈線による渦巻文を施している。胴部はRL縄文を横位、縦位に施した後、沈線により横帯文、縦位区画文、連続渦巻文、タスキ掛け状文、楕円状文、クランク文を施している。縦位区画文と連続渦巻文は波頂部から交互に垂下している。縦位区画内には半円状、S字状の沈線を引いている。タスキ掛け状文は縦位区画文と連続渦巻文の間に横V字または斜めZ字状の平行沈線からなり、縦位区画文と連続渦巻文を基準にみると横V字、斜めZ字状のモチーフが対称

になっている。平行沈線間には楕円状の沈線を平行沈線文になぞる形で引いている。このため、見た目には平行沈線間に弧状の沈線で仕切られているように見える。また、これらの縦位区画文、連続渦巻文、タスキ掛け状文内は縄文を所々磨り消している。横帯文は胴部文様帯を区切る平行沈線文で、平行沈線文内は先の楕円状沈線とクランク状沈線を引いている。2は1と同一個体の破片で第15図「P1」の接合しなかった口縁部片である。第19図3～5は同一個体である。波状口縁深鉢形土器で、器形は口縁部が第18図の1と2よりも大きく外に開き、頸部において緩やかに「く」の字に折れ、胴部は底部に向かってすぼまっている。文様構成上は第18図の1と2に似ている。第19図3は口縁部から胴部上半までの破片で、4と5は胴部上半の破片である。口縁部は第18図の1と2の口縁部のうち、隆帯より上を失った感じで、3本の沈線を口縁に沿って平行に引いている。頸部は第18図の1と2同様、波頂部のみ施文しているが、第15図の1と2が口縁部の沈線と連結した「J」字状の渦巻文なのに対し、第19図3は口縁部とは連結しない平行沈線による渦巻き文様のモチーフで、その末端を先端近くにぶつけている。胴部は4と5から縦位区画とタスキ掛け状モチーフからなっている。区画内は第18図の1、2と異なり半円状のモチーフを左右に対向させ縦位に連続して施文している。タスキ掛け状モチーフは2本の平行沈線を胴部上半から下半へ「左下がり」、「右下がり」の順で引いている。地文は縦位のRL縄文である。4～6は胎土から同一個体と考えられる。6は胴部上半の破片で、器形は1と2に似ている。RL縄文を横位に施文した後、横位の沈線と4条による多重沈線を引いている。いずれも2本の平行沈線からなるが、平行沈線間を磨り消している。また多重沈線文は、横位の平行沈線と沈線により連結させている。7は口縁部片で口縁部を折り返している。口縁部はRL縄文を縦位に施文している。8は縄文のみ施文されており、胴部下半の位置に相当する。

帰属時期は第18図1の土器から縄文時代後期前葉である。

11号土坑（第15図）

9、10号土坑に切られた状態で検出した。検出面は基本土層第VI層である。残存状況は極めて悪いが、平面形は円形と思われ、規模は間口の径が約225cmで、深さは18cmである。10号土坑同様、基本土層第XII層を掘り込んでいる。底面は平坦であるが床の構築は10号土坑のように踏み固めた感じではない。

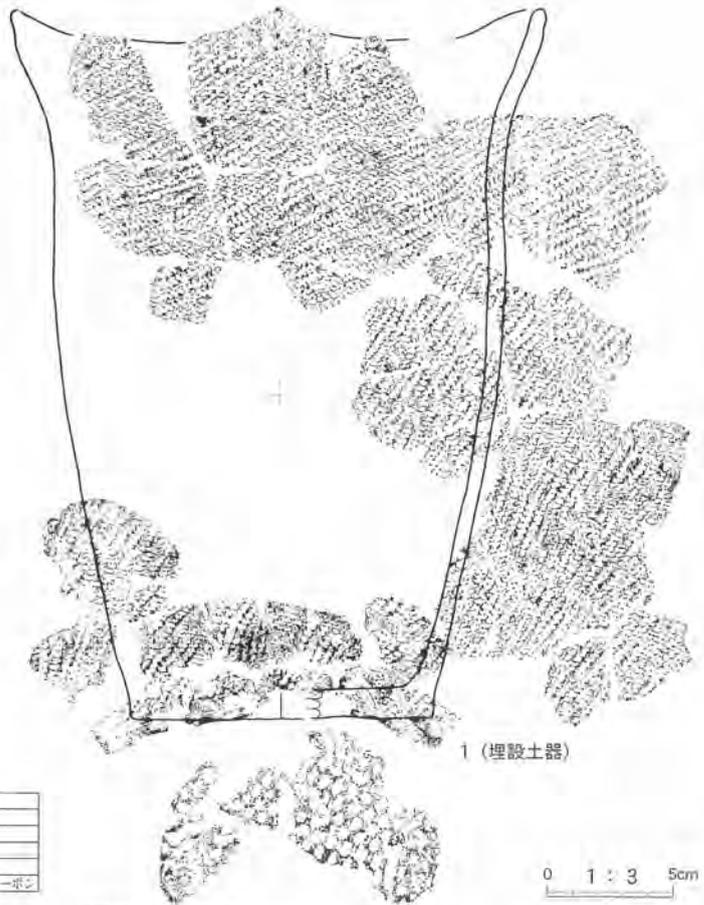
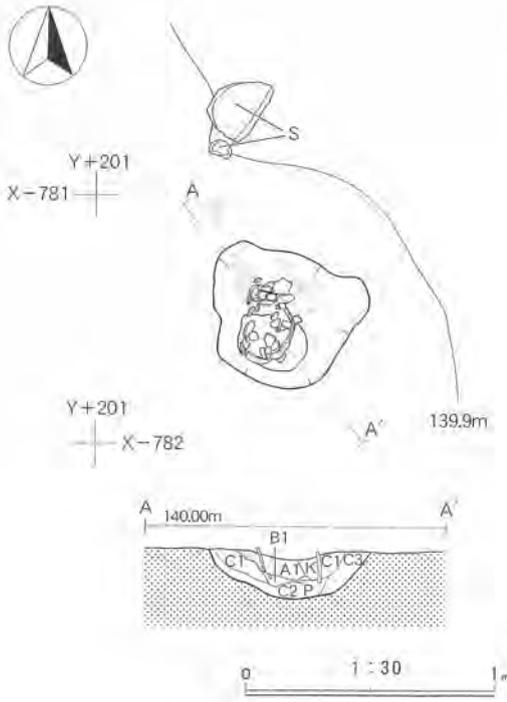
埋土は黒褐色土の単層で、暗褐色土粒を少量含んでいる。

遺物は出土しておらず、帰属時期は縄文時代後期前葉以前である。

12号土坑（第20図）

調査区北東部、1号竪穴状遺構から南へ8m離れたところに位置する。検出面は基本土層第VII層で、その上の第VI層を剥ぎ取る際に焼土塊の集中を確認した。そして焼土塊の分布確認時には埋設土器の口縁部を確認した。平面形は不整形、断面形は椀形で北側の立ち上がりで埋設土器の掘り方は不明瞭である。規模は長径が60cm、短径が54cm、深さは19cmである。埋設土器は斜位の状態で検出した。口縁部から底部までであるが、完形ではなく、残存状況は悪い。接合作業においても周辺から出土した土器とは接合しなかった。焼土塊は北側に集中し土坑の上位で多く確認した。焼土の全体的に厚みはないが、図のように埋設土器と接したところでは8cm程の厚みがあったが、その下は特に被熱した状況ではなかった。埋設土器の口縁部近くに集中することから、焼土塊そのものは埋設土器使用時に動いているものと判断した。

埋土は3層に大別し、5層に細別した。堆積は自然堆積である。A1、B1層は埋設土器内の埋土である。A1層は黒褐色土で火山灰粒を微量含んでいた。B1層は暗褐色土で火山灰粒を多く含んで



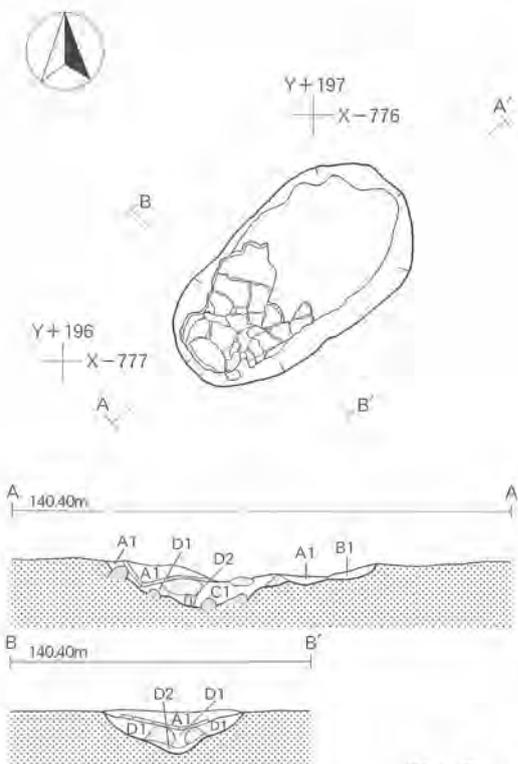
12号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色シルト質礫層土 (10YR3/3)	火山灰粒1%	やや軟質、粘性ややなし
B1	暗褐色シルト質礫層土 (10YR3/4)	火山灰粒7%	やや軟質、粘性ややあり
C1	暗褐色シルト質礫層土 (7.5YR3/4)		硬質、粘性なし、焼土粒・礫
C2	暗褐色シルト質礫層土 (10YR3/3)	火山灰粒2%	軟質、粘性ややあり
C3	暗褐色シルト質礫層土 (10YR3/4)	火山灰粒5%	硬質、粘性ややなし、焼土粒・カーボ>

12号土坑埋設土器観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考
1		砂粒、礫	明赤褐色	被熱している

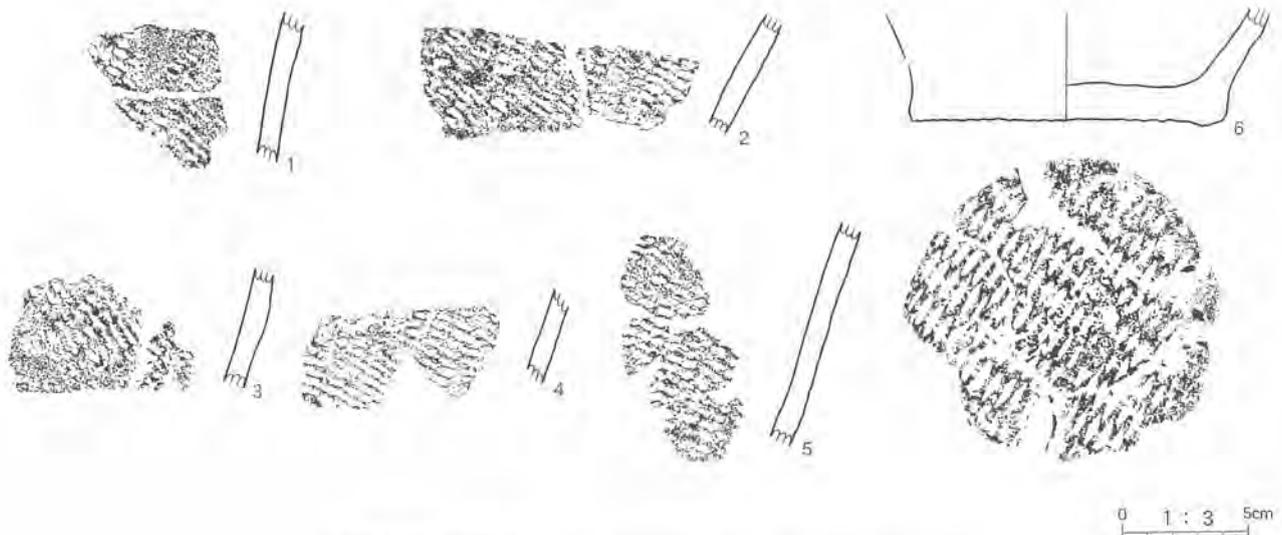
第20図 12号土坑実測図・埋設土器



24号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	暗褐色シルト質礫層土 (10YR3/4)		軟質、粘性ややあり、焼土粒
B1	褐色シルト質礫層土 (7.5YR4/4)		軟質、粘性ややなし、焼土粒・カーボ>
C1	暗褐色シルト質礫層土 (10YR3/4)		硬質、粘性なし、焼土粒・礫
D1	赤褐色シルト質礫層土 (5YR4/6/3)		軟質、粘性ややあり
D2	褐色シルト質礫層土 (7.5YR4/4)		硬質、粘性ややなし、焼土粒・カーボ>

第21図 24号土坑実測図



24号土坑埋設土器観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考
1~5		砂粒、糠	赤褐色	同一個体 底径：12.4cm 被熱している
6		"	"	

第22図 24号土坑埋設土器

いる。C層は暗褐色土で埋設土器の周りに堆積している層である。C1層は焼土塊が混入している層である。C2層は土器に接しているが焼土は確認できなかった。C3層は土坑の壁近くに堆積した層で、焼土粒、カーボンが混入している。また、他の層の土に比べ硬質である。

埋設土器は粗製土器で熱を受けているためか、外面は赤色でやや脆い。全面に横位のLR縄文を施文した波状口縁深鉢形土器である。断面は頸部から口縁部にかけて外に開き、頸部で緩く外反し、胴部上半までやや膨らみ、底部へ向かって少しずつすぼまっていく。底面は網代痕があり、編み方は「1本超え1本潜り1本送り」である。

帰属時期は埋設土器が粗製土器のため断定できないが、器形は縄文時代後期前葉の特色を表しており、この時期の前後と思われる。

24号土坑（第21、22図）

調査区の北部、1号竪穴状遺構から南へ2.8m離れたところに位置する。検出面は基本土層第VI層で、周囲から多量の焼土塊を確認した。平面形は楕円形、断面形はすり鉢形で、規模は長径が110cm、短径が63cm、深さが15cmである。埋土上位には焼土塊を確認し、さらに胴部下半から底部まである土器の一部分が内面を上にして横位の状態で出土した。確認時は平面プランが不明瞭だったため上部を削ったと思われるが、周辺から出土した土器片の中には同一もしくは接合する土器はなかった。内外面ともかなり熱を受け赤くなり、非常に脆い。土器を取り除くと焼土塊を確認し、その下の土は白くなり被熱しているところがあることから使用時のまま残っていたと考えられる。土坑は基本土層第XIII層を掘り込んでおり、底面は礫で凹凸があった。

埋土は4層に大別し5層に分層した。A1層は暗褐色土で土坑の上位に堆積している。基本土層第V層に似ているが、焼土粒が混入している。B1層も土坑上位の土であるが、赤みをおびた褐色土で焼土粒とカーボンが混入していた。C1層は土器よりも下層で焼土塊を含む層である。暗褐色土で焼土粒とカーボンが混入していた。D層は焼土塊との間に入っている層である。D1層は焼土粒を多量に混入している赤褐色土である。D2層は褐色土でD1層よりは焼土粒の混入は少ない。

出土した土器は粗製土器で径の約3分の1が残っていた。無節のR縄文を横位に施文し、底部には不明瞭な網代痕を残している。先述のように非常に脆く接合状況は良くなかった。また、全体的に色調は赤褐色で熱を受けていた。

帰属時期は土器からでは不明である。

4～6号土坑（第23、26図）

調査区東端で検出した3基の土坑である。検出面は基本土層第VI層である。いずれも3号土坑と同じように基本土層第XII層を掘り込んでいる。5号土坑で縄文土器片が出土している（第26図4）。

7、13～20号土坑（第23、24、26図）

調査区中央部やや東寄りで見出している。13号土坑以外の検出面は基本土層第VI層で、地山層の基本土層第XI層を掘り込んでいる。13号土坑は12号土坑と同様、基本土層第VIII層が検出面である。7号土坑は土坑の西側でテラス状の段を有している。遺物は7、13号土坑で比較的多く出土している。第26図5～14は7号土坑から出土した土器片である。全てA1層から出土している。5は胎土に繊維が入っている縄文前期の土器片である。8は口縁部が外反しており、口唇部には短沈線を引いており、晩期の粗製土器と考えられる。12は間隔のある撚糸文を斜位に施文していることから弥生時代後期の赤穴式と考えられる。14はミニチュア土器の底部片で、底面には沈線を「X」状に引いている。15～22は13号土坑出土の土器片である。18は微細の土器であるが、丁寧に磨かれた器面には沈線を引いていて、第31図の146、147に似ている。19は波状口縁の口縁部片で、口縁部には2本の平行沈線を口縁に沿って引いている。20は口縁部が段を有し原体不明の縄文を施文している。直下には横位の沈線を引いている。21はRL縄文を斜位に施文した後、2本の平行沈線を斜位に引いている。23と24は19号土坑から出土した土器片である。23は無文の口縁部片で、断面は口縁部で外反し胴部はやや丸く膨らんでいる。7、19号土坑は出土土器だけでは帰属時期は不明であるが、13号土坑は後期前葉に位置づけられる。

21～23号土坑（第24図）

1号竪穴状遺構付近で見出した。検出面は基本土層第V層で埋土には火山灰塊を比較的多く混入していた。遺物は出土していない。

25～28号土坑（第24～26図）

調査区中央部の北寄りから検出した。検出面は全て基本土層第VII層である。27号土坑は底面に大形の自然礫が埋まっていた。遺物は27号土坑から出土している。第26図25と26は口縁部片で器形と文様は8と似ている。27は2本の平行沈線内に横位のLR縄文を施文している。28は沈線を山形に引いている。31は底部片で、底面は網代痕が残っている。

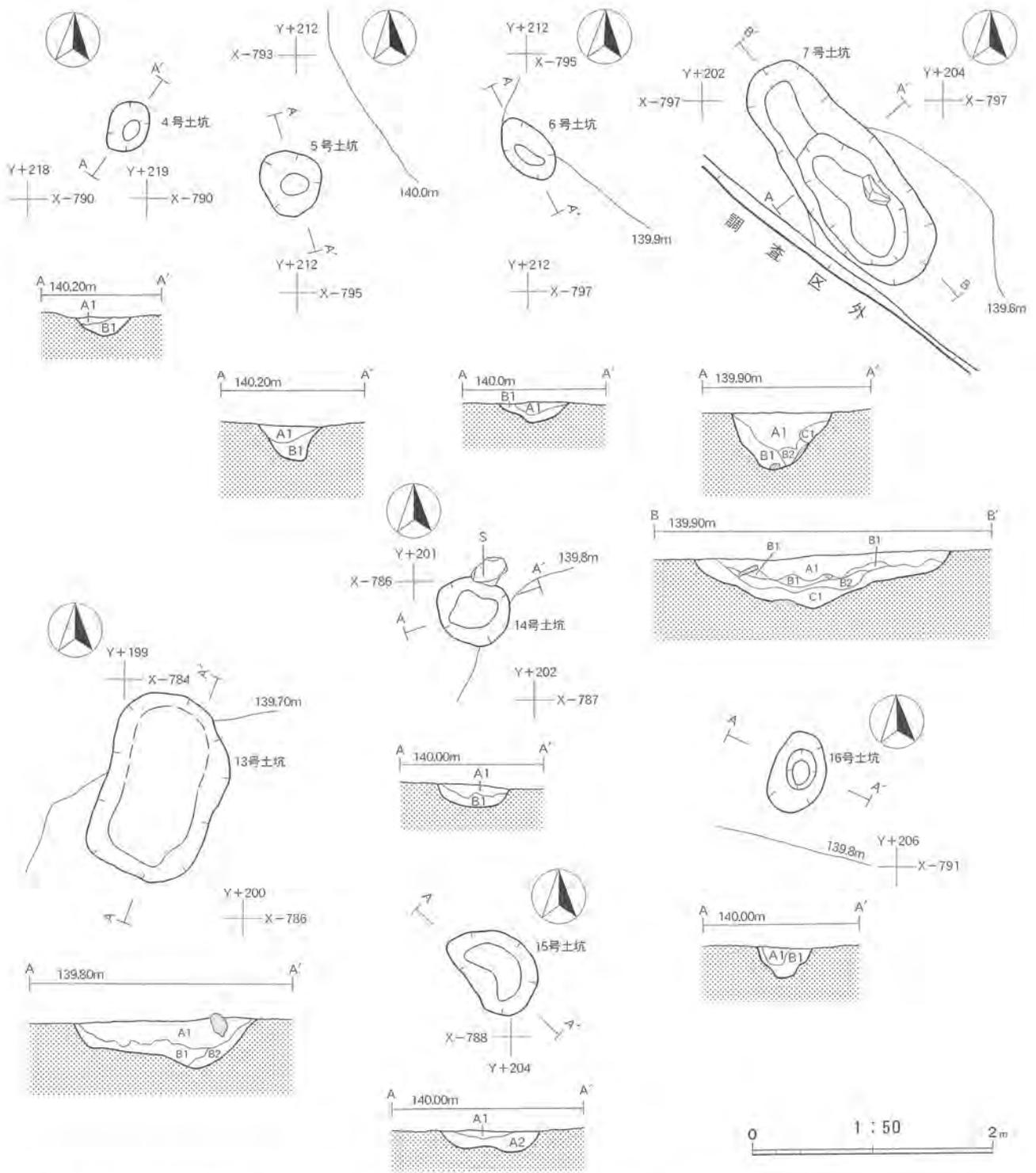
29～35号土坑（第25、26図）

第1表 土坑計測表

No.	規模 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	90	—	25
2	114	—	45
3	102	—	24
4	45	35	16
5	55	50	28
6	62	35	17
7	215	78	48
8	130	93	39
9	129	111	51
10	171	150	24
11	225	—	18
12	60	54	19

No.	規模 (cm)		
	長径	短径	深さ
13	155	101	40
14	60	54	20
15	58	55	17
16	74	46	26
17	44	31	16
18	51	39	21
19	75	54	36
20	53	40	20
21	46	45	23
22	51	41	21
23	69	39	19
24	110	63	15

No.	規模 (cm)		
	長径	短径	深さ
25	81	57	20
26	70	49	25
27	201	164	21
28	69	45	26
29	84	66	13
30	43	36	19
31	32	28	44
32	92	64	20
33	21	19	24
34	—	53	26
35	109	79	18

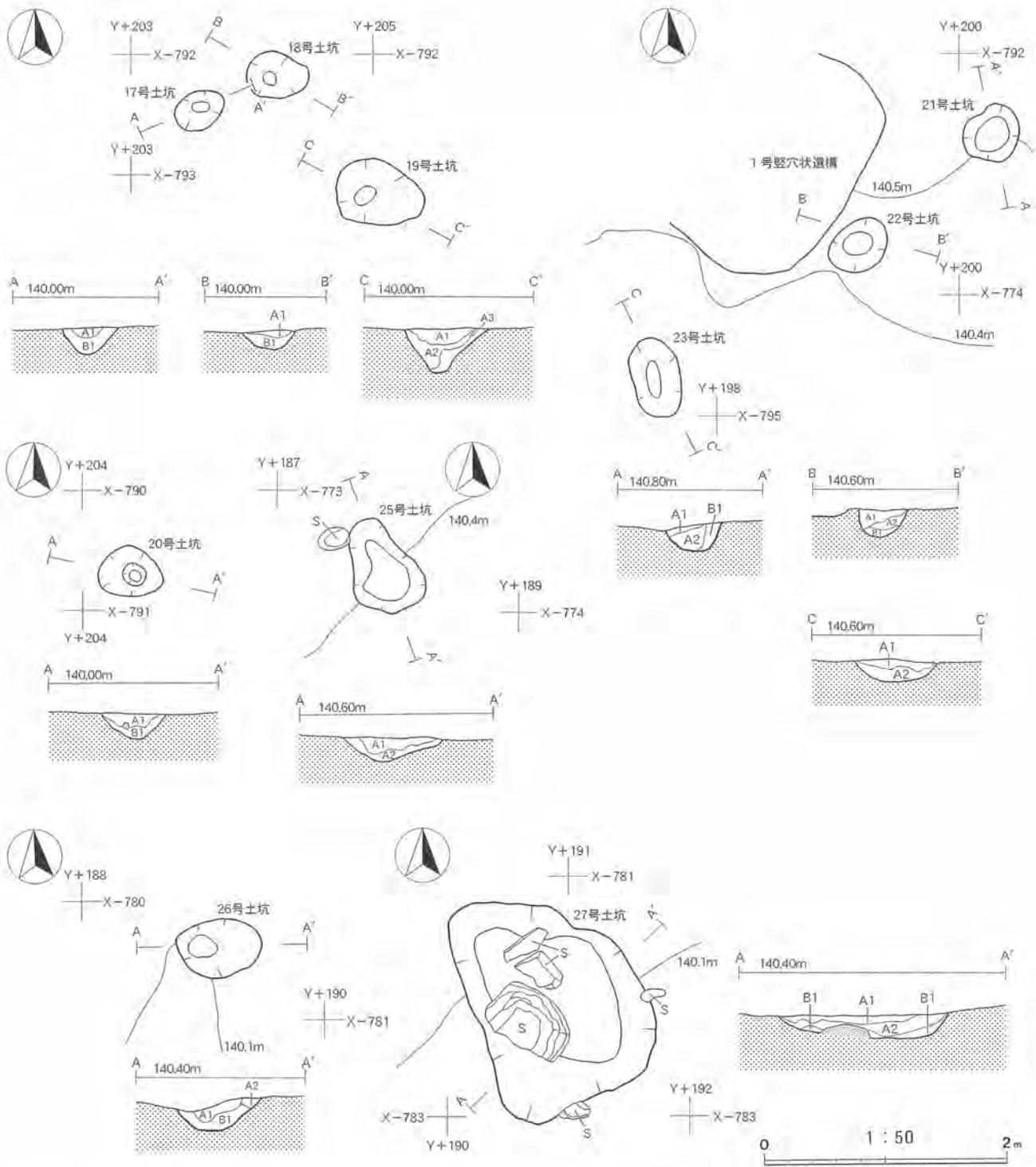


4～7号, 13～16号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
4号	A1	黒褐色砂壤土 (10YR2/2)	硬質, 粘性ややなし, 礫
	B1	暗褐色砂壤土 (10YR3/3)	やや硬質, 粘性なし, 礫
5号	A1	黒褐色砂壤土 (10YR2/2)	やや硬質, 粘性ややあり, 礫
	B1	黒褐色砂壤土 (10YR2/3)	やや軟質, 粘性ややあり, 礫
6号	A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	やや硬質, 粘性なし
	B1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/3)	硬質, 粘性ややなし, 礫
7号	A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	やや硬質, 粘性ややあり, 礫
	B1	黒褐色シルト質壤土 (10YR3/2)	やや硬質, 粘性ややあり, 礫
	B2	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	暗褐色土粒3%
C1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	黒褐色土粒10%	やや軟質, 粘性あり

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
13号	A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/3)	火山灰粒5%
	B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	褐色土粒1%
14号	A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	火山灰粒5%
	B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	黒褐色土粒2%
15号	A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	火山灰粒7%
	B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	暗褐色土粒5%
16号	A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	褐色土粒5%
	B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	褐色土粒5%

第23図 4～7, 13～16号土坑実測図

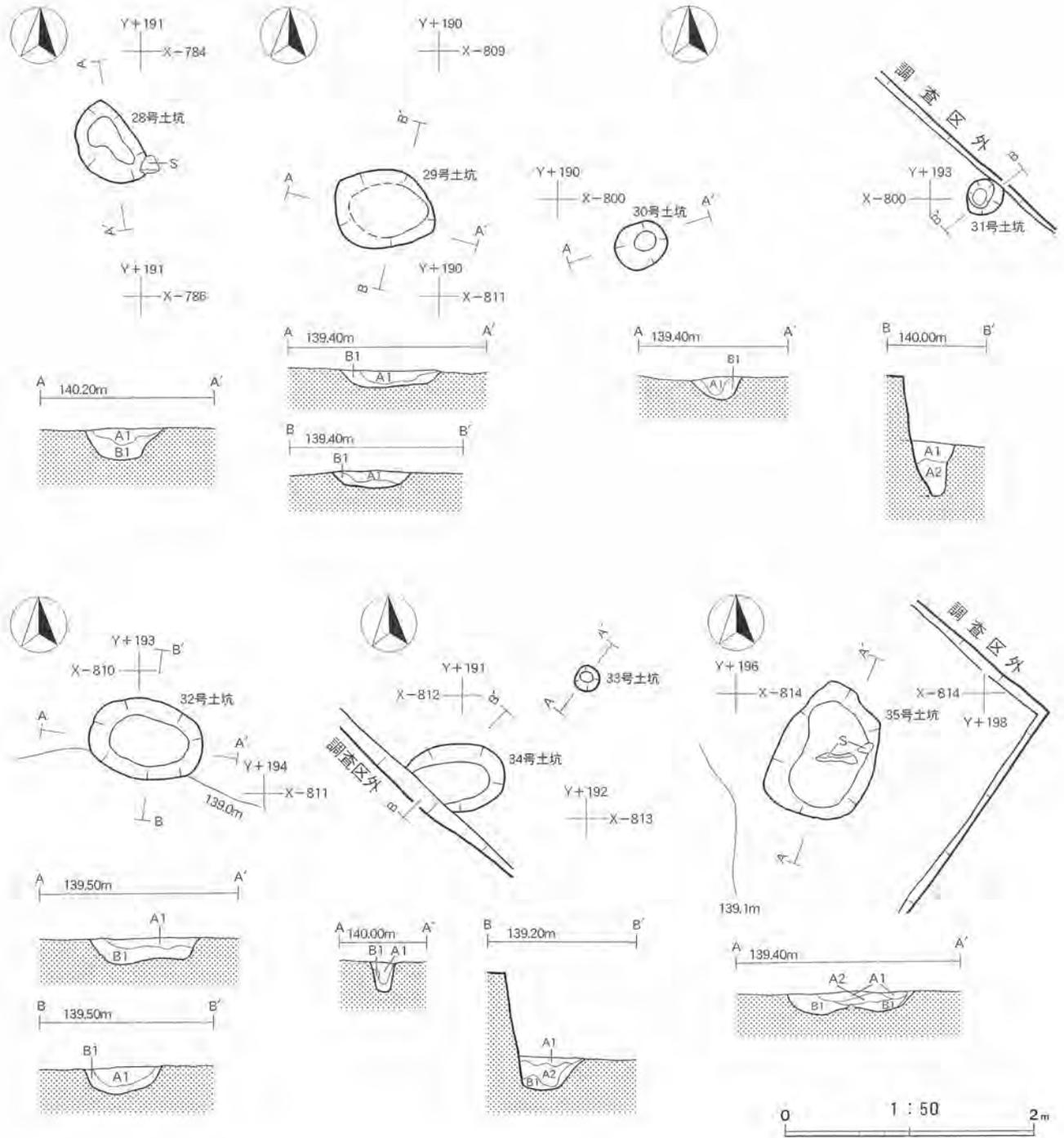


17～23号、25～27号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
17号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)		やや軟質、粘性ややあり、礫
B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/4)	黄褐色土粒3%	やや硬質、粘性ややあり、礫
18号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	黄褐色土粒7%	やや硬質、粘性ややなし、礫
B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	黒褐色土粒3%	やや軟質、粘性ややなし、礫
19号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	暗褐色土粒5%	やや硬質、粘性ややなし、礫
A2	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/3)	火山灰粒1%	硬質、粘性ややあり、礫
A3	黒褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	暗褐色土粒10%	硬質、粘性あり、礫
20号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	褐色土粒5%	やや軟質、粘性ややあり、礫
B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	褐色土粒3%	やや硬質、粘性ややあり
21号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	火山灰粒5%	やや軟質、粘性あり、礫
A2	黒褐色シルト質壤土 (10YR3/2)	火山灰粒7%	やや硬質、粘性ややあり
B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	火山灰粒10%	やや硬質、粘性ややあり

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
22号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	火山灰粒5%	やや軟質、粘性あり
A2	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/3)	火山灰粒10%	やや軟質、粘性ややあり
B1	黒褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	火山灰粒2%	やや軟質、粘性あり
23号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	火山灰粒3%	やや軟質、粘性ややなし、礫
A2	黒褐色シルト質壤土 (10YR3/2)	火山灰粒15%	硬質、粘性ややあり、礫
25号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	暗褐色土粒3%	やや硬質、粘性ややあり、礫
A2	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/3)	暗褐色土粒7%	硬質、粘性ややあり、礫
26号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	暗褐色土粒5%	やや硬質、粘性ややなし、礫
A2	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/3)	暗褐色土粒7%	やや軟質、粘性ややなし、礫
B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	暗褐色土粒10%	やや軟質、粘性ややなし
27号			
A1	黒褐色シルト質壤土 (10YR3/2)	暗褐色土粒7%	やや軟質、粘性ややなし、礫
A2	黒褐色シルト質壤土 (10YR2/2)	火山灰粒1%	やや軟質、粘性ややなし、礫
B1	暗褐色シルト質壤土 (10YR3/3)	黒褐色土粒3%	やや硬質、粘性あり、礫

第24図 17～23、25～27号土坑実測図

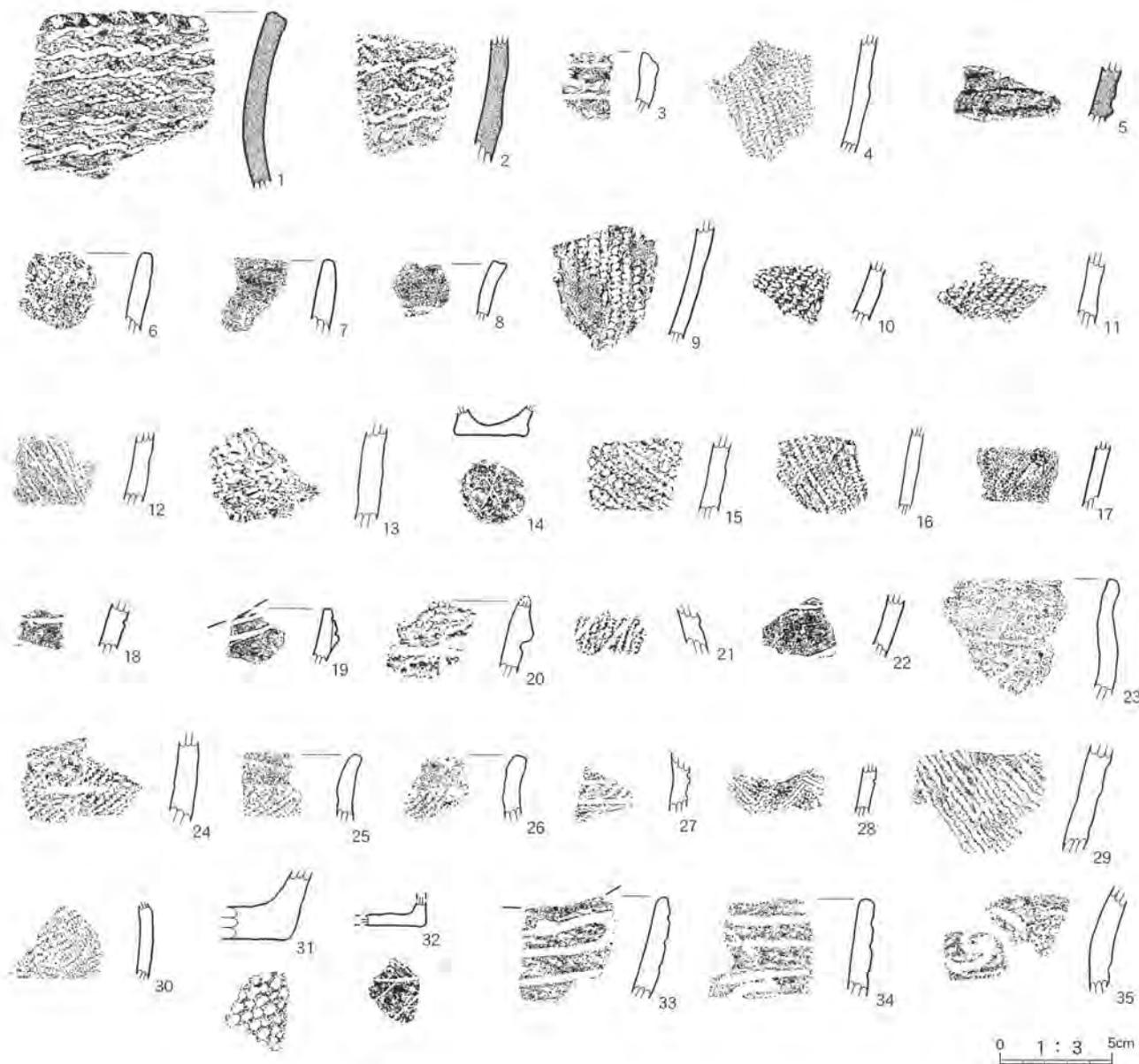


28～35号土坑土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
28号			
A1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/2)	暗褐色土粒10%	やや軟質、粘性なし、礫
B1	暗褐色シルト質堆積土 (10YR3/3)	暗褐色土粒10%	硬質、粘性ややあり、礫
29号			
A1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/2)	暗褐色土塊7%	やや軟質、粘性ややあり、礫
B1	暗褐色シルト質堆積土 (10YR3/3)	黒褐色土粒3%	やや軟質、粘性ややあり、礫
30号			
A1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/2)		やや軟質、粘性ややあり、礫
B1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR3/2)		やや硬質、粘性ややあり、礫
31号			
A1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/3)		硬質、粘性なし、礫
A2	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/2)		軟質、粘性なし

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
32号			
A1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/2)	暗褐色土粒3%	やや硬質、粘性ややあり、礫
B1	暗褐色シルト質堆積土 (10YR3/3)	黄褐色土塊1%	硬質、粘性ややあり
33号			
A1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/2)		硬質、粘性あり
B1	暗褐色シルト質堆積土 (10YR3/3)		軟質、粘性ややあり
34号			
A1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/2)	暗褐色土粒2%	硬質、粘性ややあり、礫
A2	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/3)	黄褐色土塊1%	やや軟質、粘性ややあり、礫
B1	暗褐色シルト質堆積土 (10YR3/3)	黒褐色土粒5%	やや軟質、粘性ややあり
35号			
A1	黒褐色シルト質堆積土 (10YR2/2)	暗褐色土粒3%	硬質、粘性ややなし
A2	黒褐色シルト質堆積土 (10YR3/2)	暗褐色土粒5%	やや軟質、粘性ややなし、礫
B1	暗褐色シルト質堆積土 (10YR3/3)	褐色土塊2%	やや軟質、粘性ややあり

第25図 28～35号土坑実測図



土坑遺物観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考
1	A 1	砂粒	浅黄色	1号土坑
2	"	"	"	同一個体
3	A 1	砂粒	にぶい褐色	2号土坑
4	A 1	砂粒	にぶい褐色	5号土坑
5		纖維、砂粒	にぶい黄褐色	7号土坑
6		砂粒、礫	灰黄褐色	"
7		砂粒	にぶい黄褐色	"
8		砂粒	にぶい黄褐色	"
9		砂粒、礫	にぶい褐色	"
10		砂粒、礫	褐色	"
11	C 1	砂粒、礫	明赤褐色	"
12	C 1	砂粒、礫	にぶい褐色	"
13	C 1	砂粒、礫	暗赤褐色	"
14		砂粒	にぶい黄褐色	底径：3.2cm 底面に「×」状の沈線
15	A 1	砂粒	にぶい黄褐色	13号土坑
16	B 1	砂粒、礫	にぶい褐色	"
17		砂粒、金雲母	黒褐色	"

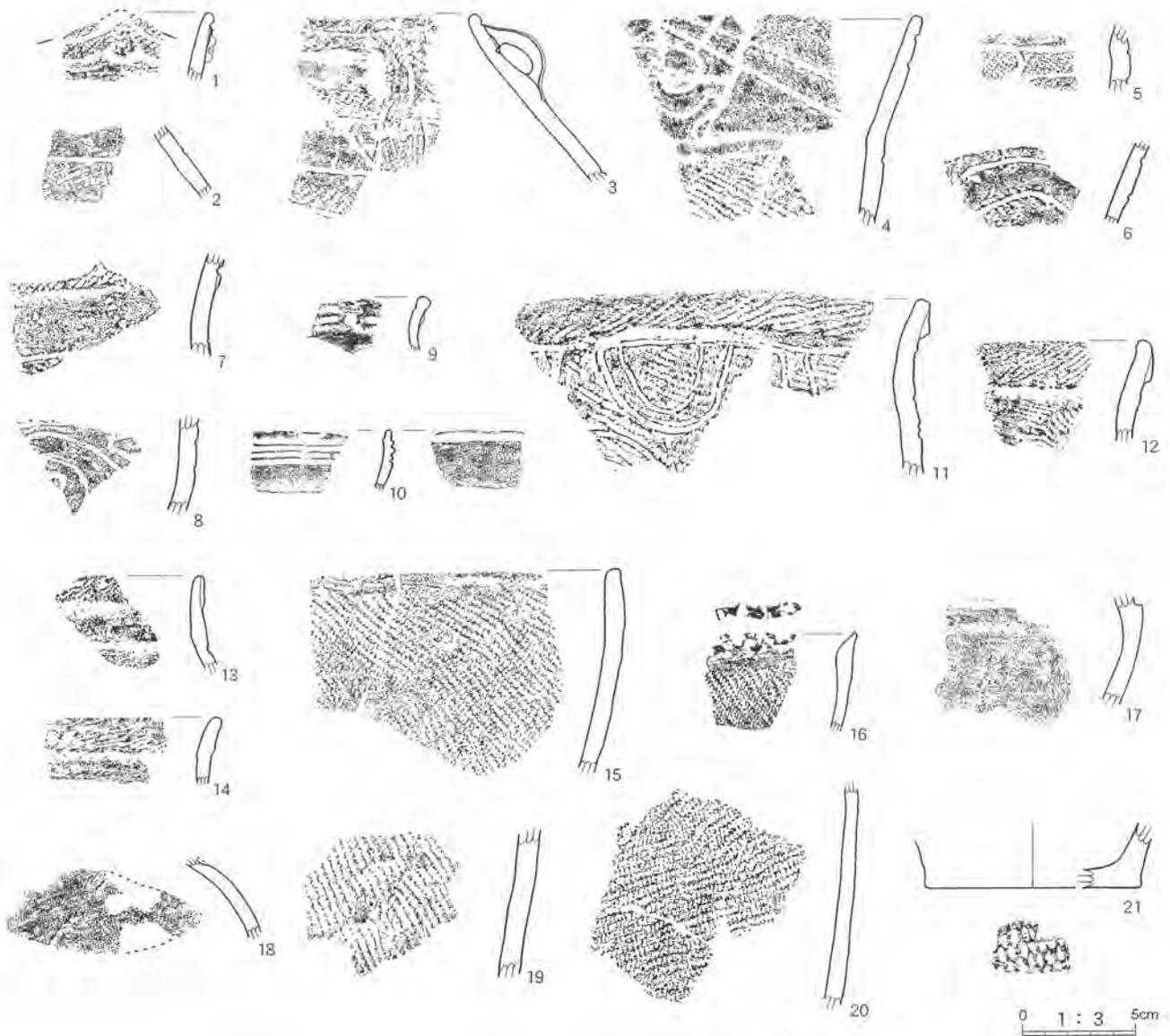
番号	層位	胎土	外面色調	備考
18		砂粒	褐色	13号土坑
19		砂粒	にぶい褐色	"
20	B 1	砂粒、礫	灰黄褐色	"
21	A 1	砂粒、礫	にぶい黄褐色	"
22		砂粒	暗褐色	"
23	A 1	砂粒、礫	暗赤褐色	同一個体
24	"	"	"	19号土坑
25	A 1	砂粒、礫	褐色	27号土坑
26	A 1	砂粒、礫	黒褐色	"
27	A 1	砂粒	にぶい赤褐色	"
28	A 1	砂粒	黒褐色	"
29	A 1	砂粒、礫	にぶい褐色	"
30	A 1	砂粒	黒褐色	"
31	A 1	砂粒、礫	にぶい黄褐色	網代痕
32	A 1	砂粒	にぶい黄褐色	木葉痕 29号土坑
33		砂粒、礫	灰黄色	32号土坑
34		砂粒	浅黄褐色	"
35		砂粒	浅黄褐色	"

第26図 土坑出土遺物

調査区南部端で集中した土坑群で、検出面は全て基本土層第Ⅶ層である。遺物は29、32号土坑から出土している。第26図32は29号土坑から出土した底部片で、底面は木葉痕である。33～35は32号土坑から出土している。33は波状口縁の土器片で口縁部には沈線による杵状文を施文している。35は頸部片で、沈線による渦巻文を施文している。いずれも縄文後期前葉に相当する。

(3) 倒木痕 (第27図)

13号土坑近くで倒木痕と思われる落ち込みを検出した (第5図)。基本土層Ⅴ層中で検出し埋土は



倒木痕遺物観察表

番号	胎土	外面色調	備考
1	砂粒、礫	黒褐色	同一個体
2	砂粒	橙色	
3	"	"	
4	砂粒、礫	橙色	
5	砂粒、礫	にぶい赤褐色	
6	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
7	砂粒、礫	明赤褐色	
8	砂粒	橙色	内外面、ミガキ
9	砂粒	にぶい黄褐色	外面、ミガキ
10	砂粒	褐色	内外面、ミガキ
11	砂粒、礫	褐色	12と同一個体

番号	胎土	外面色調	備考
12	砂粒、礫	褐色	11と同一個体
13	砂粒、礫	明赤褐色	
14	砂粒	黒褐色	
15	砂粒	暗褐色	内面、ミガキ
16	砂粒	黒褐色	外面、煤付着
17	砂粒、礫	褐色	
18	砂粒	橙色	外面、煤付着
19	砂粒、礫	にぶい橙色	
20	砂粒	黒褐色	
21	砂粒、礫	灰黄褐色	網代痕 底径9.5cm

第27図 倒木痕出土遺物

黒褐色土と火山灰混土からなり、基本土層第ⅩⅢ層の礫層が続いていた。埋土からは遺物が出土している。

1～8は縄文後期の土器である。1は波状口縁の口縁部片である。口縁部に段を有し、LR縄文を横位に施文した後、沈線を口縁に沿って引いている。波頂部の口縁部下端にはボタン状突起を貼付している。2と3は同一個体である。壺形土器の口縁部から胴部の土器片で、断面は内傾している。橋状の把手をもち、口縁部は間の空いた2条の帯縄文である。帯縄文の直下には横位の沈線を巡らし、1列目の帯縄文と把手には横位の沈線が縄文（RL縄文）施文後に引いている。胴部は縦位と横位の平行沈線内に縄文を充填している。4は深鉢形の口縁部から胴部の土器片である。断面は口縁部が大きく外へ開き、括れ部があり、胴部はわずかに内湾している。文様は口縁部が斜位の平行沈線文と渦巻沈線文からなる。胴部には横位のRL縄文を施文している。5は沈線による帯縄文に縦位の沈線を引いている。6は2本の弧状沈線を引き、沈線内の縄文を磨り消している。7は断面が外反している。口縁部は段を有し、縦位のRL縄文と円形刺突文を施している。頸部は無文で胴部はRL縄文を横位に施文している。8は渦巻沈線文を施している。9と10は晩期あるいは弥生土器である。9は短頸壺形土器の口縁部である。横位の沈線上に2個1対の粘土粒を貼付している。10は鉢形土器の口縁部片である。内面には段を有する。外面には2列の細隆線を貼付し、直下には隆線に沿って沈線を引いている。11～16は口縁部片である。11と12は同一個体である。口縁部には段を有し、断面は頸部にかけて外反し、胴部で内湾している。器面にRL縄文を横位、縦位に施文し、頸部に2条の半円状沈線文を横位に展開して施している。13は断面が内傾している。口縁部に段を有している。口縁部に縄文を施し、胴部に横位の沈線を引き頸部は無文にしている。14も同じく口縁部に段を有している。15と16は晩期の粗製土器片である。15は深鉢形土器片である。口縁部は無文部を形成し、胴部に横位のRL縄文を施文している。16は口唇部の断面は内削ぎ状を呈し、胴部は少し内湾している。口唇部は抉りを入れ、胴部には横位のRL縄文を施文している。17～20は胴部片である。17は鉢形土器片で、横位の沈線がわずかに観察される。18は壺形土器の肩部である。内湾した断面で、無文である。19は無節L縄文を縦位に、20はLR縄文を横位に施文している。21は網代痕を残す底部片で、編み方は「1本超え1本潜り1本送り」である。

（4）遺構外出土遺物（第28～42図）

遺物包含層から出土した遺物は縄文土器（前期～晩期）、弥生土器（前期、後期）、土製円盤、土製品、石製品、石器である。その他、黒曜石、頁岩製の剝片、チップが出土している。

土器（1～337）

前期（1～32）

1は少し外反した断面をもつ土器である。口縁部にS字状結節縄文が横位に展開し、胴部にはLR縄文を横位に施文している。2～4は文様から同一の分類に属する。2は平口縁で、口唇部の断面は角頭状をなし、口縁部は内折している。文様は口縁部に撚糸文Lの原体圧痕文を2条、口縁に沿って施している。頸部は原体圧痕文間に充填している。3と4は頸部片で、3は撚糸文R、4は撚糸文Lの原体圧痕文を渦巻状、直線状に施文している。ともに渦巻状の原体圧痕文の脇から斜位の短沈線を引いている。2～4は文様の特徴から、前期初頭の上川名Ⅱ式に位置づけられ、1もほぼ同時期に平行するものと考えられる。5～7は同一個体で、口縁部の断面はやや外に開いている。口唇部は指頭圧痕で調整されている。器面には左撚りの「1」4本を組んだいわゆる「組縄縄文」（1992 高橋）を横位に施文している。8の口唇部は指頭圧痕と異なり円形の刺突からなり、地文はLR縄文を横位に

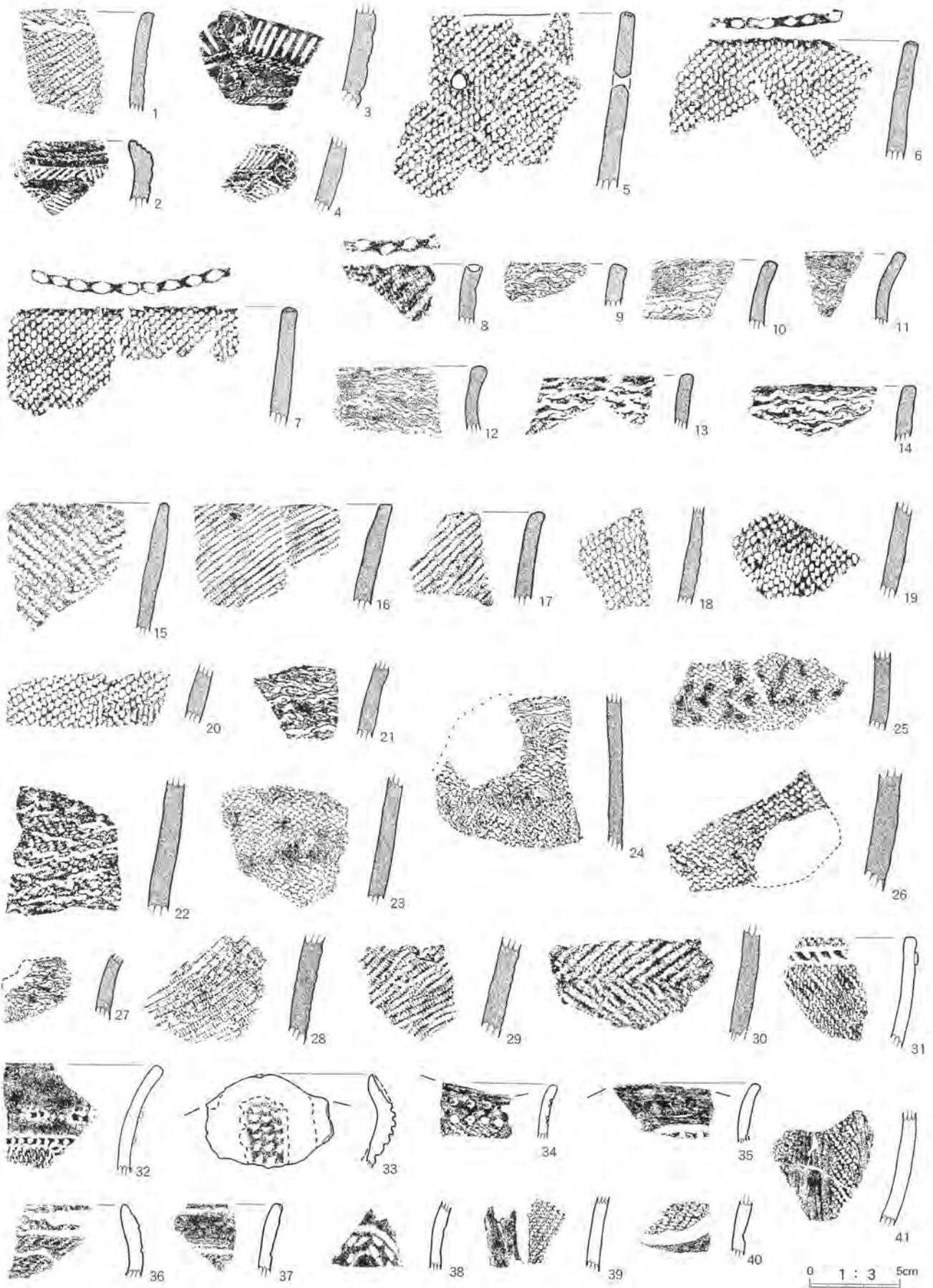
施文している。9～14は口縁部に不整撚糸文を3、4段施文している一群である。10～12、13と14はそれぞれ同一個体で、10～12は口縁部の断面が外湾し、13と14の断面はわずかに外に開いている。15～17は外に開きながら立ち上がる断面をもった、地文が縄文の口縁部片である。15はR L縄文を横位、縦位に施文して羽状の効果を表出している。16と17は同一個体で、R L縄文を横位に施文している。18～30は胴部片である。18から20は5～7と同一個体で、「組縄縄文」を横位に施文している。21は10～12と同一個体である。22は10～12、21と同様に不整撚糸文を横位に施文している。23～26は同一個体である。断面はやや膨らみながら外に開き胴部上半へ向かって内傾しながら立ち上がっている。地文は横位に施文した組紐縄文で、胴部上半は24から不整撚糸文を施文している。27は13、14と同一個体で、断面はきつく外反している。28と29は16、17と同一個体である。30は無節のLとR縄文を横位に施文した羽状縄文である。5～30は胎土中に繊維が混入しているため前期前半に含まれるが、なかでも「組縄縄文」、不整撚糸文、組紐縄文を施文している土器とそれの同一個体である5～7、9～14、18～27は大木1あるいは2式の範疇に入るであろう。31と32は胎土中に繊維を混入しない口縁部片である。31は断面がやや膨らみながら外に開いている。R L縄文を横位に施文した後、連続した刻みを加えた隆帯を横位に貼付している。32は断面が外反し、口縁部には2列の細隆帯を貼付し胴部にはR L縄文を縦位に施文している。31と32は大木4式であろう。

中期 (33～43)

33は断面が外へ開きながら内湾している波状口縁部片である。外面は貼り付け部分が剥がれ、文様は三日月状の刺突しか残っていない。恐らく、逆U字状の貼り付け内に刺突を充填していたと考えられる。34と35は口縁が緩やかに波状をなす口縁部片で、断面はやや外反する。34は口縁部に2列の円形刺突文を口縁に沿って施している。刺突文の下にはR L縄文を縦位に施文している。36はキャリパー形の平口縁土器片である。地文にL R縄文を横位に施文し、横位と波状の沈線を引いている。37は口縁部が無文で、胴部には撚糸文を施文している。大木10式あるいは後期門前式である。38～41は胴部片である。38は断面が外反している。胴部に平行沈線を曲線状に引き、沈線内に列点を充填している。39と40はやや外反した断面で、沈線と縄文で文様が構成されている。39はR L縄文を縦位に施文した後、縦位の沈線を引いて縄文を磨り消している。40も39と同様、磨消縄文を施している。41は断面が球胴形に膨らんでいる。L R縄文を縦位に施文しているが、縄文を間を空けて施文しているため、磨消縄文の効果を表出している。42と43は同一個体で口縁は緩やかな波状を呈している。断面は口縁部が外反するが胴部上位で屈曲し、底部に向かって大きくすぼまっている。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯に分かれている。42の口縁部と胴部は接合していない。口縁部は沈線による逆U字状モチーフ内にR L縄文を横位に施文している。胴部は縄文を地文とし、胴部上位には2本あるいは1本の沈線を横位に巡らせ、沈線間または沈線下に円形の窪みを単位文として施している。その下には2本の平行沈線を縦位に引き、沈線間の縄文を磨り消している。縦位の平行沈線は胴部中位と底部においてU字状に沈線を結んでいる。大木9式に位置づけられる。

後期 (44～162)

44～50は同一個体の波状口縁深鉢形土器である。口縁部の44～46、頸部の47～49の下に50が続いている。断面は口縁部が内湾気味に外へ開き、頸部で括れ胴部は膨らんでいる。文様帯は口縁部文様帯、頸部文様帯、胴部文様帯からなる。44は口縁部から胴部上半の土器片である。波頂部下の口唇

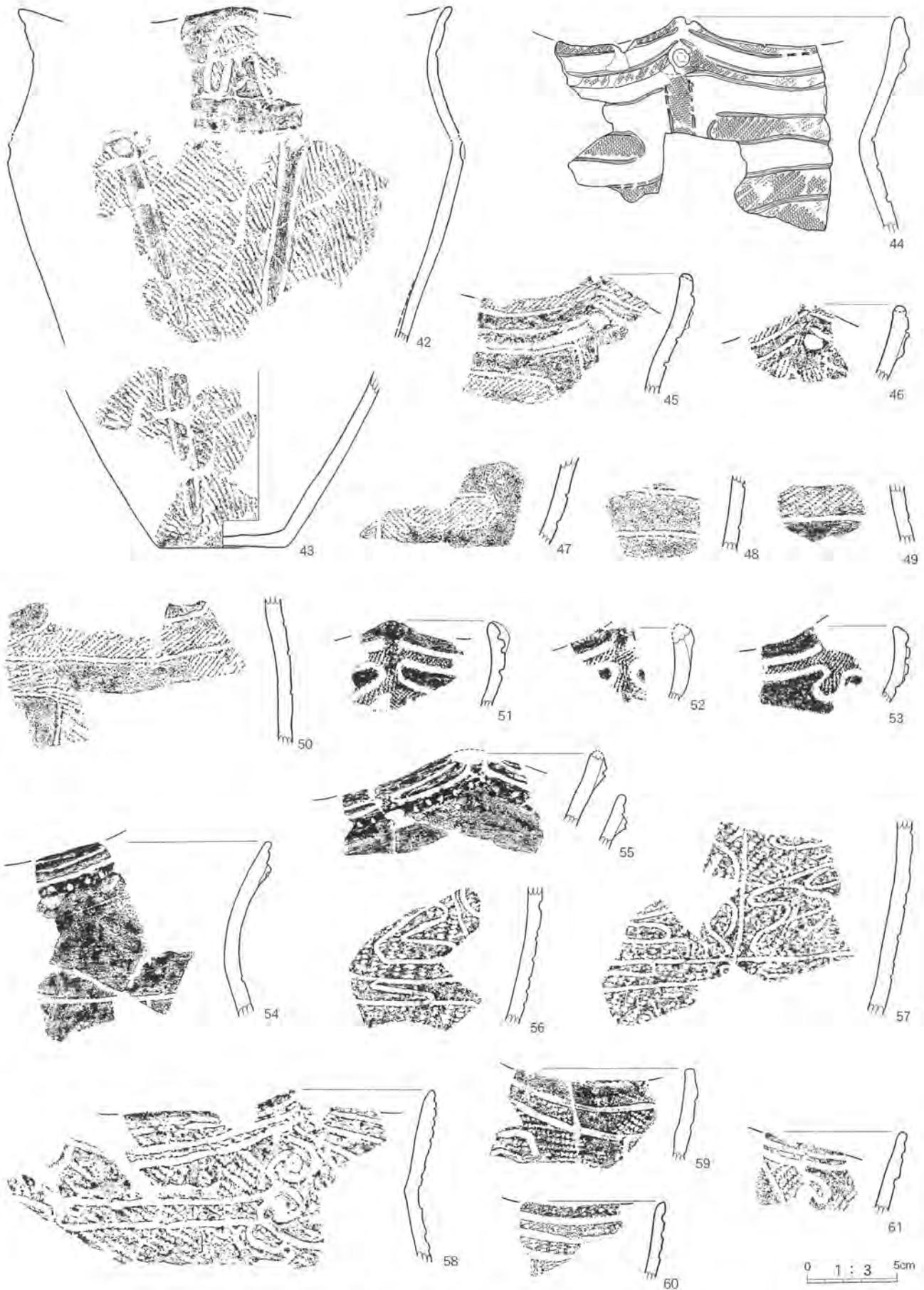


第28图 遺構外出土遺物 (1)

部にはヘラ状工具による押圧を施している。口縁部はL R縄文を横位に施文した後、2列の沈線を口縁に沿って引き、沈線間を磨り消して2条の帯縄文を施している。2列目の帯縄文の波頂部分にはボタン状の突起を貼り付けている。頸部は沈線による磨消縄文が展開されている。1列の沈線を口縁部と同じように波状に引き、沈線と連結した形で波頂部には帯縄文が垂下している。また、括れ部には磨消縄文からなる横位の楕円状文を施している。胴部には頸部と分割する帯縄文を施している。45と46も44のように2条の帯縄文とボタン状の突起からなる。47は楕円状の磨消縄文を施している。50は44に見られた胴部の帯縄文の下に方形状の沈線を引いている。51～53は同一個体である。外面が黒色に処理されている特徴をもつ。波状口縁で、やや大きく内湾した断面である。51と52は口縁部の波頂部に瘤状の突起を貼り付けている。突起の貼付後2本の沈線を口縁に沿って带状に引き、波頂部には沈線を連続してハの字に引いている。沈線間はR L縄文を横位、斜位に充填している。53は51、52と異なり波頂部に帯縄文と連結した滴状のモチーフが下がっている。54と55は同一個体であるが、56と57も胎土、色調から54、55と同一個体である。波状口縁深鉢形土器で、54は口縁部から胴部上半、55は口縁部、56と57は胴部下半にあたる。断面は頸部から口縁部まで大きく外反し胴部で膨らむと思われ、底部へ向かって内湾気味に下がっている。文様帯は口縁部文様帯と胴部文様帯からなり、頸部に文様はない。口縁部は第18図1、2のように隆帯を口縁に沿って貼付することで口縁部を区画し、隆帯上に円形刺突を連続して施している。区画内は沈線による杵状文を引いている。胴部上半は横位の沈線が巡り、わずかに縦位の沈線が見える。胴部下半は縦位のR L縄文を地文とし、沈線による縦位区画文、ハート文、蛇行沈線文、横位の平行沈線文を施している。縦位区画内と横位の平行沈線文間は第18図1と同様に、縦位区画内には縦長のS字文と釣針状文が、平行沈線文内には横長のS字文あるいはクランク文を沈線により施している。

58～77は波状口縁を呈している。58～60、62は地文を縄文とし縄文地に沈線を引いている土器群である。58は断面が口縁部で外に開き、頸部で括れ胴部はやや膨らんでいる。R L縄文を横位に施文した後、口縁部は3列の沈線を口縁に沿って引き、頸部は波頂部に渦巻状沈線を配し、胴部上位には頸部の渦巻状沈線下に同様の渦巻状沈線を配し、2条の平行沈線を巡らして胴部文様帯を形成している。59は口縁部片で断面が内湾気味に外へ開いている。R L縄文を横位、斜位に施文した後、口縁部には2列の沈線を口縁に沿って引き、頸部は蛇行状と思われる沈線が引いている。60は59に似た断面を為し、R L縄文を斜位に施文した後、3条の沈線を口縁に沿って引いている。62は口縁部が小さく外反し胴部が小さく膨らむ断面である。R L縄文を縦位に施文した後、口縁部は3条の沈線を口縁に沿って引き、胴部は2条の平行沈線を斜位に引き、胴部下の平行沈線と連結させている。連結部には左右に対向した短い半円状の沈線をずらして引いている。61は口縁部の文様は59に類似するが、頸部に磨消縄文が認められる点で異なる。

63～69は段を有する口縁部片である。段は口縁部下端に粘土を貼り付けるもの(63、67～69)と、貼り付けていないもの(64～66)がある。口縁部の断面は外に開くものが多いが、66は口縁部がやや直立し、69は外反しながら外に開いている。63と64は58～60、62と同様、口縁部が縄文地に沈線を引いている土器である。63の波頂部の口唇部には刻みを加えている。文様はR L縄文を縦位に施文し短沈線を口縁に沿って引いている。64はL R縄文を横位に施文し2本の平行沈線を口縁に沿って引いている。65～69は口縁部の文様が縄文地に沈線を引き沈線間の縄文を磨り消して無文部を形成している土器である。65と66は波頂部に3列の円形刺突文を施している。67は波底部に2列の円形刺突文を施している。68と69には装飾が無く、2条の帯縄文からなる。



第29図 遺構外出土遺物 (2)

70と71は44～46と同様に口縁部下端にボタン状の突起を貼付している土器である。70は44～46に類似している。口縁部は縄文を施した後に沈線を引き、ボタン状突起の他に円形刺突文を施した隆帯を貼付している。71の口縁部も同様である。

72と73は口縁部に段が無く、地文が無いかわずかに見られる土器である。72は波頂部の口唇部に2本の刻みを施している。73は断面が内湾気味に外へ開いている。口縁部には2本の波状沈線を引き、頸部は蛇行状沈線を引いている。

74～77は口縁部に隆帯を貼付している土器群である。74と75は第18図1、2の口縁部と同じ文様構成をしている。76は74、75よりも細い隆帯を口縁に沿って貼り付け、波頂部の隆帯下にはボタン状突起を模した突起を貼付し、円形刺突を隆帯上と突起の窪みに施している。77は断面が内湾気味に外へ開いている。口縁部に隆帯を貼付し、無文帯を形成している。地文は無節のR縄文を横位に施文している。

78～91は平口縁を呈している。78～80は地文を縄文とし縄文地に沈線を引いている土器群で、58～60、62と同類と思われる。78はLR縄文を斜位に施し、口縁部には2本の沈線を横位に引き、頸部には蛇行状の沈線を引いている。79はLR縄文を縦位に施文し、口縁部には3本の沈線を引き、頸部には2列の斜沈線を引いている。80は頸部に弧状の沈線を引いている。地文はRL縄文である。

81と82は口縁部に段を有する土器片で、63～69と対応する。81は断面がほぼ直立している。口縁部に2列の円形刺突を施し、杵状の沈線を引いている。地文はLR縄文を横位に施文しているが、充填しているか磨り消しているかは不明である。また、段の下端には沈線を引いている。82は頸部の断面が外反している。口縁部には円形刺突の跡がわずかに観察され81と同様であるが、杵状の沈線内を磨り消して無文帯を作出している点が81と異なる。

83は段を有しているか不明であるが82と同じく縄文を磨り消して無文帯を作出している。内外面に赤彩が観察される。

84、85は口縁部に段は無く、部分的に縄文を施している土器である。84は口縁部の断面がやや外反気味に外へ開いている。口唇部直下に横位の沈線を引き、間を空けて2本の沈線を弧状に引いている。沈線間にはわずかに縄文が観察される。85は口唇部が角頭状を呈し、頸部の断面は外反している。口唇部直下に横位の沈線を引き、間にRL縄文を横位に施文している。頸部は楕円状の沈線を引いている。

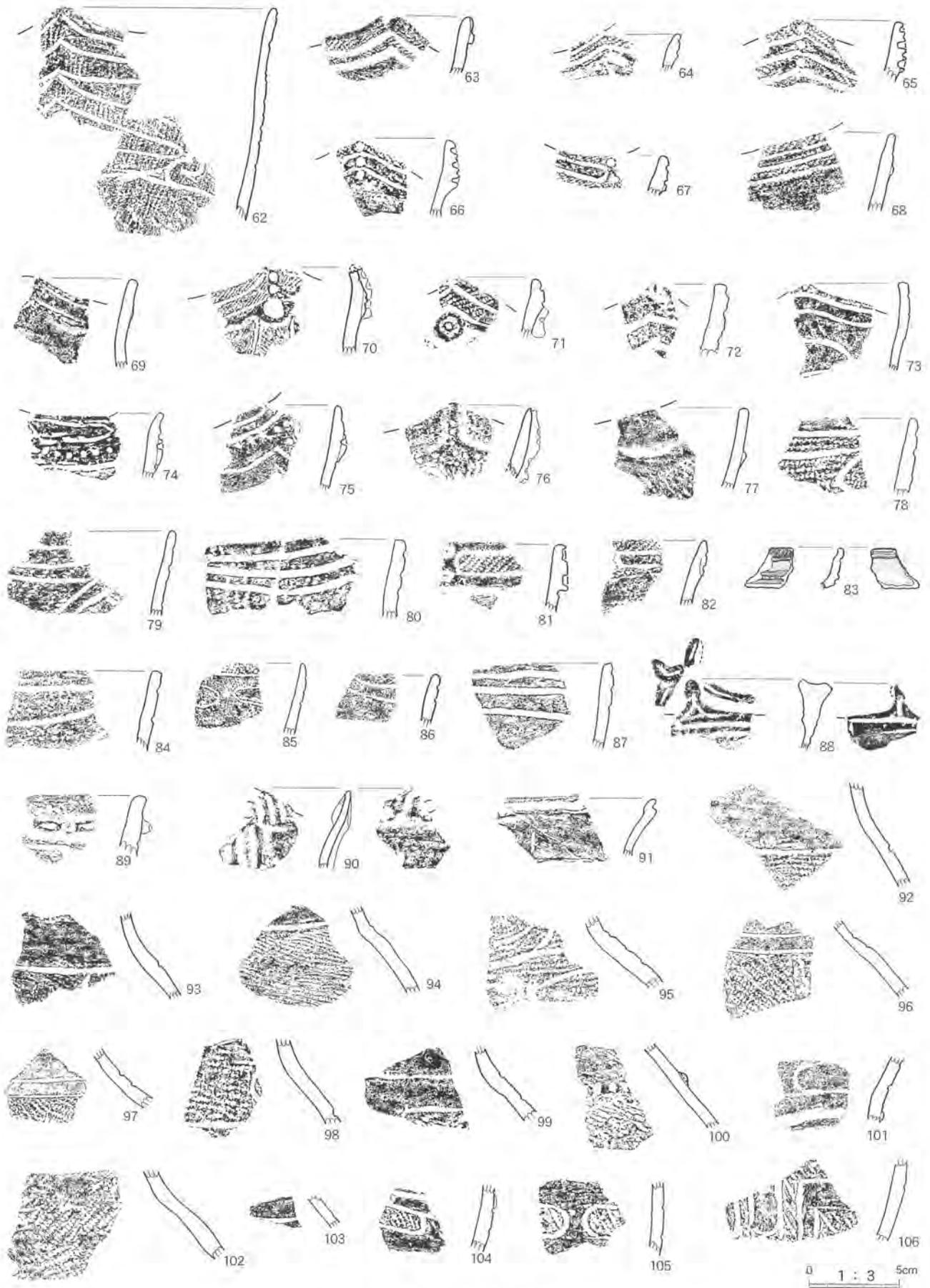
86と87は無文地に沈線を引いている口縁部片である。86は弧状の、87は横位の沈線を2ないし3本引いている。

88は口唇部に上部が肥厚した山状突起を貼り付けている。突起の上部と両側縁部に短沈線を引き、同じ工具で口唇部、口縁部、内面にも沈線を引いている。口縁部には三叉状の沈線を引いている。

89は口縁部に隆帯を貼付している土器で、分類上は77と対応すると思われるが、89は門前式にみられる鎖状隆帯を貼付している。

90と91は接合している。隆帯を貼付している断面は口縁部で少し屈曲し、頸部で外反している。口縁部は内外面とも粘土を貼り付け、波頂部には穿孔を施している。外面は穿孔部の周りに短沈線を引き、内面は曲線文と円形刺突文を施している。頸部は2本の隆帯を縦位に貼付している。91は断面が口縁部でくの字に折れ、頸部はきつく外反する。内面は口唇部に粘土を貼付して段を作出している。口縁部の幅は狭く、横S字状の沈線を引いている。

92～103は断面が胴部上半で内傾し頸部で外反する土器を一括した。



第30図 遺構外出土遺物 (3)

92～98は縄文と沈線の組み合わせからなる土器群である。92～94は全てL R縄文を施文した後、胴部上半に横位の沈線を引いている。95はL R縄文を縦位に施文した後、曲線状あるいは斜位に沈線を引いている。96と97は胴部上半に2条の平行沈線を横位に引いている。96はL R縄文を縦位に施文し、縄の結節が縦走しているのが確認される。98は胴部中位に横位の沈線と蛇行状沈線を引いている。99は胴部上半に横位の沈線を、胴部中位に方形の沈線を引き、沈線内には縄文を施文している。

100は胴部上半に刻みを有する隆帯を貼付している。地文は無節R縄文である。101は胴部にC字状の沈線を引いている。102はL R縄文を横位に施文している。103は横位の沈線を引き、部分的に赤彩を施している。

104～162は頸部から胴部の破片である。104～106は断面が内湾気味に立ち上がり、文様は沈線間に縄文を充填したもの、あるいは磨消縄文からなる土器である。104は頸部片である。地文はR L縄文で、隆帯貼付後に沈線を縁取り、下方の沈線からはクランク状に沈線を引いている。105はR L縄文を横位に施文した後、楕円状の沈線を引いている。106は平行沈線による方形区画文を施し、沈線間にR L縄文を横位に充填している。

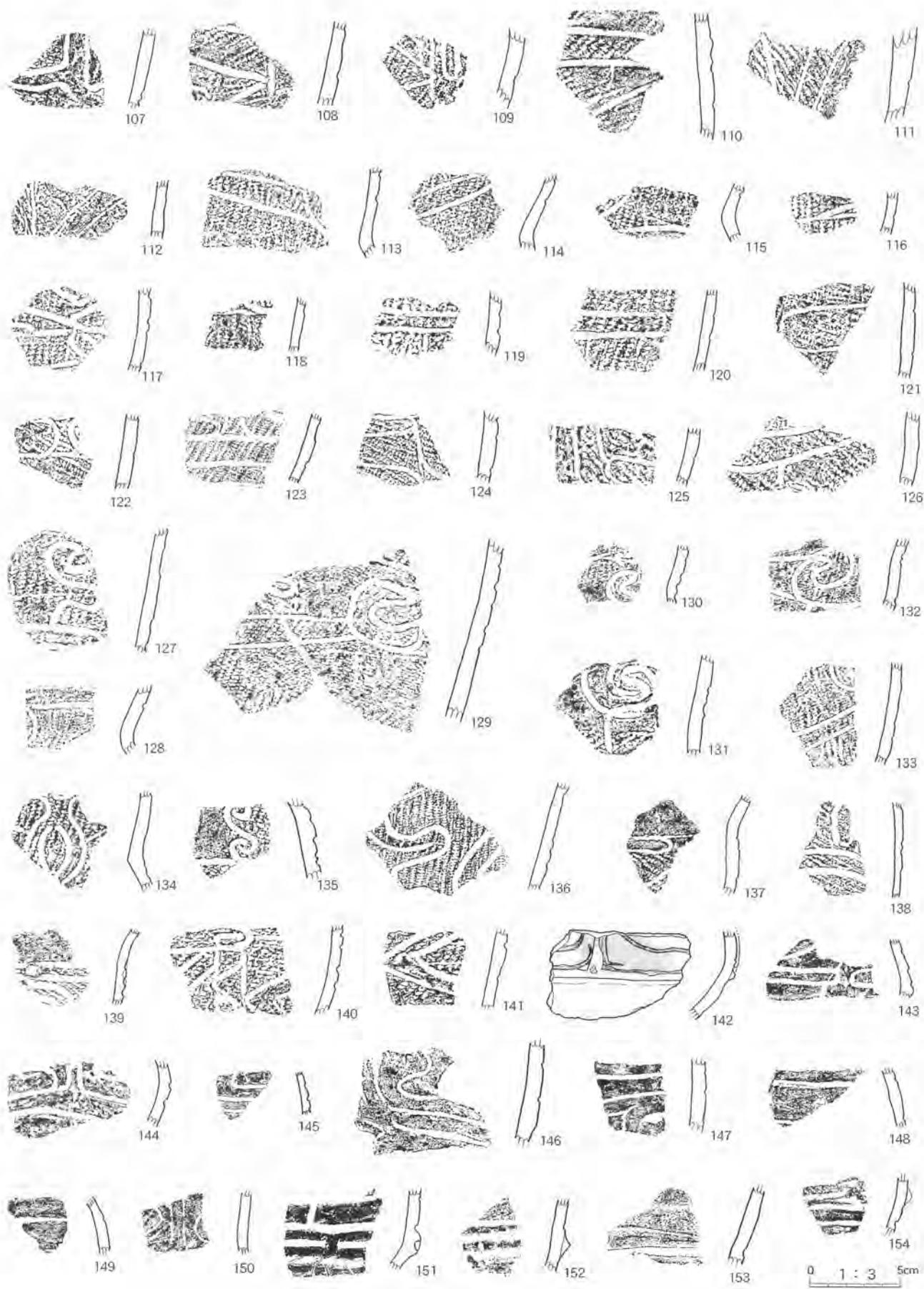
107～141は地文を縄文とし、沈線文を主体に施した土器群である。沈線文は大略して縦位区画文、タスキ掛け状などの直線文を主とする一群、楕円状などの曲線文からなる一群、渦巻文からなる一群からなる。

107～120はタスキ掛け状を代表とする直線文からなる一群である。107は方形の文様からなる。108と109は縦位の沈線とタスキ掛け状沈線文からなる。108はL R縄文を横位に施文している。109は縦位区画内に楕円状の沈線を引いている。地文は縦位のR L縄文である。110は断面が内傾している。L R縄文を横位に施文し横位の平行沈線と斜沈線を引いている。111と112は斜位の平行沈線を引いているが、やや弧状であり、第11図10に類似している。地文はともに横位のR L縄文である。113～118は同一個体である。胴部中位で括れ(113～115)、胴部下半は内湾している(116、117)。R L縄文を斜位に施文し、タスキ掛け状沈線、横位の平行沈線を引いている。117は平行沈線内に「()」状の沈線を引いている。119と120は横位の平行沈線を引いている土器である。地文は縦位のR L縄文である。

121～126は曲線文からなる一群である。121と122は楕円状の沈線を引いている。地文はともに横位のR L縄文である。123は横位の楕円状沈線を平行沈線間に配している。124と125にも楕円状の沈線が窺える。126は平行する曲線文と縦位の沈線を施している。

127～133は渦巻文を施している一群である。127はR L縄文を斜位に施し、渦巻文とこれと連結したクランク文を施している。129は胴部下半にあたり、断面はほぼ直線状に外に開いている。R L縄文を縦位に施文し、横位の平行沈線と渦巻文を連結させて引いている。132は第15図1の頸部と類似している。133は渦巻文と斜位の平行沈線からなる。

134～141は上記の三群に属さない土器である。134は断面が胴部中位で括れ、胴部上半と下半は内湾している。R L縄文を縦位に施文し、紡錘状の沈線を引いている。135は内傾した断面で、S字状沈線と横位の沈線を施している。地文は縦位のR L縄文である。136はR L縄文を縦位に施文し、蛇行状の沈線を施している。137は断面が胴部中位で括れている。胴部下半に蛇行状もしくは楕円状の沈線と斜沈線を引いている。138と139は色調、胎土から同一個体である。頸部で外反し胴部で膨らんだ断面をもつ。胴部に無節のL縄文を縦位に施文し、胴部上半には円形のボタン状貼付文を施し、脇から横位の平行沈線を引いている。胴部下半にあたる138には弧状、楕円状の沈線を施している。



第31圖 遺構外出土遺物 (4)

140と141は同一個体である。渦巻文を施した後、横位、縦位の沈線を引き、さらに沈線による「く」の字文を横位に連続して施している。地文は縦位のRL縄文である。

142～157は無文地に沈線を多用している土器群である。

142～145は口縁部、胴部の断面が直立ないし内傾している鉢形土器である。144と145は器面を丁寧に磨いている。142は断面が直立気味から底部に向かって急にすぼまっている。口縁部に横位、縦位の隆帯を貼り付けて区画文を作出し、縦位の隆帯上には2個の円形刺突を施している。区画内には沈線を引き、赤彩している。143は内傾し胴部で屈曲した断面をもつ。口縁部に長楕円状の沈線を施している。長楕円状文の一部は赤彩している。144断面が内湾している。口縁部に楕円状、方形状の沈線を施している。外面は赤彩している。145の断面はやや内湾気味に内傾している。口縁部に横位の平行沈線と方形状の沈線を施している。

146～151、155は沈線文からなる胴部片である。断面は内湾気味に外へ開いている。146と147は同一個体である。器面を丁寧に磨き、沈線による平行沈線文、渦巻文を施している。148と149は同一個体で一部、赤彩が観察される。断面は内湾気味に膨らんでいる。文様は横位の沈線文である。150は84と同一個体である。縦位の平行沈線を垂下し、楕円状の沈線を施している。151には橋状の突起を貼付している。155は内湾気味に立ち上がる断面をもつ。楕円状沈線と平行沈線を斜めに展開させている。一部、赤彩が観察される。

152～154、156、157は沈線文に隆帯を伴う土器である。多くの断面は若干内湾気味に立ち上がる。152は横位の隆帯と沈線からなる。153は横位の隆帯を貼付し、横位の沈線を施している。154は横位の隆帯と曲線状の沈線からなる。157は横位の隆帯を貼り付け、隆帯に指頭圧痕状の押捺を施している。また、横位と2条の沈線を引いている。

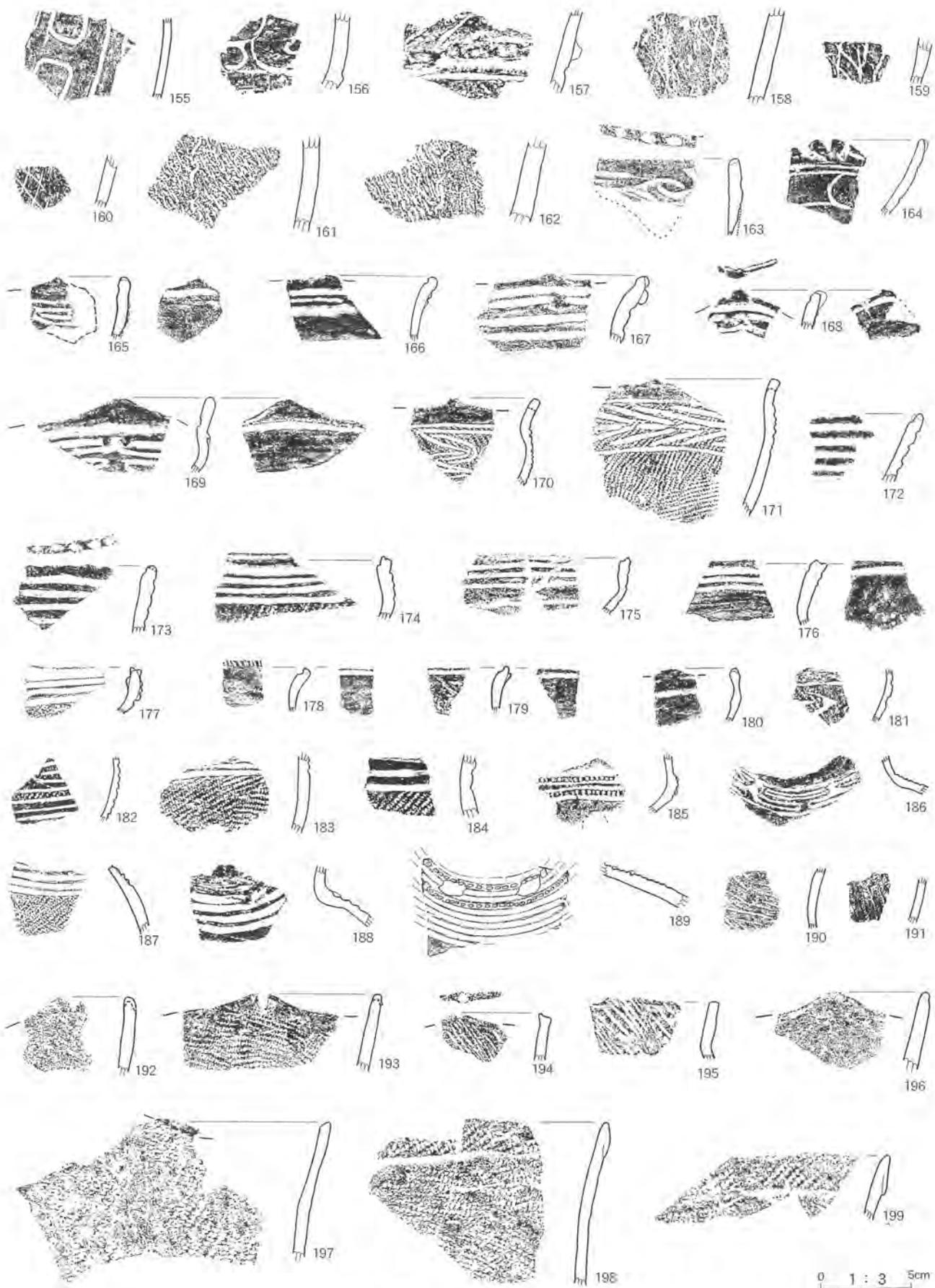
158～160は網目状撚糸文を施文している土器である。原体はRの撚糸文である。

161、162は同一個体で、直前段反撚のRR縄文を施文した後、綾絡文を施している。

晩期～弥生時代（163～191）

163～191は晩期から弥生時代に該当する精製土器である。時期が特定できるものもあるが、晩期か弥生か判別できないものもある。

163～180は口縁部片である。163は断面が内湾しながら直立している。口唇部には列点文を施し、口縁部には沈線による入組三叉文を施している。晩期初頭、大洞B式に比定される。164は内湾気味に外へ大きく開く断面で、鉢形土器と思われる。口唇部にB字状の小突起を付け、口頸部には磨消縄文を施している。地文は縦位のRL縄文である。晩期中葉、大洞C₁式に比定される。165～171は山状の口縁を呈する土器である。粘土貼付により断面が肥厚しているもの（167、168）とそうでないもの（165、166、169～171）がある。165は口唇部の頂部右側に短沈線を施し、口頸部には細隆線による工字文を施している。166は断面が大きく外反している。外面は施文後、磨きが丁寧に施されている。2本の隆線を工字状に貼付している。内面には横位の沈線を施している。167は168の断面同様、大きく外反している。口唇部、口頸部に粘土粒を貼付した後、口頸部上位には粘土粒を分断する沈線と粘土粒に繋げる沈線を引き、その直下には3条の平行沈線を引いている。内面には166と同様、横位の沈線を引いている。168は2本の隆線を横位に貼付し、粘土粒を貼付した跡がある。169は鉢形土器片で、断面は口縁部が外に開いており、頸部で丸みをおびる。口唇部には沈線を引いている。胴部には細隆線を3本貼付し、頂部には上2本の隆線上に2個1対の粘土粒を貼り付けている。



第32图 遺構外出土遺物 (5)

内面には口縁部と頸部の間に段を有している。170は171と断面が類似している。胴部は横位のRL縄文を地文とし、頸部と胴部の間に横位の平行沈線を配し、対向する弧線をずらして引いている。171は双山からなる山状口縁を呈する。鉢形土器破片で、断面は169、170に類似するが、頸部は比較的緩やかに外反する。胴部は横位のLR縄文を地文とし、幅広の平行沈線を引いている。沈線間には綾杉状沈線を横位に連続して施している。大洞A¹式である。172～181は平口縁の土器片である。文様は主に数条の沈線を横位に巡らしている。172と173はともに口唇部に押圧が加えられて波状を形成し、胴部に4、5条の沈線を横位に施している。173は断面が大きく外に開いている。また、内面には煤が付着している。174は4条の沈線下に横位のLR縄文を施している。内面には段を有する。175は口唇部の断面が角頭状を呈している。口縁部には4条の沈線を、胴部には横位の沈線を引いている。176は口唇部の断面が肥厚している。口唇部と内面に沈線が巡り、外面は3本の沈線を引くことで2本の隆線を作り出している。胎土は166に類似する。177は口唇部、内外面に横位の隆線を貼付している。施文後は内外面とも丁寧に磨いている。178と179は壺形土器の口縁部で頸部の断面は大きく外反している。178は口唇部に刻みを施し、内面に横位の沈線を引いている。179は口唇部の断面が角頭状を呈し、外面には隆線を貼り付けている。180は無文の口縁部で内外面に稜をもつ。C字状の突起をもつことから大洞B式に比定される。

181～185は胴部片である。181は横位のRL縄文を地文とし、入組文を施している。大洞C₂式である。182は磨消縄文を伴い、横位の沈線と工字文に類似した曲線文を施している。大洞C₂あるいは大洞A式である。183は横位のLR縄文を地文とし、2条の沈線を横位に引いている。184は断面が外反している。横位の平行沈線を引いた後、LR縄文を横位に施文している。縄文より上は丁寧に磨いている。185は小型の注口土器片で、胴部中位にあたる。間の空いた2条の刻み目列を横位に巡らし、胴部下半は縄文を施文している。胴部上半は丁寧に磨いている。

186～189は壺の肩部片である。186は肩部に工字文を施している。大洞A式である。187は断面が丸みを帯びている。横位のLR縄文を地文とし、隆線を横位に貼り付けている。188は肩部に4条の沈線が巡り、肩部の上位には2個の1対の粘土粒を貼付している。189は肩部に流水状の沈線が巡り、途中、沈線間に連続刺突を施している。連続刺突は斜めから鋭い工具からなる。また、刺突列の間には何らかの貼り付けが2個あったものと思われる剥落痕があり、2列目の刺突列の左端には橋状の粘土粒を貼付している。

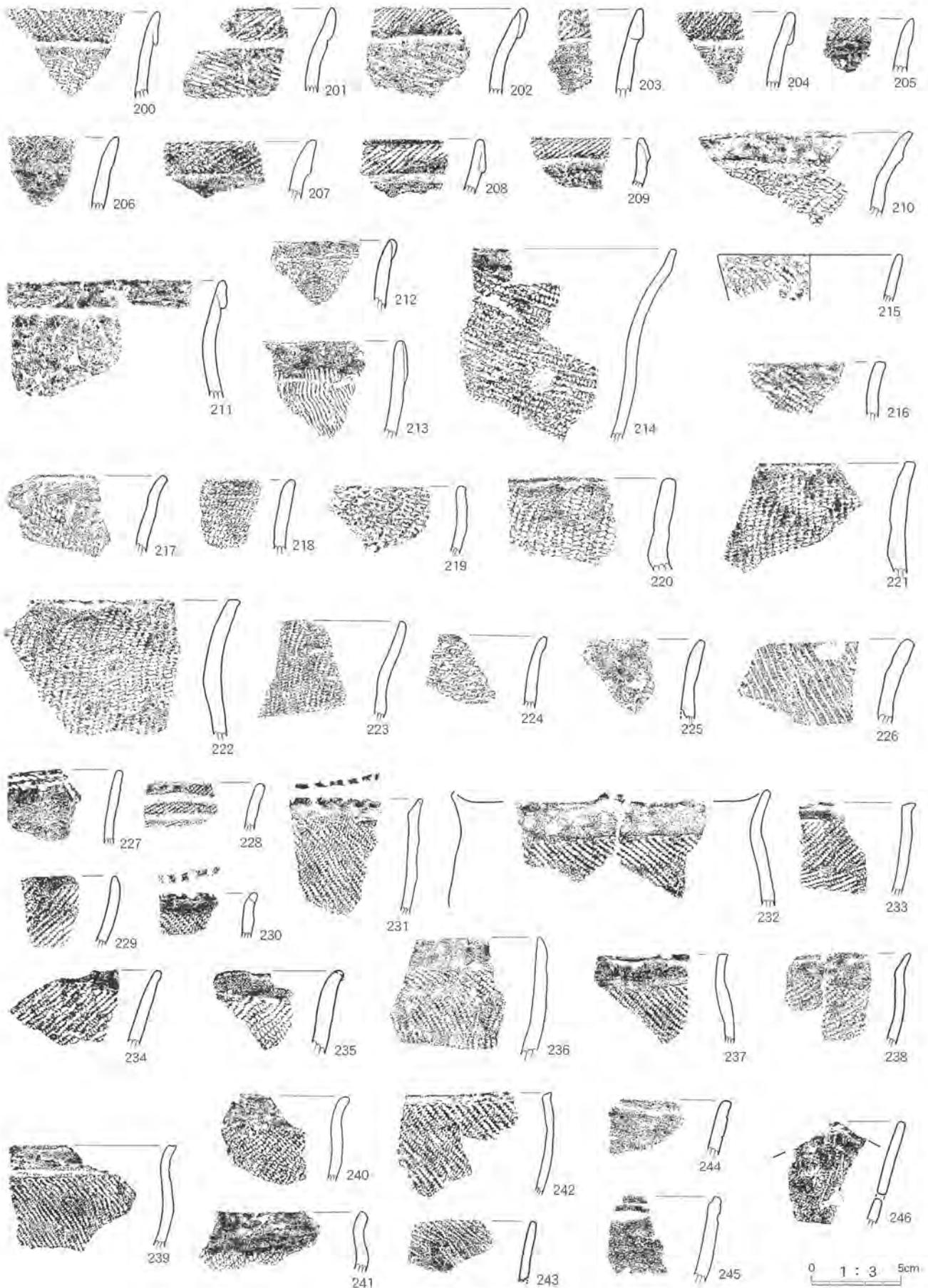
190と191はともに撚糸文を施文している。190は壺の頸部片で、撚糸文が斜走しており、191は撚糸文が縦走している。いずれも弥生後期の赤穴式に比定される。

その他の土器 (192～337)

以下の土器は粗製土器、時期の判別ができない土器、底部からなる。

192～197、246、247は波状口縁または山状の口縁である。

192と193は波頂部に窪みを有する土器である。44～46にもあるように精製、粗製区別なくみられる。194～196は山状の口縁を呈する。194は頂部に縄を押圧している。195は斜走する撚糸文を施文している。197は波状口縁の波底部分で、RL縄文を縦位に施文している。246は直線的に外へ大きく開く断面をもち、胴部にLR縄文を縦位に施文している。247は波状口縁深鉢形土器の口縁部から胴部までの破片である。断面は口縁部が内湾気味に外へ開き、胴部との間で括れ、胴部は内湾している。口縁部は無文で斜位のケズリの調整を施し、括れ部から胴部にはLR縄文を横位に施文している。外



第33圖 遺構外出土遺物 (6)

面の口縁部には部分的に煤が付着し、内面の口縁部から胴部上半にかけては煤もしくは炭化物を多量に付着している。198～245、248、249は平口縁の土器片である。198～213は段を有する口縁部をもつ土器群である。口縁部、胴部に縄文を施文しているもの(198～202)、頸部に擦痕を残すもの(204)、頸部が無文のもの(203、205～209)、口縁部が無文で頸部に縄文を施文しているもの(210、212)、全面無文のもの(211)、胴部に櫛歯状沈線を引くもの(213)に分かれる。頸部は外反しているものが多い。

214～229、248、249は時期が判別できない平口縁の土器片である。214は断面が口縁部で内屈し頸部が外反、胴部で内湾している。口縁部を無文にし、頸部から胴部にR L縄文を横位に施文している。215～217はR L縄文を横位に施文している。219、224はR L縄文を縦位に施文している。218、220～223はR L縄文を斜位に施文している。225はL R縄文を横位に施文している。226はL R縄文を縦位に施文している。227は口唇部直下に原体圧痕文を施している。228は間を空けてL R縄文を横位に施文している。229は鉢形の土器片で、口唇部の断面は角頭状を呈し、胴部にはL R縄文を横位に施文している。248は大形の深鉢形土器で、断面は247と類似している。全面にR L縄文を縦位に施文している。249は深鉢形土器で、頸部は緩やかな括れ部をもち胴部は小さく内湾している。全面に5ないし6本からなる櫛歯状工具を1単位に縦、斜めに引いた条線文を施している。外面は磨滅が激しいが、条線の溝に煤が付着している。

230～242は縄文晩期あるいは弥生時代初頭の粗製土器である。口唇部に抉りを入れているもの(230、231)、171のように双山からなる山状口縁を呈するもの(232)、口唇部に押圧を加えるもの(233～235)、口唇部が平らなもの(236～242)と多様である。断面も頸部が外反するものや外反せず胴部が内湾しているもの、頸部が外反し胴部が内湾しているものなどがある。地文の縄文はすべて横位に施文しているが、口縁部を無文にしているものが多い。

243は節の細かいR L縄文を横位に施文している。244は細沈線を斜位に引いている。245は無文であるが、口唇部の形状は172、174に類似している。

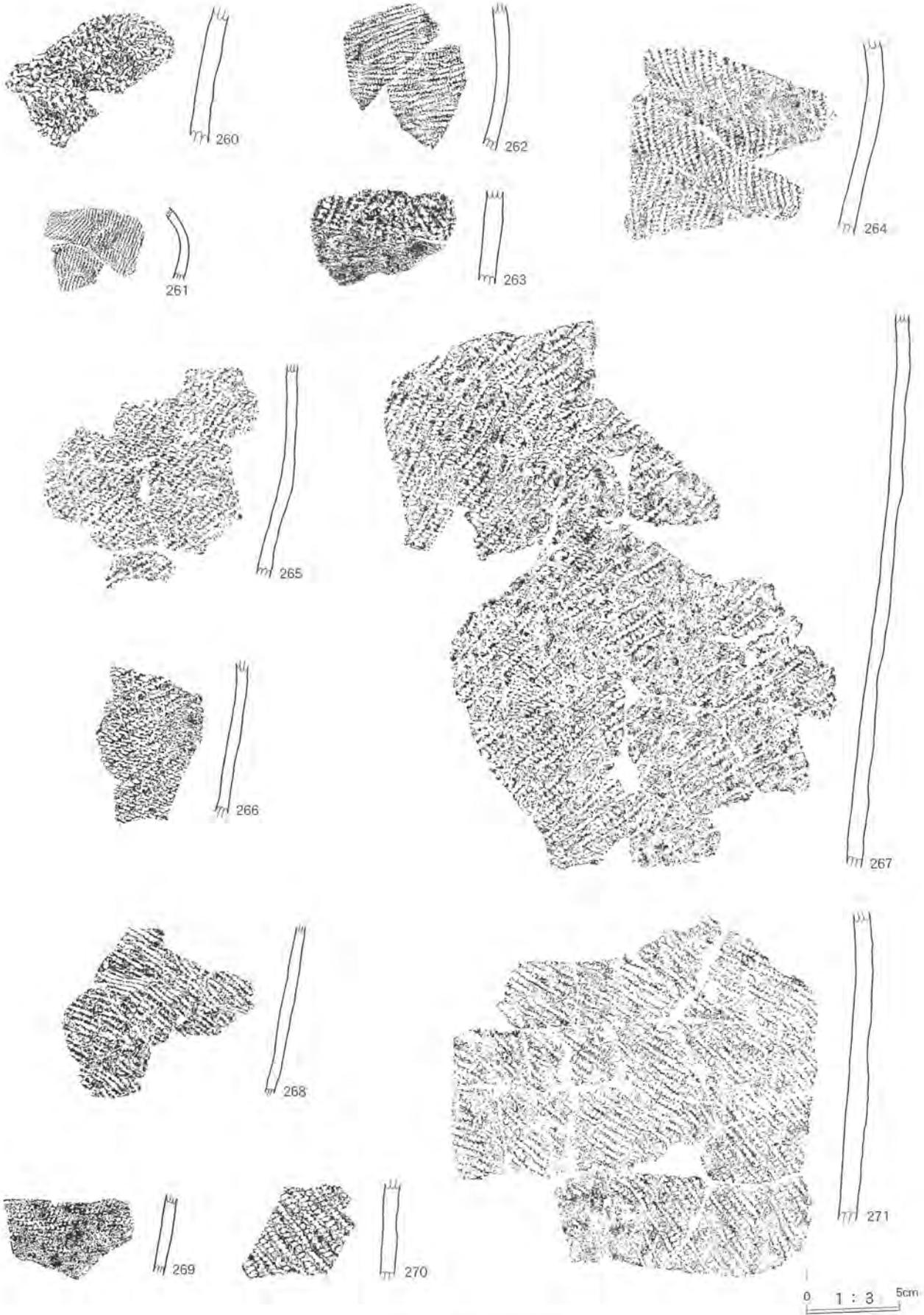
250～287は胴部片である。この中には壺形土器の肩部のものも含んでいる。

250はR L縄文を縦位に施文し、横位、弧状の沈線を引いている。251は断面が大きく外反している。左右対称に弧線を引き、R L縄文を横位に施文している。252は外反した断面である。断面三角形の隆帯を横位に貼付し、端を円形にした縦位の隆帯を2本平行に貼付している。隆帯上には縄文を施文し、隆帯に縁取るように沈線を方形状、楕円状に引いている。253は交差した沈線を数条引いている。254は斜位のL R縄文を地文として沈線を横位、斜位に引いている。また、棒状工具による刺突を低い角度から施している。

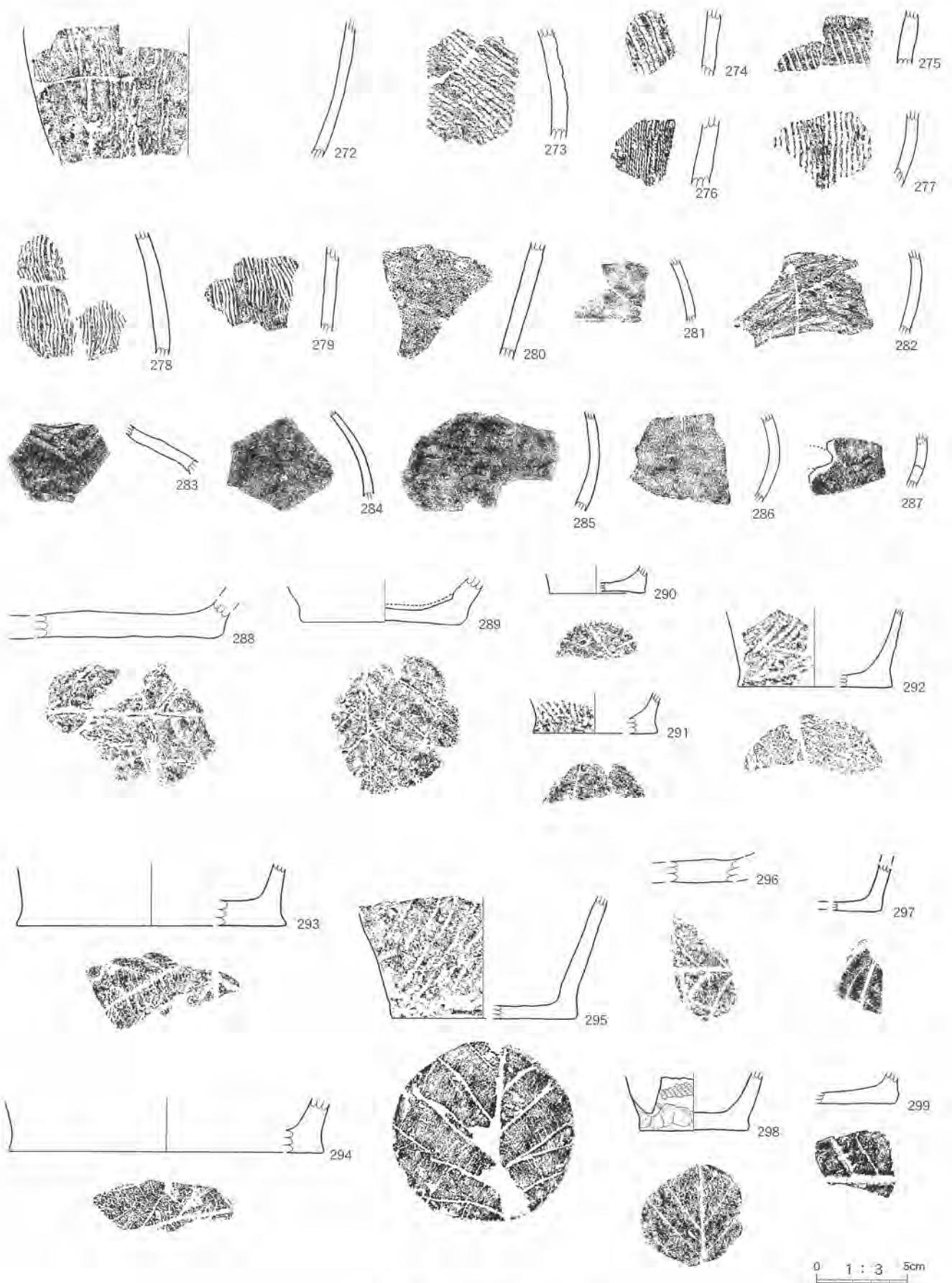
255～280は縄文を施文している胴部片である。以下、特筆すべき点を述べる。255は248と同一個体で、胴下半部にあたる。256は内外面に大きな黒斑が観察される。260はR L縄文を施文していると思われるが、器面が乾いた状態で施文したためか節がまばらで縄文があまり残っていない。261は壺形土器の胴部片である。R L縄文を縦位に施文している。264は223と同一個体で、いわゆるキャリパー形の土器である。267と271は大きめの破片で、それぞれ包含層中から一括して出土した。272は原体不明の無節縄文を縦位に施文している。273と274は同一個体で、条間のあるLの撚糸文を縦位に施文している。275は撚糸文Rを施文している。276は結節を伴う撚糸文Lを施文している。277は撚糸文Rを施文している。278、279は同一個体で、直前段合撚のL L縄文を施文している。280は原体不明で、節に煤が付着している。



第34図 遺構外出土遺物 (7)



第35図 遺構外出土遺物 (8)



第36图 遺構外出土遺物 (9)

281～287は壺形土器または注口土器の肩部、胴部である。無文で、後期から弥生時代までの資料である。281、283～285は外面に丁寧な磨きが施されている。284は内面も良く調整され、外面には黒斑が観察される。287は剥落痕のある穿孔部があることから注口土器と考えられる。

288～336は底部を一括した。底面は木葉痕あるいは笹の葉痕、網代痕、沈線、無文に分かれる。

288～299は底面に木葉痕を残す底部である。痕跡には線の細いもの(289～292、295、296、298)と比較的線が太く中に筋が観察されるもの(288、293、294、297、299)に大別される。断面は底面近くで張り出すものが多く、底面はほぼ平坦で上げ底状のものは少ない。295は底部がほぼ完全に残存している。木葉痕は底面からはみでている所があり、底部よりも余裕のある葉を敷いている。298も同様である。289は約3分の2の残存状況であるが、木葉痕が底面で収まっている。298は外面において、底部と胴部下半部との輪積部分に指頭による押圧調整痕が見られ、指紋が観察される。指紋はほぼ全周回っていると思われる。指頭による押圧調整は土器を正位に置き、指で摘まむ感じで底部を張り出している。また、粘土の切り合いから時計回りに調整している。299は底面を丁寧に磨いている。

300は笹の葉痕を残す長胴の小型深鉢形土器である。断面は胴部中位で内屈し胴部下半ではほぼ直線的にすぼまる。胴部にはR L縄文を横位に施文している。

301～322は底面に網代痕を残す底部である。網代の編み方は次の3種類が認められる。

- (1) 緯の条が1本超え1本潜り1本送りのもの(301～315)
- (2) 緯の条が2本超え1本潜り1本送りのもの(316～320)
- (3) 緯の条が2本超え2本潜り1本送りのもの(321、322)

網代痕が不明瞭なものが多いため、それぞれの割合を示すことはできないが、大方、(1)が最も多く出土し、次に(2)が少数あり、(3)はごく少数である。301は網代端部が観察される。302は底部が完全に残っている。底径が15cmと大型であるが、底面全体に網代痕が残っている。内面は黒く変色している。311の底部内面には煤が多く付着している。320は膨らみながらすぼまり、底部は外反し、張り出す断面をもつ。321は網代の編み方は(3)であるが、一部(1)が認められる。

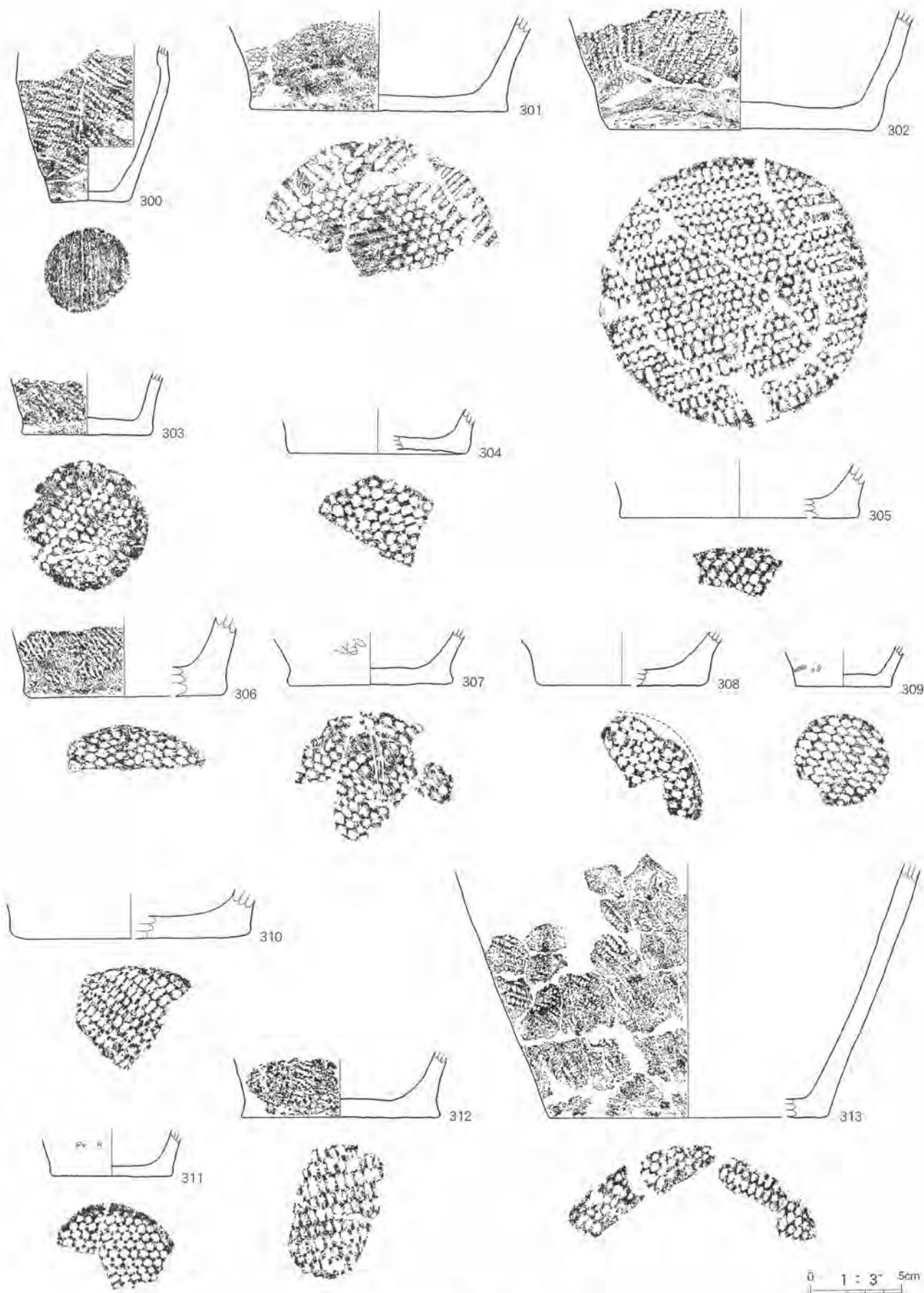
323～328は底面に沈線が残っているものである。ほとんどが不規則な沈線からなる。324は木葉痕の可能性がある。325は「×」状の沈線を引いている。326は沈線の他、網代痕状のものが僅かに観察される。328は沈線が連続的に交差している。

329～336は底面が無文の土器である。329はV字状の沈線が3つ、ほぼ等間隔で底面端に位置する。332は底径の小さい土器で椀形土器の底部と思われる。外面は丁寧な磨きを施している。333と334は壺形土器の底部である。333はやや上げ底気味で胴部へ大きく外へ開いている。334は外反しながら外へ大きく開いている。335の断面は湾曲しており、底部に明瞭な稜をもたない。

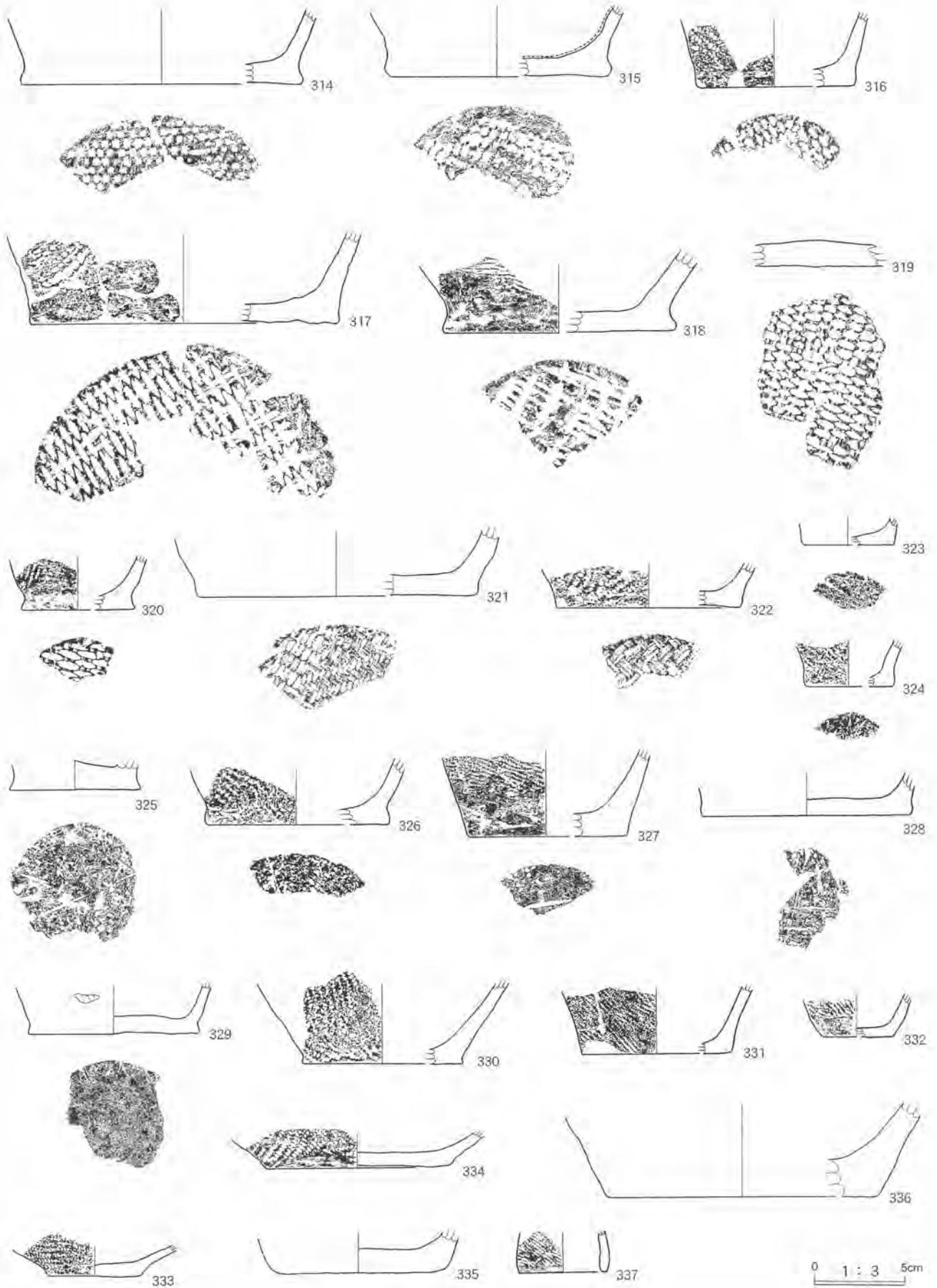
337は脚部である。R L縄文を横位に施文している。

土製品(338～343)

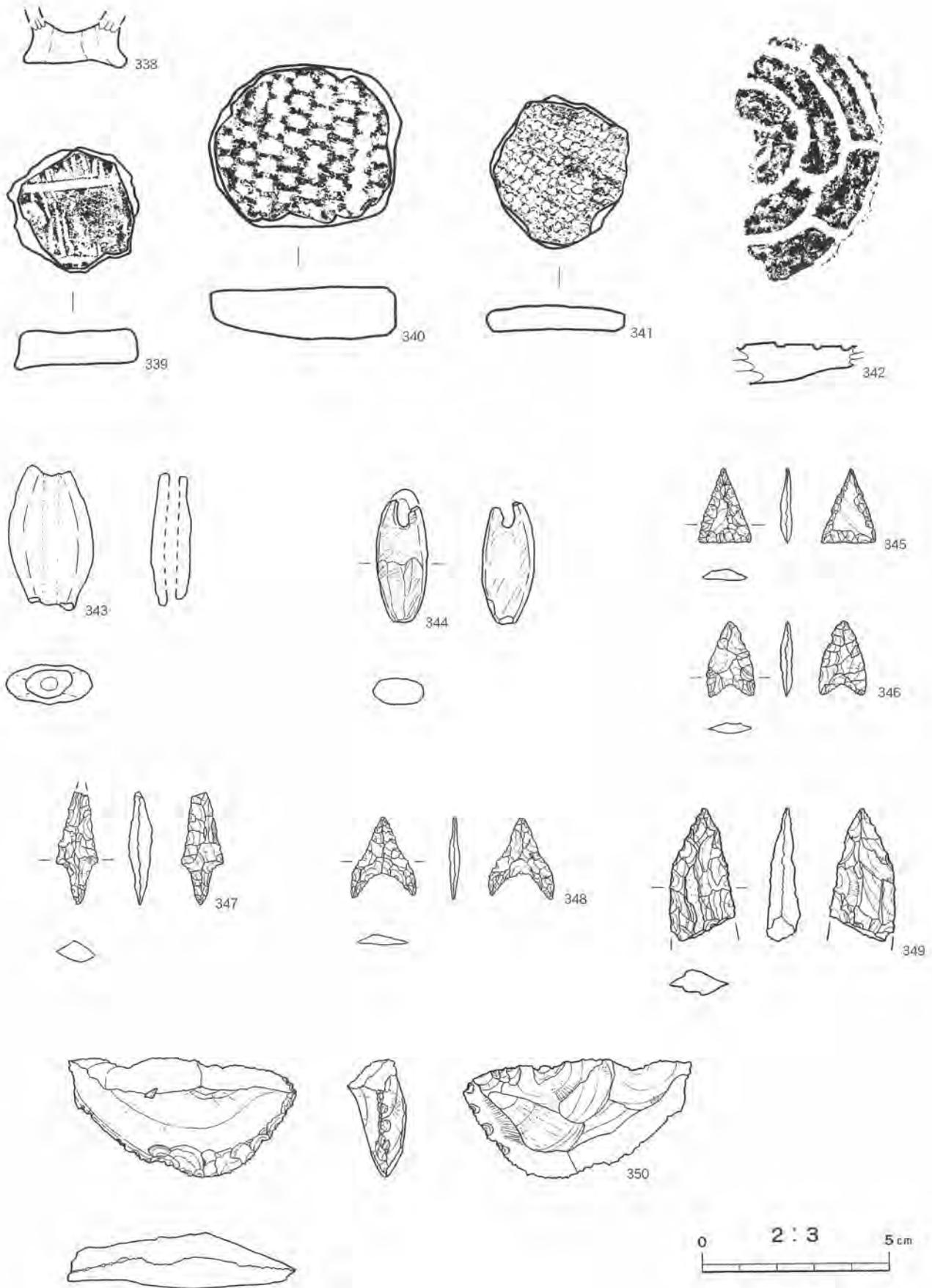
338はミニチュア土器の底部である。339～341は土製円盤である。339と340は底部を、341は胴部を再加工している。339は側縁部の研磨が施されておらず、円形に整えた段階のものである。340と341は側縁部の研磨が施されている。342は底部の底面と思われるが不明である。外面に沈線による同心円状文を引き、中には沈線で仕切り状の沈線を引いている。343は有孔土製品である。フットボール状を呈し偏平に作られている。長軸方向にほぼ直線の貫通孔を開けている。両面には文様、磨きなどの調整はなく粗雑である。大迫町観音堂遺跡、大槌町崎山弁天遺跡に類例が求められる。



第37図 遺構外出土遺物 (10)



第38図 遺構外出土遺物 (11)



第39図 遺構外出土遺物 (12)

石製品 (344)

344は垂飾品である。穿孔部の上部が欠損している。両面とも斜方向の調整痕を施している。片面の先方部にはさらに細かい調整痕を施している。

石器 (345~367)

石鏃、石槍、スクレーパー、打製石斧、磨製石斧、敲打磨石、敲打石、凹石、礫器が出土している。

石鏃 (345~348)

345は平基で二等辺三角形を呈する。腹面の断面は先端部で反っている。両面も基部と両側縁部に調整剥離を施している。腹面は先端部を重点に調整し、背面は両側縁部に細部調整を施し一次剥離面を多く残している。石材は黒色頁岩である。346は凹基で両側縁部は丸みを帯びている。両面とも脚部に細かい剥離を施す他は概ねおおまかな調整剥離である。347は凸基で先端部を欠損している。側縁部は基部に対しやや反っている。断面は先の2点に比べ膨らみをもつ。基部は先端で細かな調整を施し、抉り部は腹面よりも背面側が丁寧である。両側縁部は両面とも一次剥離面を残さず細かな調整を施している。石材は黒色頁岩である。348は凹基で抉りを深く入れ、丸みを帯びた基部である。両側縁は先端部から中央部まで直線的であるが、脚部で急に外に膨れている。最大厚2.5mmと精巧に作られている。両面ともに細かな調整を施している。

石槍 (349)、スクレーパー (350)

349は石槍の破片である。先端部は軸に対しややずれている。腹面は先端部で細部調整を施し、両側縁部においても丁寧な調整を施している。背面は腹面に比べおおまかな調整である。石材は頁岩である。

350は横長のスクレーパー状の石器である。腹面は上部、背面は下部に自然面を残す。腹面は自然面から打撃を加えて一次剥離を施し、側縁部に細部調整を施して刃部を作り出している。背面は刃部側に3ヶ所細部調整を施しているが、他はおおまかな調整を施している。石材は頁岩である。

打製石斧 (351)

351は背面に自然面を残す打製石斧である。両側縁部は刃部に向かってやや広がる撥形を呈する。中央部で最大厚となり断面は三角形、刃部と頭部の厚みは小さく楕円状をなす。腹面はおおまかな調整を施し、背面は中央部から頭部にかけて相対的に細かな調整を施している。

磨製石斧 (352~360)

352と353は中央部以下に再加工を施している。352は小形の磨製石斧である。欠損後両面を砥ぎ刃部を作り出しているが、刃部は鈍角に開いている。一次加工時の研磨はひじょうに丁寧である。353は刃部付近に再加工を施している。欠損後、両面に先端からおおまかな調整剥離により刃部を作り出しているが、粗いため、加工を途中で止めた可能性がある。354と355は頭部に再加工を施している磨製石斧である。354は頭部欠損後、先端部から全周打撃を加えている。背面の左側縁部は調整による欠損後研磨している。一次加工時の研磨はひじょうに丁寧である。355は頭部欠損後、周縁を砥いでいる。どちらも石斧として再利用されたものか、楔として再利用されたものであろう。356、357は頭部が欠損している磨製石斧である。358の両側縁部には装着痕が残っている。359と360は刃部が欠損している磨製石斧である。

敲打磨石 (361~364)

361は三角形をなす敲打磨石である。長楕円状の機能面があり、側面部には広い調整磨面をもち



第40図 遺構外出土遺物 (13)

断面は三角形を呈する。石材は凝灰岩である。362は広い機能面をもつ。上部には調整磨面をもつ。石材は砂岩である。363は卵形の敲打磨石で、機能面以外は研磨により形を整えている。石材は凝灰岩である。364は上下に機能面をもつ。石材は花崗岩である。

敲打石 (365)

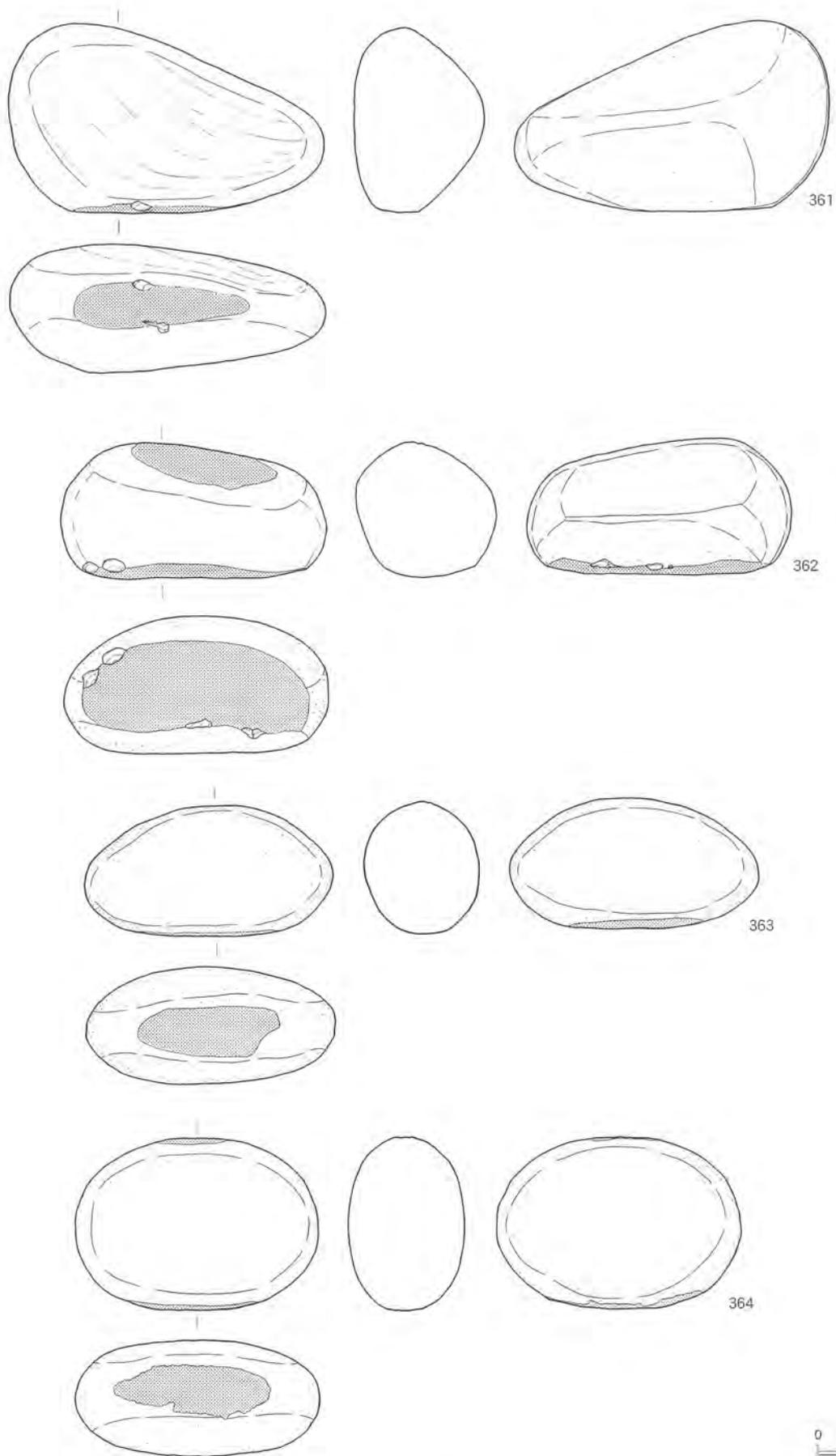
365は上下、側縁部に機能面をもつ。両面の下端と腹面の右側縁部には軽い研磨痕（トーン部分）あるいは敲打痕（図の空白範囲）があり、両面上端には敲打痕が、腹面の左側縁部には研磨痕をもつ。研磨後に敲打していることから、敲打を目的としたものと考えられる。石材は花崗岩である。

凹石 (366)

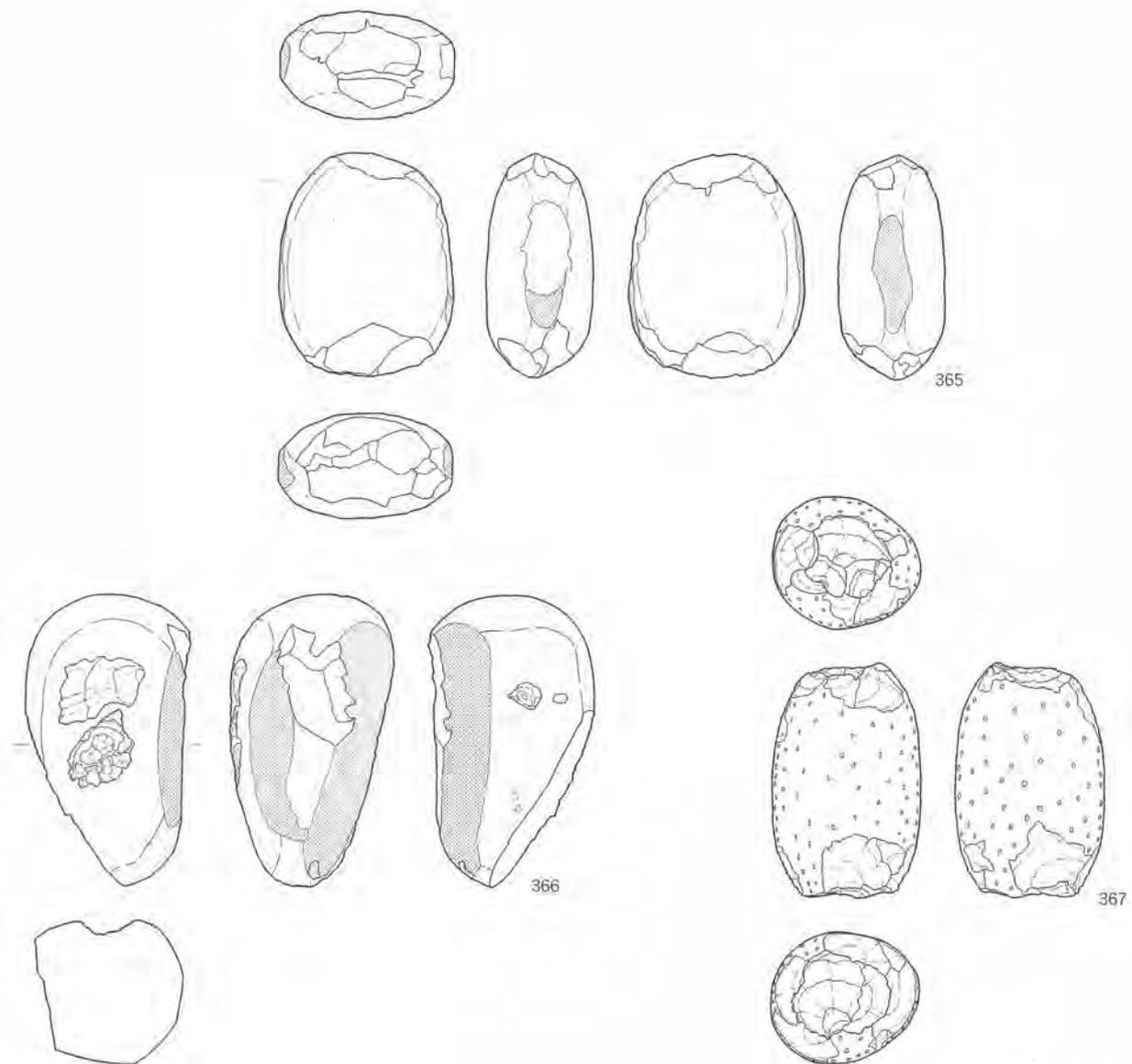
366は中央部に凹みをもつ。機能面の一部は欠けている。石材は砂岩である。

礫器 (367)

367は楕円状の礫の両端を打ち欠き平坦部を設けている。用途不明である。



第41図 遺構外出土遺物 (14)



第42図 遺構外出土遺物 (15)

第2表 遺構外出土土器観察表

番号	層位	胎土	外面色調	備考	番号	層位	胎土	外面色調	備考
1	V層	繊維、砂粒	にぶい黄橙色		21	VII層	繊維、砂粒	橙色	
2		繊維、砂粒	にぶい褐色		22	III層	繊維、砂粒	橙色	
3	V層	繊維、砂粒	にぶい黄橙色		23		繊維、砂粒	にぶい橙色	
4	VII層	繊維、砂粒	にぶい黄橙色		24	V層	繊維、砂粒	明褐色	
5	VII層	繊維、砂粒 金雲母	褐色	補修孔	25	IV層	繊維、砂粒	にぶい黄橙色	
6	V層	"	"	同一個体	26		繊維、砂粒	にぶい黄橙色	
7	V層	"	"		27	VI層	繊維、砂粒	灰黄褐色	
8	V層	繊維、砂粒	橙色		28	VII層	繊維、砂粒	にぶい赤褐色	
9	IV層	繊維、砂粒	にぶい橙色	13、14と同一個体	29	VII層	繊維、砂粒	にぶい赤褐色	礫混入
10		繊維、砂粒	浅橙色		30		繊維、砂粒	橙色	
11	IV層	繊維、砂粒	"	同一個体	31	V層	砂粒	にぶい橙色	
12	V層	繊維、砂粒	"		32		砂粒	灰黄褐色	
13	IV層	繊維、砂粒	にぶい橙色	同一個体	33		砂粒	灰黄褐色	外面、文様剥落
14	IV層	繊維、砂粒	"		34		砂粒	暗褐色	
15	V層	繊維、礫	灰黄褐色		35		砂粒	暗赤褐色	
16		繊維、礫	明赤褐色		36	V層	砂粒	橙色	
17	VII層	繊維、砂粒	にぶい赤褐色	礫混入	37	IV層	砂粒	にぶい橙色	
18	VII層	繊維、砂粒	にぶい赤褐色		38	V層	砂粒	にぶい橙色	
19	VII層	繊維、砂粒	にぶい橙色		39	V層	砂粒	にぶい黄褐色	
20	V層	繊維、砂粒	にぶい赤褐色		40		砂粒	にぶい褐色	
					41		砂粒、礫	灰黄褐色	

番号	層位	胎土	外面色調	備考	
42	Ⅶ層	砂粒	褐色	同一個体	
43	"	"	"	底径：6.9cm	
44	Ⅳ層	砂粒	明黄褐色	同一個体	
45	"	砂粒	"		
46	"	砂粒	"		
47	"	砂粒	"		
48	"	砂粒	"		
49	Ⅴ層	砂粒、礫	橙色	44~48と同一個体	
50	Ⅳ層	砂粒	明黄褐色		
51	Ⅵ層	砂粒	黒褐色		同一個体
52	"	"	"		
53	"	"	"	同一個体	
54	Ⅳ層	砂粒	橙色		
55	"	"	"		54,56,57の外面に煤
56	"	"	褐色		付着
57	"	"	"		
58	Ⅵ層	砂粒、礫	橙色	同一個体	
59		砂粒	にぶい黄褐色		
60	Ⅳ層	砂粒、礫	褐灰色	外面、煤付着	
61	Ⅴ層	砂粒	にぶい黄褐色		
62	Ⅵ層	砂粒、礫	明赤褐色		
63	Ⅳ層	砂粒	明黄褐色		
64	Ⅶ層	砂粒、礫	にぶい褐色		
65	Ⅴ層	砂粒、礫	明赤褐色	同一個体	
66	"	"	"		
67		砂粒、礫	明赤褐色		
68	Ⅵ層	砂粒	にぶい赤褐色	65、66と同一個体か	
69		砂粒	にぶい橙色		
70	Ⅴ層	砂粒	にぶい黄褐色		
71		砂粒	にぶい赤褐色		
72		砂粒、礫	にぶい黄褐色	外面、煤付着	
73		砂粒	にぶい黄褐色		
74	Ⅴ層	砂粒、礫	明赤褐色		
75		砂粒、礫	にぶい褐色		
76	Ⅵ層	砂粒、礫	灰黄褐色	同一個体	
77		砂粒	にぶい黄褐色		
78		砂粒	にぶい橙色	内面、煤付着	
79	Ⅵ層	砂粒	灰黄褐色		
80		砂粒、礫	褐灰色		
81	Ⅴ層	砂粒、礫	にぶい褐色		
82	Ⅳ層	砂粒、礫	にぶい赤褐色		
83	Ⅳ層	砂粒	にぶい黄褐色	内外面に赤彩	
84	Ⅳ層	砂粒	灰黄褐色		
85		砂粒	にぶい橙色		
86	Ⅳ層	砂粒	橙色		
87		砂粒	にぶい橙色		
88	Ⅳ層	砂粒	橙色		
89		砂粒、礫	暗赤褐色		
90		砂粒	褐色	接合している	
91		砂粒	"	金雲母混入	
92	Ⅵ層	砂粒	にぶい黄褐色		
93	Ⅶ層	砂粒	灰黄褐色		
94	Ⅶ層	砂粒、礫	灰黄褐色		
95		砂粒、礫	にぶい黄褐色		
96		砂粒	灰黄褐色		
97	Ⅳ層	砂粒	にぶい赤褐色		
98	Ⅳ層	砂粒	灰黄褐色		
99	Ⅲ層	砂粒、礫	橙色		
100	Ⅳ層	砂粒	にぶい黄褐色		
101		砂粒、礫	橙色		
102	Ⅳ層	砂粒、礫	にぶい赤褐色		
103	Ⅵ層	砂粒	明赤褐色	外面に赤彩	
104	Ⅳ層	砂粒、礫	暗褐色		

番号	層位	胎土	外面色調	備考
105	Ⅶ層	砂粒	褐色	
106		砂粒	褐色	
107	Ⅶ層	砂粒	にぶい黄褐色	
108	Ⅳ層	砂粒	にぶい黄褐色	
109	Ⅳ層	砂粒、礫	にぶい赤褐色	内面、煤付着
110		砂粒	にぶい黄褐色	
111		砂粒、礫	暗赤褐色	
112	Ⅴ層	砂粒	褐色	
113	Ⅴ層	砂粒、礫	にぶい褐色	同一個体
114	"	"	"	
115	"	"	"	
116	"	"	"	
117	"	"	"	
118	"	"	"	
119	Ⅴ層	砂粒、礫	にぶい褐色	
120	Ⅴ層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
121	Ⅳ層	砂粒、金雲母	橙色	
122	Ⅳ層	砂粒、礫	にぶい褐色	
123	Ⅴ層	砂粒	黒褐色	
124	Ⅶ層	砂粒、礫	灰黄褐色	
125	Ⅳ層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
126	Ⅳ層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
127		砂粒、礫	にぶい褐色	外面、煤付着
128	Ⅵ層	砂粒	にぶい黄褐色	外面、煤付着
129	Ⅵ層	砂粒、礫	暗褐色	外面、煤付着
130		砂粒、礫	暗赤褐色	外面、煤付着
131		砂粒、礫	暗赤褐色	内外面、煤付着
132		砂粒	にぶい橙色	
133	Ⅴ層	砂粒	にぶい黄褐色	
134	Ⅴ層	砂粒、礫	明赤褐色	
135	Ⅴ層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
136	Ⅶ層	砂粒	黒褐色	
137		砂粒、礫		
138		砂粒、礫	黒褐色	同一個体
139		"	"	内面、煤付着
140	Ⅴ層	砂粒	にぶい黄褐色	同一個体
141	"	"	"	内面、煤付着
142	Ⅳ層	砂粒、礫	にぶい褐色	外面、赤彩
143		砂粒	にぶい黄褐色	外面、赤彩
144	Ⅶ層	砂粒	にぶい黄褐色	外面、赤彩
				内外面、ミガキ
145	Ⅳ層	砂粒	にぶい黄褐色	外面、ミガキ
146	Ⅴ層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	同一個体
147	"	"	"	146に黒斑あり
148	Ⅶ層	砂粒	明褐色	外面、赤彩
149	Ⅳ層	砂粒	褐色	外面、赤彩
150		砂粒	にぶい黄褐色	
151		砂粒	にぶい黄褐色	
152	Ⅵ層	砂粒	にぶい黄褐色	
153	Ⅳ層	砂粒	にぶい褐色	
154	Ⅳ層	砂粒	にぶい黄褐色	
155	Ⅶ層	砂粒	橙色	外面、赤彩 黒斑
156	Ⅴ層	砂粒、礫	にぶい褐色	
157		砂粒、礫	にぶい黄褐色	内面、煤付着
158		砂粒	にぶい黄褐色	内面、煤付着
159		砂粒	にぶい黄褐色	
160	Ⅴ層	砂粒	にぶい褐色	
161	Ⅳ層	砂粒	にぶい褐色	
162	Ⅶ層	砂粒、礫	にぶい赤褐色	
163	Ⅵ層	砂粒	にぶい黄褐色	外面、ミガキ
164		砂粒	にぶい黄褐色	
165	Ⅳ層	砂粒	淡黄色	
166		砂粒	にぶい褐色	内外面、ミガキ

番号	層位	胎土	外面色調	備考
167		砂粒	褐灰色	
168	V層	砂粒	褐色	
169	VII層	砂粒、金雲母	にぶい黄褐色	外面、ミガキ
170	V層	砂粒	黒褐色	
171	V層	砂粒	黒褐色	
172		砂粒	暗赤褐色	内外面、ミガキ
173	VII層	砂粒	黒褐色	内面、煤付着 内外面、ミガキ
174	VI層	砂粒	橙色	内外面、ミガキ
175	V層	砂粒	にぶい褐色	
176	V層	砂粒	褐色	内外面、ミガキ
177	V層	砂粒	にぶい赤褐色	内外面、ミガキ
178	VI層	砂粒	にぶい褐色	内外面、ミガキ
179	V層	砂粒	にぶい褐色	
180	V層	砂粒	にぶい褐色	内外面、ミガキ
181		砂粒	黒褐色	内外面、ミガキ
182		砂粒	暗褐色	外面、ミガキ
183	VI層	砂粒、礫	褐色	内面、ミガキ
184	VI層	砂粒	黒褐色	外面、ミガキ
185		砂粒	にぶい黄褐色	内外面、ミガキ 黒班
186	V層	砂粒	褐色	
187		砂粒	暗褐色	内外面、ミガキ
188	V層	砂粒	褐色	
189	V層	砂粒	褐色	外面、ミガキ 黒班 突起剥落
190	VI層	砂粒	黒褐色	外面、ミガキ
191	V層	砂粒	黒褐色	外面、ミガキ
192	VI層	砂粒、礫	灰黄褐色	金雲母混入
193	VII層	砂粒、礫	褐色	金雲母混入
194		砂粒	にぶい褐色	
195	V層	砂粒	にぶい褐色	突起欠損
196	VI層	砂粒	にぶい黄褐色	黒班
197		砂粒、礫	褐色	内面、ミガキ
198	V層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
199	VII層	砂粒	にぶい黄褐色	
200	VI層	砂粒	にぶい赤褐色	
201		砂粒、礫	灰褐色	
202	VII層	砂粒、礫	黄褐色	外面、煤付着
203	VII層	砂粒、礫	浅黄褐色	
204	VII層	砂粒	にぶい褐色	
205		砂粒、礫	にぶい褐色	同一個体
206		"	"	
207		砂粒、礫	にぶい褐色	
208	VII層	砂粒、礫	にぶい褐色	外面、煤付着
209	V層	砂粒、礫	暗赤褐色	金雲母混入
210		砂粒、礫	にぶい赤褐色	外面、煤付着
211	VII層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
212	VI層	砂粒、礫	にぶい褐色	
213		砂粒、礫	にぶい赤褐色	
214		砂粒、礫	にぶい黄褐色	金雲母混入
215		砂粒	にぶい黄褐色	口径：9.6cm
216	VI層	砂粒	にぶい褐色	
217		砂粒、礫	にぶい黄褐色	
218	V層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
219	V層	砂粒	浅黄褐色	
220	VII層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
221	V層	砂粒、礫	黒褐色	同一個体
222	"	"	褐色	
223	V層	砂粒	にぶい褐色	
224		砂粒、礫	暗赤褐色	
225	V層	砂粒、礫	にぶい褐色	
226	VII層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	
227	VII層	砂粒	にぶい黄褐色	金雲母混入

番号	層位	胎土	外面色調	備考
228		砂粒	にぶい黄褐色	
229	VII層	砂粒	にぶい黄褐色	内面、ミガキ 黒班
230		砂粒	にぶい褐色	内面、ミガキ
231	VI層	砂粒	灰黄褐色	
232	V層	砂粒	にぶい黄褐色	口径：17.4cm
233	IV層	砂粒	にぶい黄褐色	
234	III層	砂粒	明褐色	
235	IV層	砂粒	にぶい褐色	
236		砂粒	灰黄褐色	
237		砂粒	黒褐色	
238	V層	砂粒	灰黄褐色	
239		砂粒	灰黄褐色	
240		砂粒、礫	にぶい黄褐色	
241	V層	砂粒	暗赤褐色	
242	VII層	砂粒	黒褐色	
243		砂粒	にぶい黄褐色	
244	VII層	砂粒	にぶい黄褐色	
245		砂粒	にぶい黄褐色	
246	VI層	砂粒、礫	にぶい赤褐色	
247	VII層	砂粒	にぶい黄褐色	内外面、煤付着 口径：19.3cm
248	VI層	砂粒、礫 金雲母	にぶい褐色	黒班 256と同一個体 口径：32.8cm
249	VI層	砂粒	にぶい黄褐色	外面、煤付着 口径：22.9cm
250	VI層	砂粒、金雲母	にぶい黄褐色	
251	VI層	砂粒	にぶい赤褐色	
252		砂粒、礫	黒褐色	金雲母混入
253		砂粒、礫	にぶい黄褐色	
254	V層	砂粒	にぶい赤褐色	
255	VI層	砂粒、礫	にぶい褐色	248と同一個体
256	VII層	砂粒、礫	褐色	黒班
257	VII層	砂粒、礫	にぶい赤褐色	金雲母混入
258		砂粒、礫	暗赤褐色	
259	VII層	砂粒、礫	にぶい褐色	金雲母混入
260	VII層	砂粒、礫	暗赤褐色	金雲母混入
261	VII層	砂粒	黄褐色	
262		砂粒	暗褐色	内面、煤付着
263	V層	砂粒、礫	にぶい褐色	
264		砂粒、礫	灰黄褐色	金雲母混入 外面煤付着
265	VI層	砂粒、礫	黒褐色	黒班
266	V層	砂粒、礫	暗赤褐色	金雲母混入
267	VI層	砂粒、礫	褐色	外面、煤付着
268	VI層	砂粒	灰黄褐色	
269	VII層	砂粒	灰黄褐色	
270		砂粒、礫	にぶい黄褐色	
271	VI層	砂粒	浅黄褐色	内外面、煤付着
272		砂粒、礫	にぶい褐色	
273	VII層	砂粒	褐色	同一個体
274	"	"	"	
275	VII層	砂粒	浅黄褐色	
276	VII層	砂粒、礫	褐灰色	
277	VI層	砂粒	にぶい黄褐色	内面、煤付着
278	V層	砂粒	暗褐色	同一個体
279	"	"	"	
280	V層	砂粒、礫	灰黄褐色	外面、煤付着
281	V層	砂粒	にぶい褐色	
282	V層	砂粒	明褐色	
283	V層	砂粒	褐色	外面、ミガキ
284	V層	砂粒	灰黄褐色	外面、ミガキ 黒班
285	V層	砂粒	褐色	外面、ミガキ
286	V層	砂粒	にぶい黄褐色	

番号	層位	胎土	外面色調	備考	番号	層位	胎土	外面色調	備考
287	V層	砂粒	にぶい黄褐色		312	V層	砂粒、礫	橙色	網代痕 底径11cm
288		砂粒、礫	にぶい黄褐色	木葉痕	313	VI層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	網代痕 底径11.5cm
289	VI層	砂粒、礫	にぶい橙色	木葉痕 底径9.4cm	314	VII層	砂粒、礫	淡黄色	網代痕 底径14.6cm
290	VII層	砂粒、礫	にぶい褐色	木葉痕 底径5.2cm	315		砂粒、礫	にぶい黄褐色	網代痕 底径12cm
291	VI層	砂粒	灰黄褐色	木葉痕 底径6.8cm	316		砂粒、礫	灰黄褐色	網代痕 底径8.9cm
292	V層	砂粒	にぶい黄褐色	木葉痕 底径8.7cm	317	VI層	砂粒、礫	にぶい赤褐色	網代痕 底径17.1cm
293	IV層	砂粒、礫	にぶい橙色	木葉痕 底径15cm	318		砂粒、礫	黄褐色	網代痕 底径12.9cm
294		砂粒、礫	にぶい褐色	木葉痕 底径17.5cm	319	VII層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	網代痕
295	VI層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	木葉痕 底径10.2cm	320		砂粒	褐色	網代痕 底径6.2cm
296	V層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	木葉痕	321		砂粒、礫	にぶい黄褐色	網代痕 底径15.4cm
297	V層	砂粒	にぶい黄褐色	木葉痕	322		砂粒	灰黄褐色	網代痕 底径10.2cm
298	V層	砂粒、礫	にぶい赤褐色	木葉痕 底径6cm 指紋が残っている	323	V層	砂粒、礫	灰黄褐色	底径5.2cm
299		砂粒、礫	にぶい褐色	木葉痕 底面、ミガキ	324		砂粒、礫	灰黄褐色	底径5cm
300	V層	砂粒	にぶい黄褐色	笹葉痕 底径4.3cm	325	V層	砂粒	にぶい褐色	底径7.2cm
301	VI層	砂粒、礫	褐色	網代痕 底径14.1cm 金雲母混入	326		砂粒	褐色	底径10.4cm
302	VII層	砂粒、礫	灰黄褐色	網代痕 底径11cm	327		砂粒、礫	暗赤褐色	底径8.9cm
303	VI層	砂粒、礫	灰黄褐色	網代痕 底径7.2cm	328		砂粒、礫	赤褐色	底径11.6cm
304		砂粒、礫	灰黄褐色	網代痕 底径9.6cm	329	V層	砂粒、礫	暗赤褐色	底径9.4cm
305	VII層	砂粒、礫	にぶい褐色	網代痕 底径11.2cm	330	V層	砂粒、礫	暗赤褐色	底径8.8cm
306	V層	砂粒、礫	にぶい褐色	網代痕 底径9.2cm	331	VI層	砂粒	暗褐色	底径8.2cm
307	V層	砂粒	灰黄褐色	網代痕 底径13.2cm	332	VI層	砂粒	褐色	底径4.1cm
308	V層	砂粒、礫	灰黄褐色	網代痕 底径9cm	333		砂粒	にぶい黄褐色	底径4.8cm
309	VII層	砂粒	灰黄褐色	網代痕 底径5.3cm	334	V層	砂粒	淡黄色	底径11.4cm
310		砂粒、礫	にぶい赤褐色	網代痕 底径10cm	335	VI層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	底径9.2cm
311	VI層	砂粒、礫	灰黄褐色	網代痕 底径6.1cm 内面、煤付着	336		砂粒	にぶい黄褐色	底径14.8cm 外面、煤付着
					337	IV層	砂粒、礫	にぶい黄褐色	底径4.9cm
					338	VI層	砂粒	にぶい黄褐色	底径2.6cm

第3表 遺構外出土土製品観察表

番号	層位	器種	規模(mm)			外面色調	備考
			長さ	幅	厚さ		
339	V層	土製円盤	33	32	9	褐灰色	側縁部、研磨なし
340	V層	土製円盤	43	47	14	浅黄褐色	側縁部、全面研磨
341	VI層	土製円盤	39	36	6	明赤褐色	側縁部、部分研磨
342		円盤状土製品	68	41	11	黒褐色	側縁部、研磨なし
343	IV層	有孔土製品	39	24	11	暗褐色	貫通孔あり

第4表 遺構外出土石製品、石器観察表

番号	層位	器種	規模(mm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
344	IV層	有孔石製品	33	14	7	穿孔部、欠損
345	IV層	石鏃	20	14	3	
346	V層	石鏃	20	13	3	側縁部一部欠損
347	IV層	石鏃	31	11	6	先端部欠損
348	IV層	石鏃	22	18	3	
349		石槍	36	18	9	基部、欠損
350	V層	スクレーパー	33	63	16	
351	IV層	打製石斧	95	45	28	
352	VII層	磨製石斧	61	31	19	再加工をしている
353	V層	磨製石斧	93	37	22	再加工をしている
354	IV層	磨製石斧	103	44	27	再加工をしている
355	VII層	磨製石斧	88	49	26	再加工をしている
356	IV層	磨製石斧	66	39	24	上部、欠損
357	VII層	磨製石斧	81	49	27	上部、欠損
358	IV層	磨製石斧	83	39	27	上部、欠損
359	VII層	磨製石斧	62	36	24	刃部、欠損
360	VII層	磨製石斧	97	46	27	刃部、欠損
361	V層	敲打磨石	95	156	48	
362	VII層	敲打磨石	69	142	69	
363	V層	敲打磨石	65	122	57	
364	V層	敲打磨石	85	12	57	
365	V層	敲打石	97	76	46	
366	V層	凹み石	126	70	66	欠損している
367	V層	礫器	103	65	59	

5 調査のまとめ (第43図)

今回の調査では、竪穴状遺構が3軒、土坑が35基検出し、縄文時代、弥生時代の遺物が出土した。ここでは調査の成果をもとに、遺構と遺物に分けて補足と考察を加えてまとめている。

(1) 遺構

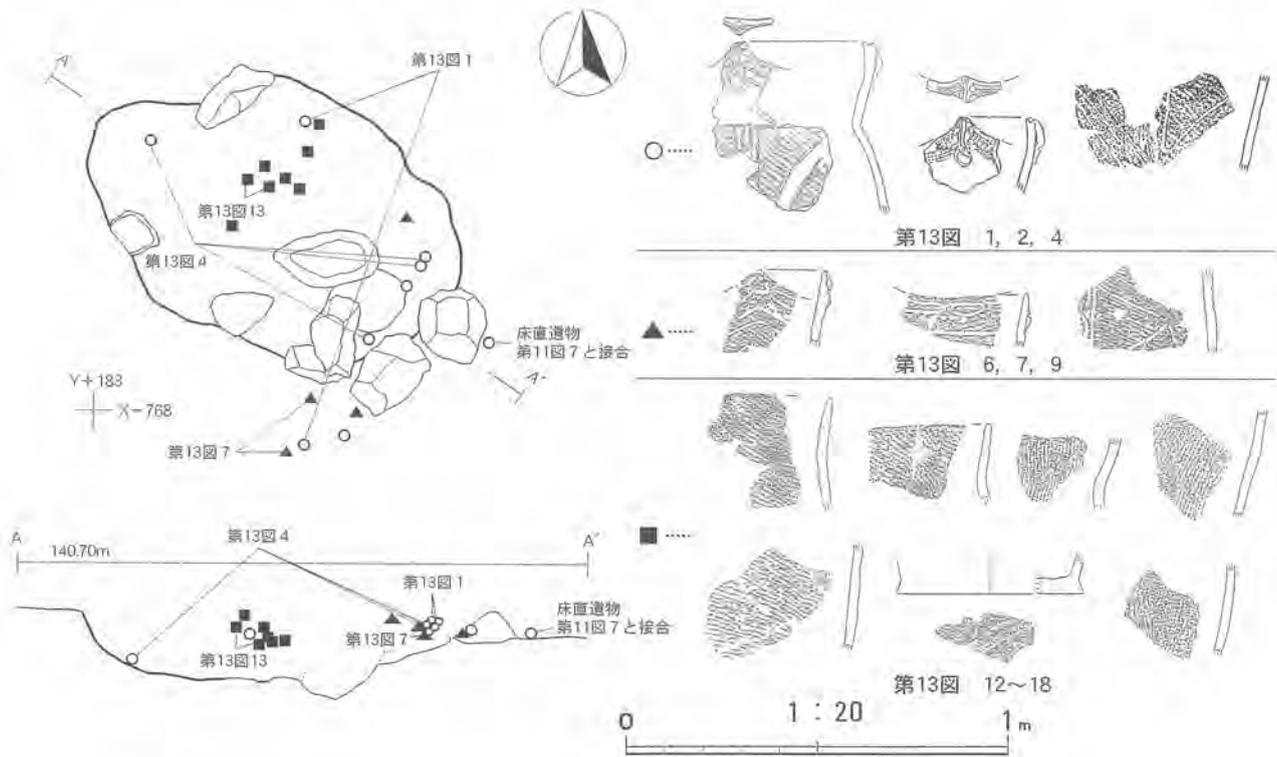
竪穴状遺構を3軒検出したが上部が削平されていたため、残存状況は悪かった。1号竪穴状遺構は覆土が15cm程度と薄く、プラン自体が消滅しているところもあった。覆土中には焼土塊を確認したが、二次的なもので遺構に伴うものではなかった。遺構内には柱穴が1本、壁付近に掘り込んでいた。覆土遺物は上位から縄文晩期から弥生初頭の土器片が出土しているが、下位からは晩期以前の粗製土器が出土した。結局、住居のもつ要素に乏しく竪穴状遺構として扱わざるを得ず、時期についても判然としない。このことは遺構の半分近くを失っている2号竪穴状遺構についても言え、門前式の土器片が出土しているといっても検討材料はほとんど残されていない。

調査区北西部に検出された3号竪穴状遺構もまた上部が削平されていたが、炉と床面が残っていた。壁と柱穴は確認できなかったが、床面の下は角礫が多く露出する基本土層第XII層のため、柱穴を掘り込むのには適さないものと思われ、もともと柱穴が無い遺構か浅い壁柱穴が廻っていたと想定される。炉の種類は石囲炉で、石は原位置にあるものと炉の内部へ動いたものがある。遺物は土器片が100点余り出土している。その多くが炉の上部(確認面よりも上位)と炉の覆土上位から出土しており、覆土中位、下位はレベルが下がるにつれ出土数は減っていく。炉の上部からは縄文後晩期の土器片が混在しており、本遺構に伴うものではないことは明らかである。炉の覆土からは第12図にあるように炉を覆うように集中して出土している。

ここで、遺物の出土状況について補足する。第53図は覆土内あるいは炉跡付近の出土土器のうち、図版に掲載した土器片の分布状況と接合状況である。4個体に分かれ、掲載していない土器片も多くはこの中に当てはまる。完形になる個体はないが、ある程度のまとまりがあることが窺える。まず、第13図1～3は同一個体で、1は炉跡付近から出土した土器片と炉跡覆土内土器片とが接合している。3は覆土内土器片どうしで接合している。また、図示できなかったが、第13図1～3と同一個体の炉跡付近の土器と床直出土の土器片(第11図7)とが接合している。第13図6、7、9も1～3と同様の出土状況である。第13図12～18は同一個体の粗製土器であるが、炉の覆土において集中して出土している。以上のことから、炉跡付近の土器と覆土内の土器、さらには床直出土の土器は互いに関係があり、同時性をもっていることが分かる。このことは第11図7、8と第13図の土器片全てが同時期所産の可能性があることへの傍証と成り得よう。

さらに、炉跡内においては炭化物(クリと考えられる木の実)やカーボンが多量に含まれていたが、焼土塊は全く確認されなかった。炭化物、カーボンは土器片と同様に覆土上位で多く確認されている。つまり本来の炉として使用していたなら、3号竪穴状遺構の炉は廃絶時、一度に焼土を掻き出す等の行為と土器片を覆う(または廃棄する)行為が考えられる。

35基確認された土坑は調査区北部と南東部に分布している。特に、北東部と南東部は土坑が集中しており、隣接の未調査区域にも広がっていると考えられる。土坑は形状、検出状況から(i)平面形が円形、楕円形、不整形で断面は皿形、鉢形、逆台形と多様な土坑(4～7、13～23、25～35号土坑)、(ii)平面形が円形で断面がフラスコ形、逆台形のいわゆるフラスコ状土坑(1～3、8、9号土坑)、(iii)平面形が円形で掘り込みの浅い土坑(10、11号土坑)、(iv)土坑内に焼土、埋設土



第43図 3号竪穴状遺構炉跡出土状況

器が検出され、屋外炉的性格を有する土坑（12、24号土坑）の4つに大別される。（i）に属する土坑は間口の長径が40～70cmの規模のものが多く、次に1mを超える土坑が4基検出した。深さは50cm以下の比較的浅い土坑が多かった。竪穴状遺構同様、上部が削平されていると思われるが、多くは中規模の土坑としてまとめることができよう。断面はほとんどが逆台形の単純に掘り込んだもので、稀に7号土坑のようにテラス状の段をもつものが見られた。遺物は5、7、13、19、21、27、32号土坑から出土しているが、全て覆土中から出土した土器片で、土坑に伴うものではなかった。以上のことからこれらの土坑は性格、時期が不明のものと扱わざるを得ない。（ii）に属する土坑は間口の長径が90～130cm前後の規模で、深さは25～51cmと上部が削平されているため浅い。断面は1、3、8、9号土坑が逆台形で2号土坑が中間部は窄まり底面付近で外へ張り出すフラスコ形である。分布は調査区の北東部の一角に集中し、1～3号土坑はほぼ等間隔に南北に配列し8、9号土坑は隣接していた。1～3号土坑と8、9号土坑の検出時の落差が70cmあった。出土遺物は1、2号土坑が上位で土器片が、8号土坑が壁際で石鏃が、9号土坑が壁際で中期後葉から後期前葉の土器に見られる胴下半部から底部の土器片が出土しているが、時期を決定する遺物は出土していない。以上から、配列により1～3号土坑と8、9号土坑に分かれ、時期差を想定され、時期は9号土坑から中期後葉から後期前葉あたりと考えられる。（iii）は8、9号土坑の近くで検出された10、11号土坑である。大形の円形土坑であるが深さは20cm前後と浅い。10号土坑は覆土下位と底面から縄文後期前葉の土器が出土した。底面からは口縁部から胴下半部まである縦割れの土器が密集して出土した。1個体の土器が約半分残存し、内面を上へ腕状に出土し、直下からは焼土粒が混入している炉跡が検出され、炉跡と接する土器の外表面の一部は剥落している。調査の成果で述べたように土圧で潰れた形跡はなく、炉跡上に土器を腕状に置いて使用していたと考えられる。この他、炉跡近くに不整の落ち込みがあるが、柱穴はなかった。11号土坑は10号土坑よりも規模は大きく、10号土坑に切られていた。（iv）

に属する土坑は埋設土器（遺構）として報告されている土坑で、12号土坑は土器を斜位に、24号土坑は胴下半部から底部までの土器片をほぼ横位に置いている。12号土坑は焼土が散在し、焼土の下は被熱した箇所がないことから、二次的な堆積と考えられ、焼土の掻き出しが考えられる。24号土坑は埋設土器が熱を受け赤くなっていること、土器の直下に焼土が円形に分布し直下には被熱した箇所が見られることから、使用した痕跡を残したものと考えられる。

（2）遺物

本遺跡では多量の縄文土器片、弥生土器片、土製品、石製品、石器が出土した。ここでは、縄文土器、弥生土器の分類と時期を中心に述べていきたい。

縄文土器は前期から晩期まで、弥生土器は初頭、後期で空白期がありながら断片的に出土している。まず、大別として縄文前期、中期、後期、晩期、弥生初頭、後期の土器を順にⅠ群、Ⅱ群、…、Ⅵ群土器とする。時期の判別がつかない粗製土器、底部は別にⅦ群土器とする。次に、文様などの型式的に細別可能な要素がある場合、1類、2類、…として細分類する。

Ⅰ群土器は胎土に繊維を含むものと含まないものに分かれる。繊維を含むものは、前期初頭の上川名Ⅱ式とそれに併行するもの（1類）、いわゆる「組縄縄文」を施したもの（2類）、不整撚糸文を施文したもの（3類）、結束のない羽状縄文を施したもの（4類）、組紐を施文したもの（5類）に細分類できる。1、2類は宮古市千鶏遺跡で良好な類例が見られる。また、同市崎山貝塚南斜面では2～4類が多く出土している。2遺跡の成果を踏まえれば、2、3類は大木1～2式に相当し、4類は上川名Ⅱ式あるいは大木1式に相当する。5類は第28図23～26を指すが、口縁部に不整撚糸文を施文していることから大木1～2式に相当する。繊維を含まないものは5類とし、大木4式に相当する。

Ⅱ群土器は刺突、列点文を施すもの（1類）、口縁部文様帯をもつもの（2類）、胴部に磨消縄文をもつもの（3類）に分類される。いずれも中期後葉に見られ、全体が分かる第29図42、43は大迫町観音堂遺跡に類例があり、大木9式に相当する。

Ⅲ群土器は本遺跡では多量に出土している。後期の中でも後期前葉に位置づけられる土器がほとんどであった。先述のように3号竪穴状遺構炉跡、10号土坑において当該期の土器が一括して出土している。また、遺物包含層においても器形、文様の特色が窺える土器片が出土している。これらの土器を基準にして細分類すると次のようになった。

1類 口縁部、頸部、胴部に文様帯をもち、頸部に渦巻文を胴部に縦位区画、タスキ掛け状、渦巻文を施したもの（3号竪穴状遺構炉跡出土土器の第13図6～9と10号土坑出土土器の第18図1、2、第19図1～3）。

2類 口縁部、胴部に文様帯をもち、口縁部に縄文帯があり波頂部に円形刺突、ボタン状貼付を装飾し、胴部に縦位区画、タスキ掛け状文を施したもの（3号竪穴状遺構床直ならびに炉跡出土土器の第11図7、8、第13図1～4）。

3類 口縁部、頸部、胴部に文様帯をもち、口縁部に縄文帯と無文帯があり、波頂部に円形刺突、ボタン状貼付を装飾し、頸部に縦位の平行沈線、長楕円状の磨消縄文があるもの（第29図44～50、第30図70）。

4類 口縁部、頸部、胴部に文様帯をもち、口縁部に波状沈線文を、頸部に渦巻文を施したもの（第29図58）。

5類 頸部がなく口縁部、胴部に文様帯をもち、口縁部に波状沈線文を、頸部に渦巻文を施したものの（第30図62）。

6類 口縁部、胴部に文様帯をもち、口縁部に杵状の沈線文、円形連続刺突文を、胴部に縦位区画、曲線状の沈線を連ねているもの（第29図54～57）。

7類 口縁部から頸部にかけて磨消縄文があるもの（第29図51～53）。

8類 頸部と胴部を横位の沈線で区切り、胴部に縄文を施したもの（第30図92～94、96、97）。

9類 口縁部に沈線のみを施文するもの（第27図4、第30図72、73、86、87）。

10類 胴部に多重の波状の磨消縄文があるもの（10号土坑出土土器の第19図6）。

11類 1～6類を除き口縁部に段を有するもの（第30図63～69、81、82）。

1、2類は胴部文様に同じ要素がある。上記にあげた土器の他に第30図74～76、第31図108～118、122、123、127～131があげられよう。3類の口縁部は2類と同様、円形刺突、ボタン状貼付がある。上記にあげた土器の他に第27図1、第30図71、81～83があげられよう。4類は口縁に沿った数条の沈線に特色があり、上記にあげた土器の他に第29図59～61、第30図78～80、胴部では第31図119、120、126が4類に入る可能性がある。5類は頸部の文様がない土器で、類似する土器はないが、器形、文様に特色があるため別に分類した。6類は1類と類似した土器で1、2、6類をみると胴部の縦位区画文が共通している。7は波頂部に瘤状の突起を有する特徴があり、器面もよく磨かれている。磨消縄文が主体となっていることから、後期前葉より後に位置付けられる可能性がある。8類は深鉢形というより壺形に近い土器で、十腰内2式などにみられる土器である。9類は口縁に沿うもの（第30図72、73、87）とそうでないもの（第27図4、第30図86）があり、前者は4類に、後者の第27図4は渦巻文から1類に近いものかもしれない。10類は本遺跡では他に類例はないが、1類と共伴した。11類は口縁下端部に粘土を貼付したもの（第30図68、69）、頸部を薄く仕上げて段の効果を作出したもの（第30図63～66、81）と折り返し口縁のもの（第30図82）がある。円形刺突を装飾している土器は2か3類に入る可能性が強く、時期が特定できない第33図200～213の中にもここに属するものがあると考えられる。

上記の分類から外れたものを仮に12類とする。このうち、第9図9、第27図2、3、6、第30図77、89、100、135、第34図251は後期初頭の門前式に相当すると考えられる。第30図90、91（両者接合）は関東地方の堀ノ内1式、東北南部の綱取式にみられる文様に類似した土器で、本遺跡の周辺では大迫町立石遺跡、陸前高田市川内遺跡に類例があるが、いずれも破片資料で、全容を知る資料は出土していない。第30図106は方形のモチーフが特徴で、十腰内1式に相当しよう。第30図140、141の「く」の字を連続した土器は観音堂遺跡に類例がある。第27図8、第30図146、147は十腰内1式に相当し、沈線を主体とする第30図142～145、155も、十腰内1式の深鉢形、鉢形、壺形の土器と考えられる。

IV群土器は細別可能な土器のうち、大洞B式（第32図163、180）、C₁（同図164）、C₂（同図181、182）、A式（同図186）、A'式（同図169、171）が出土している。宮古市芋野Ⅱ遺跡では171の土器に類似した小形の深鉢形土器が出土している。その他、同図170、185の鉢形土器、注口土器や第36図284～287の無文の壺形土器、注口土器もこの群に入ると思われる。

V群土器はIV群土器との層位的分離が困難であった。分類すると、器種が鉢で、数条の横位沈線文を施し、粘土の貼瘤を装飾するもの（1類、第32図167、第34図254）、器種が鉢で、数条の横位沈線文からなるもの（2類、第9図1、第32図172～175、183、184）、器種が鉢で、数条の細隆線を貼付するもの（3類、第27図10、第32図177）、器種が壺で、口縁部に細隆線を貼付するもの（4類、第27図9、第32図166、176）、器種が壺で、口縁部に文様がなく、口唇部、内面に文様がある

もの（5類、第11図4、第32図178、179）、器種が壺で、肩部に数条の横位沈線文を、胴部に縄文を施すもの（6類、同図187）、器種が壺で、肩部に数条の横位沈線文と粘土の貼瘤からなるもの（7類、同図188）、器種が壺で肩部に数条の横位沈線文、流水文を施し、沈線間に連続刺突文を施し、粘土の貼瘤を装飾するもの（8類、同図189）に細分類できる。多くが砂沢式、青木畑式に相当すると考えられるが、1、3、4、7類の一部は貼瘤の装飾から大洞A'式に含まれる可能性がある。

近隣では宮古市芋野Ⅱ遺跡、千鶏Ⅳ遺跡で1～7類の土器が出土している。8類は最近では東和町滝大神Ⅰ遺跡に類例がある。

Ⅵ群土器は丁寧に磨かれた器面に間隔の空いた燃糸文を斜走、縦走している土器で、赤穴式である。間隔の空いた燃糸文は他に第11図6、第26図12、第33図243があるが、器面は磨かれていない。Ⅵ群土器は芋野Ⅱ遺跡に比較的多く出土しているが、全容がわかる資料は出土していない。

Ⅶ群土器は器形、器面調整の側面から細分類した。口縁部の断面に段があるもの（1類、第9図3、第17図1、第19図7、第27図11～15、第32、33図198～213）、口縁部はやや内湾気味に外に開き、頸部は緩く外反し、胴部は膨らむ器形のもの（2類、12号土坑埋設土器）、原体圧痕文を施すもの（3類、第33図227）、口唇部に抉り、双山、指頭圧痕を施し口縁部は無文、胴部は縄文を施すもの（4類、第11図3、第26図8、第27図16、第33図231～235、237）、胎土、調整、文様が4類に類似しているもの（5類、第26図25、26、第27図15、第33図236、238～242）、である。1類は複合口縁と総称される土器群で、Ⅲ群11類と関連するものが含まれている。段の作出もⅢ群11類同様、3種ある。2類は器形の特徴からみると後期前葉、葦窪遺跡に代表される狩猟文土器、近隣では宮古市白石遺跡15号竪穴住居跡炉跡出土土器に類似している。3類土器は類例として観音堂遺跡をあげることができる。4、5類は晩期から弥生初頭の粗製土器である。4類は晩期に多くみられる。

（3）Ⅲ群1類、2類土器について

ここで、当遺跡のⅢ群1類、2類土器について追記する。Ⅲ群1類とした第18図1は後期前葉の、時間的に位置づけの難しい土器である。各文様帯について概観し、帰属時期の可能性を略述する。

第18図1の文様については21、22ページのとおりでここでは簡略する。文様帯は基本的に三帯であるが、口縁部文様帯は二つに分割することもできる。口縁部文様帯（以下、Ⅰ文様帯）上部は連続刺突がある隆帯と枠状の区画文で、下部は3条の波状沈線文である。なお、波状口縁は口径から類推すると8～10単位と思われる。頸部文様帯（以下、Ⅱa文様帯）は波頂部に口縁部文様帯下部から垂れ下がる感じの渦巻文である。胴部文様帯（以下、Ⅱ文様帯）は縦位区画文、縦位の連続渦巻文を交互に配置し、縦位区画文を中心にタスキ掛け状（「×」状）文が展開し内部には対向する楕円状の沈線が引かれている。また、Ⅱ文様帯下端には横位の平行沈線文内にクランク状、弧線状の沈線を配している。

Ⅰ文様帯の二段構成は相伴土器に下部だけをⅠ文様帯にするもの（第19図3）があることから、文様帯の重畳性を意味していることが分かる。多単位波状口縁で本例のように枠状の区画文があるものは岩手県卯遠坂遺跡、青森県沖附1・2、中の平、小田内沼1、小牧野遺跡、秋田県十腰内、大湯、伊勢同岱遺跡などに見られ、十腰内Ⅰ群土器（磯崎 1968）にもあることから、後期前葉の文様要素としては定着している。Ⅱa文様帯にある渦巻文は小田内沼1に好例があるが、胴部の連続渦巻文をも含めると青森県近野、上尾駮遺跡、先の大湯遺跡などに見られ、本例のように入り組まずに縦位に渦巻文を連続するものは岩手県湯舟沢遺跡などやや限られる。Ⅱ文様帯にある縦位区画文は先の卯遠坂遺跡の他、湯舟沢、中の平、小牧野遺跡、十腰内Ⅰ群土器、青森県田面木平遺跡な

どに見られる。タスキ掛け状のように斜位の平行沈線を縦に繰り返す文様は先の湯舟沢、近野、中の平、上尾駈、大湯遺跡などに見られ、楕円状の沈線を加えた類例は散見した限り見つからなかった。しかし、モチーフを限定せずに楕円状の沈線で平行沈線間に上書きしたように見えるものだけを見ると、岩手県立石遺跡、馬立Ⅰ、秋田県北の林Ⅱ、先の湯舟沢、沖附Ⅱ遺跡などがあり、横位、斜位、方形、曲線のモチーフ間に楕円状の沈線あるいは弧線を引いて沈線間を区切っている。立石遺跡例は縦位区画文もあるが、Ⅰ文様帯はなく時期差がある。Ⅱ文様帯下端の文様は青森県清水遺跡に類例がある。

ところで、北東北地方、縄文後期後葉の編年的土器研究は資料増加により近年動きがみられた。鈴木克彦氏は十腰内Ⅰ群土器を十腰内Ⅰ式と定めて5細分し、十腰内Ⅰ式より前の型式として馬立式、湯舟沢A式を提唱している。成田滋彦氏は十腰内Ⅰ式を2つに細分し、自ら提唱した十腰内Ⅰ式以前の蛭沢式を撤回し、沖附Ⅱ式と弥栄平Ⅱ式を提唱した。

本例は個々の文様を見ると各地域の類例のように北東北という地域枠に納まる土器である。また、編年的には類例から十腰内Ⅰ式との併行期あるいはそれよりも前段階に位置付けられると思われる。さらに、本例のようにⅠ文様帯に枠状の区画文があるものに卯遠坂遺跡を例にあげたが、この土器は広義の門前式として取り上げられている(熊谷 1986)。しかし、Ⅱa文様帯はなく広義の門前式全般にもⅠ、Ⅱ文様帯もしくはⅡ文様帯で構成される以上、本例は広義の門前式からは一線を画し現状では十腰内Ⅰ式併行期に近い土器として置くのが妥当と考えられ、共伴した第19図4が多重の波状文といういわゆる大湯式に類似していることからこれを裏付けているが、今後の資料の増加により1、2段階前後することも考えられる。また、本例を例えば十腰内Ⅰ群土器の範疇にないのに十腰内Ⅰ式に包括できるかという地域性の問題が生じる。当該期の土器があまり出土していない沿岸地域においては時期尚早の問題ではあるが、今後の課題として留意しておくべきであろう。

以上、第18図1の土器を中心に扱ってきたが、この他Ⅲ群2類はボタン状貼り付けがあり古手の様相に見えるが、1類とほぼ同時期とすることもできる。3類はいわゆる蛭沢式の土器群に入るため1類より古手と考えられる。4、5類は全容が不明であるが、馬立Ⅰ遺跡と類似していると思われる。つまり、本遺跡のⅢ群土器は十腰内Ⅰ式併行期とそれより前後の3時期に分かれると考えられる。

(4) 総括

今回の調査では縄文時代を中心とする遺構、遺物が確認された。市内での後期の発掘事例は崎山貝塚、白石遺跡、近内中村遺跡があり徐々に空白を埋めつつある。白石遺跡では後期初頭の土器が出土し、本遺跡に近い近内中村遺跡では後期後葉、末葉の土器が出土していることが報告されている。本遺跡を含めた以上の遺跡により宮古地方の後期の文化が明らかになっていくものと考えられる。

この他、特記する点として中振火山灰層の検出があげられる(カラー写真3)。中振火山灰層は3層からなることが知られているが、今回の調査では中部と下部の層の堆積状況を確認した。中部、下部の層は宮古市では崎山貝塚で報告されており、本遺跡は2例目である。降下時期は定まっていないが、本遺跡では大木Ⅰ、2a式が出土し、2b、3式は出土していない。降下時期を探る直接的検証には成り得ない事であるが、一応付記しておく。

今回は長期に亘る縄文土器が出土しているが、遺構は後期と分かるものしか検出されなかった。このことは大又沢Ⅱ遺跡の一側面を垣間見ただけに過ぎず、今後の調査により更に明らかにされていくものと期待したい。

〈参考文献〉

- 高橋亜貴子 1992 「東北地方前期前葉組縄縄文について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 本間 宏 1985 「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』 1
- 小田野哲憲 1987 「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』 第5号
- 熊谷常正 1986 「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』 第4号
- 鈴木克彦 2000 「岩手、秋田県北部の後期初葉土器の編年」『岩手考古学』 12
- 鈴木克彦 1998 「東北地方における十腰内式土器様式の編年学的研究・4」『縄文時代』 9
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』 4
- 宮古市教育委員会 1989 『千鶏遺跡—昭和62年度発掘調査報告書—』 宮古市埋蔵文化財調査報告書16
- 宮古市教育委員会 1990 『崎山遺跡群IV—平成元年度発掘調査概報—』 宮古市埋蔵文化財調査報告書23
- 宮古市教育委員会 1992 『細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅱ遺跡—農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書—』 宮古市埋蔵文化財調査報告書36
- 宮古市教育委員会 1995 『崎山貝塚—範囲確認調査報告書—』 宮古市埋蔵文化財調査報告書44
- 宮古市教育委員会 1999 『千鶏Ⅳ遺跡—水産課千鶏地区漁港漁村総合整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書—』 宮古市埋蔵文化財調査報告書54
- 宮古市教育委員会 1999 『崎山貝塚第12次・13次内容確認調査概報』 宮古市埋蔵文化財調査報告書55
- 岩手県教育委員会 1979 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』 I
- 岩手県埋蔵文化財センター 1988 『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 2002 『清水遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第331集
- 大迫町教育委員会 1986 『観音堂遺跡』
- 大迫町教育委員会 1979 『立石遺跡』
- 大槌町教育委員会 1974 『崎山弁天遺跡』
- 東和町教育委員会 2000・2001 『町内遺跡発掘調査報告書XⅢ—滝大神Ⅰ遺跡Ⅰ・Ⅱ』
- 今井富士雄・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山』
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』

写 真 图 版



1. 調査区近景



2. 調査区北東部遺物包含層出土状況



3. 1号竖穴状遺構完掘



4. 2号竖穴状遺構検出状況



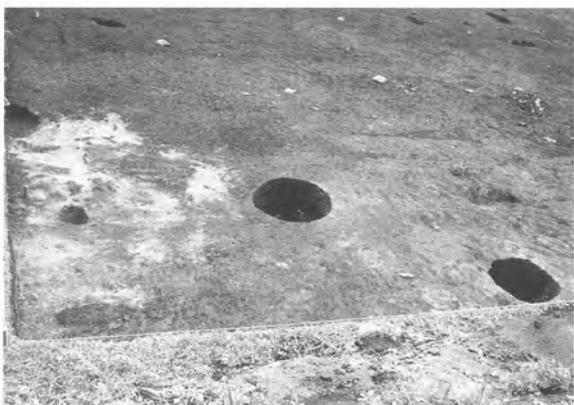
5. 3号竖穴状遺構完掘



1. 3号竖穴状遺構炉跡出土状況



2. 3号竖穴状遺構炉跡完掘



3. 1~4号土坑完掘



4. 2号土坑完掘



5. 8・9号土坑完掘 10号土坑出土状況



1. 8号土坑完掘



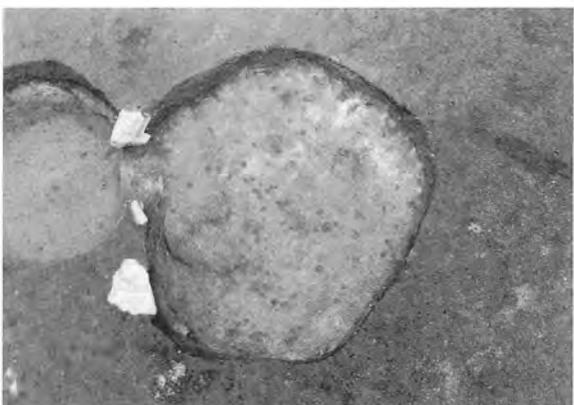
2. 9号土坑完掘



3. 10号土坑出土状况



4. 10号土坑「P 1」土器出土状况



5. 10号土坑完掘



6. 12号土坑出土状况

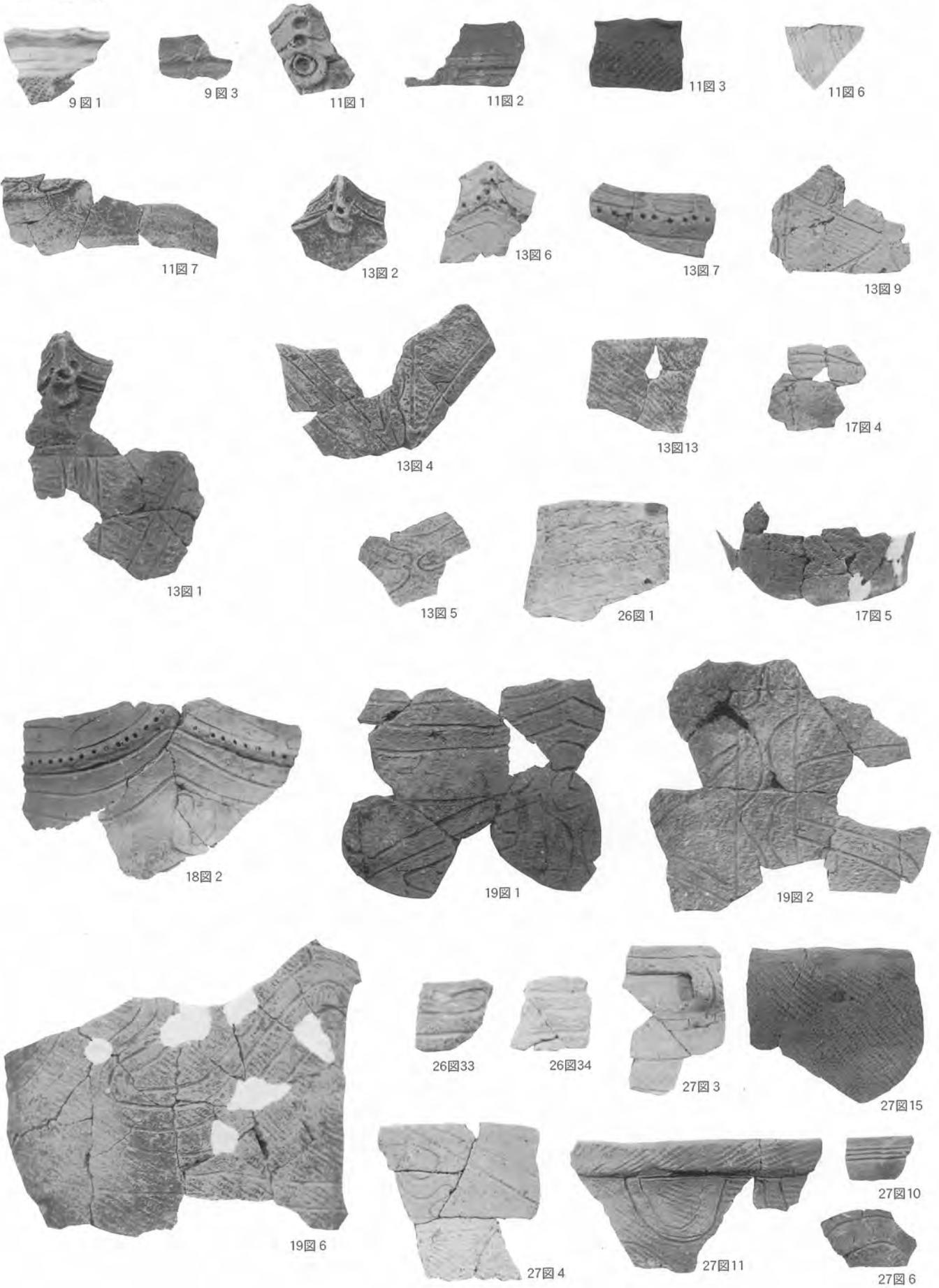


7. 12号土坑土层断面



8. 包含层内出土状况

PL 4



出土遺物 (1)



28図 1



28図 3



28図 5



28図 6



28図 15



28図 2



28図 4



28図 16



28図 36



28図 34



28図 32



28図 38



29図 42 口縁部~胴部



29図 43



29図 44



29図 45



29図 51



29図 53



29図 50



29図 55



29図 54



29図 57



29図 58



30図 62



30図 65



30図 76



30図 81



30図 90, 91



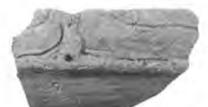
30図 92



31図 129



31図 135



31図 142



30図 88



31図 131



31図 132



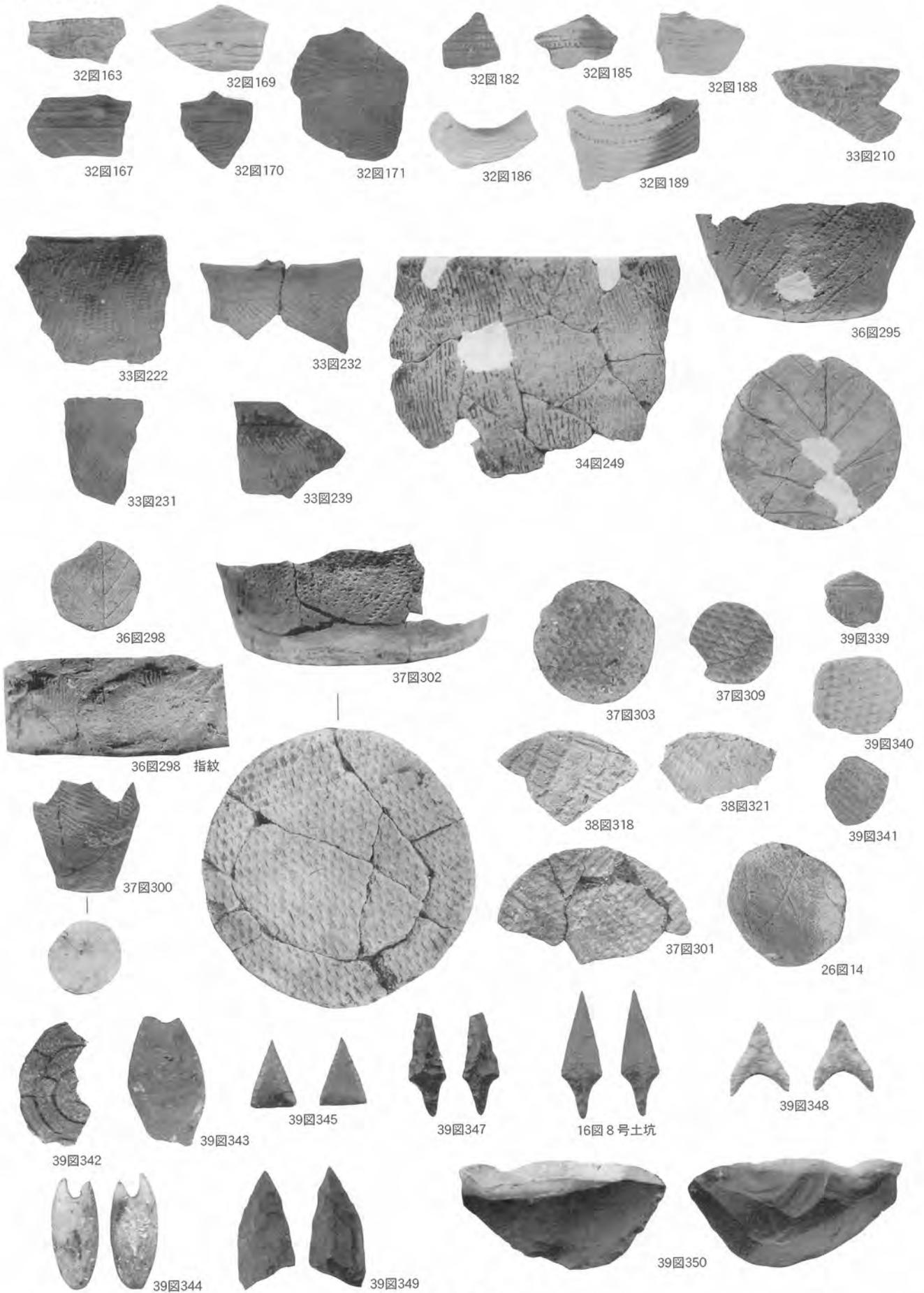
31図 140



32図 155

出土遺物 (2)

PL 6



出土遺物 (3)



40图351



40图352



40图353



40图354



40图355



41图361



第20图 12号土坑
埋設土器



機能面



第18图 1 10号土坑

出土遺物 (4)

報告書抄録

ふりがな	おおまたざわⅡいせき							
書名	大又沢Ⅱ遺跡							
副書名	東北電力宮古ヘリポート移設工事関係発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	59							
編著者名	江口 邦泰							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号 TEL.0193-62-2111 FAX.0193-63-9119							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおまたざわⅡ 大又沢Ⅱ	いわてけんみやこし 岩手県宮古市 せんとくあざおおまた 千徳字大又 14-3, 4, 6	03202	LG22-2226	39°39′18″	142°54′54″	試掘調査 20010900 ~20011000 本調査 20020400 ~20020700	1,791㎡	ヘリポート の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大又沢Ⅱ遺跡	遺物散布地	縄文、弥生	竪穴状遺構、土坑、 遺物包含層		縄文土器（前期・中期 ・後期・晩期） 弥生土器（初頭・後期） 土製品 石製品 石器（石鎌・打製石斧 ・磨製石斧など）		中振火山灰層の検出	

宮古市埋蔵文化財調査報告書一覧

1 1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』	34 1992 『鯉沢遺跡群－平成2年度発掘調査報告書－』
2 1980 『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』	35 1992 『大付遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』
3 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』	36 1992 『細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅱ遺跡 －農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』
4 1984 『宮古市遺跡分布調査報告書2』	37 1992 『崎山遺跡群Ⅵ－平成3年度発掘調査概報－』
5 1984 『赤前遺跡群第1次・第2次発掘調査報告書』	38 1993 『萩沢Ⅱ遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』
6 1985 『宮古市遺跡分布調査報告書3』	39 1993 『早稲橋Ⅱ遺跡－第1次・第2次発掘調査報告書－』
7 1985 『金浜館跡発掘調査報告書』	40 1993 『崎山遺跡群Ⅶ－平成4年度発掘調査概報－』
8 1986 『宮古市遺跡分布調査報告書4』	41 1994 『崎山遺跡群Ⅷ－平成5年度発掘調査概報－』
9 1986 『宮古市遺跡分布図－昭和60年度版－』	42 1995 『赤前Ⅰ牛子沢遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』
10 1986 『中谷地・島田遺跡調査報告書』	43 1995 『磯鷗館山遺跡発掘調査報告書』
11 1987 『崎山貝塚・トノ木Ⅳ遺跡調査報告書』	44 1995 『崎山貝塚－範囲確認調査報告書－』
12 1987 『寒風・早稲橋Ⅳ遺跡調査報告書』	45 1995 『笹沢Ⅰ・加村・仲組Ⅲ・塚ノ神遺跡 －市道浦の沢線改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』
13 1987 『崎山遺跡群Ⅰ－昭和61年度発掘調査概報－』	46 1995 『花原市遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』
14 1988 『青猿Ⅰ・下在家Ⅱ・千徳城遺跡群(堀合館) －昭和62年度発掘調査報告書－』	47 1995 『宮古市内遺跡発掘調査概報Ⅰ 早稲橋Ⅱ遺跡・崎山貝塚』
15 1988 『崎山遺跡群Ⅱ－昭和62年度発掘調査概報－』	48 1996 『大付遺跡－平成5年・6年度発掘調査報告書－』
16 1989 『千鶴遺跡－昭和62年度発掘調査報告書－』	49 1997 『花原市遺跡－平成8年度発掘調査報告書－』
17 1989 『トノ木Ⅰ遺跡－第1～7次発掘調査報告書－』	50 1997 『白石遺跡－第6次発掘調査報告書－』
18 1989 『崎山遺跡群Ⅲ－昭和63年度発掘調査概報－』	51 1998 『赤畑・天神山・山口館 －北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書－』
19 1989 『高根遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』	52 1998 『藤畑遺跡－平成9年度発掘調査報告書－』
20 1989 『狐崎Ⅱ遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』	53 1999 『赤前Ⅲ・赤前Ⅳ八枚田・赤前Ⅴ柳沢・赤前Ⅵ釜屋沢・小堀内Ⅲ遺跡 －水産課津軽石環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』
21 1989 『崎山トノ木Ⅳ遺跡－昭和63年度調査報告書－』	54 1999 『千鶴Ⅳ遺跡 －水産課千鶴地区漁港漁村総合整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』
22 1990 『狐崎遺跡－平成元年度発掘調査報告書－』	55 1999 『崎山貝塚-第12次・13次内容確認調査概報』
23 1990 『崎山遺跡群Ⅳ－平成元年度発掘調査概報－』	56 2000 『木戸井内Ⅱ・木戸井内Ⅲ・上村Ⅲ遺跡 －特別高圧送電線ラサ工業宮古支線新設工事関係埋蔵文化財調査報告書－』
24 1990 『磯鷗館山遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』	57 2002 『山口館跡－北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書－』
25 1990 『飯ノ崎館山貝塚－平成元年度発掘調査報告書－』	58 2002 『小沢Ⅱ大上遺跡－市内遺跡発掘調査報告書2－』
26 1991 『崎山遺跡群Ⅴ－平成2年度発掘調査概報－』	59 2003 『大又沢Ⅱ遺跡－東北電力宮古ヘリポート移設工事関係発掘調査報告書1－』
27 1991 『青猿Ⅰ・千徳城遺跡群－平成元年・2年度発掘調査報告書－』	60 2003 『上根井沢Ⅰ遺跡、沼里遺跡－市内遺跡発掘調査報告書3－』
28 1990 『熊野町遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』	61 2003 『早稲橋Ⅱ遺跡第6次調査－市内遺跡発掘調査報告書4－』
29 1991 『弘川Ⅰ遺跡－平成2年度発掘調査報告書－』	62 2003 『下左家Ⅰ遺跡－平成14年度発掘調査報告書－』
30 1992 『金浜Ⅰ遺跡(昭和58年度)・大付遺跡(平成2年度) 発掘調査報告書』	
31 1992 『重茂館遺跡群-第1次調査報告書-』	
32 1992 『黒森町Ⅰ遺跡－平成2年度発掘調査報告書－』	
33 1992 『高根遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』	

宮古市埋蔵文化財調査報告書 59

おおまた ざわ Ⅱ いせ き
大又沢Ⅱ遺跡

－東北電力宮古ヘリポート移設工事関係発掘調査報告書－

平成15年3月31日発行

発行 岩手県宮古市教育委員会
〒027-8501 宮古市新川町2番1号
TEL.0193-62-2111

印刷 株式会社文化印刷
〒027-0037 宮古市松山5-13-6
TEL.0193-62-4578

